

再び頭髪部癌腫ニ就テ(頭髪部角化性癌腫ノ病理追加)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30947

再ビ頭髮部癌腫ニ就テ(頭髮部角化性癌腫ノ病理追加)

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

助手 茶 谷 良

目 次

- 一、緒 言
- 二、實驗例
- 三、所見總括並ニ意見
- 度
- 頭髮部角化性癌腫ノ頭蓋骨並ニ頭蓋内組織ニ對スル態
- 頭髮部角化性癌腫ノ遠隔的増殖
- 所謂側性増殖ノ知見補遺
- 扁平上皮癌腫ニ於ケル游走細胞殊ニ「エオジン嗜好細胞浸潤並ニ其意義
- 癥痕組織ト癌發生トノ關係
- 四、本篇ノ梗概

一、緒 言

(363)

曩ニ頭髮部皮膚ニ原發セル角化性扁平上皮癌腫ノ症例ヲ検査シ、其所見ニ基キテ此部ニ於ケル角化性癌腫ノ病理ニ關シ、聊カ卑見ヲ述ベシコトアリ⁽¹⁾。ソノ當時既ニ一言セルガ如ク、此部ガ他部ノ皮膚ト異ナレル造構並ニ局所的關係ヲ有シ、其病變ニ特殊ナル點存スルコト明白ナルモノアルニモ係ラズ、該部ニ原發セル此種癌腫ノ系統的ニ檢索記載セラレタルモノ殆ンド無ク、僅カニ統計的觀察、治驗例等ガ少數ニ散見セラル、ニ過ギズ。且余ノ檢シタル所モ僅カニ三例ニ過ギザリシヲ以テ、知見尙全カラズ、種々ノ點ニ講究ヲ要スルモノ少ナシトセズ。殊ニ其骨質ヲ侵襲シテ頭蓋腔内ニ癌腫ノ増殖スルコトアルハ、成書ニモ記載セラル、所ニシテ、頭髮部癌腫ノ増殖ニ關スル事項中最モ注意ヲ要スルモノナルモ、而モ其精細ナル檢索ニ至リテハ殆ンド存セザルガ如ク、此方面ニ於ケル重大ナル缺陷ヲ示スモノ

タルニ似タリ。臨床醫學ニ於テ近時長足ノ進歩ヲ遂ゲタルモノ、一ハ所謂腦外科ニシテ、殊ニ腦腫瘍例ノ治驗モ漸ク多キヲ加ヘントシ、從ツテ頭蓋内ニ於ケル腫瘍組織ノ増殖態度ニ關シテハ決シテ等閑ニ附スベカラザルモノアリト信ズ。就中頭蓋内ニ増殖セル頭髪部癌腫ニハ、頭蓋骨並ニ腦組織ニ原發セル腫瘍組織ノソレト相似タル治療的効果ヲ齎スベキ可能性アリト思考シ得ベキ點アルヲ以テ、其増殖蔓延ニ關スル考察ハ當ニ腫瘍學上興味アルノミナラズ、一面臨床醫家ニ參考トナル點亦少ナカラザルベシ。而シテ余ノ曩ニ検査セル症例中一例ニ於テハ、如斯頭蓋内増殖ニ對シ聊カ考察ヲ試ムルコトヲ得タリ。今回更ニ同様ナル癌腫ノ三例ヲ検査スルノ機會ヲ得、種々ナル點ニ於テ前報告所述ノ卑見ヲ確認シ得タルノミナラズ、癌腫組織ノ頭蓋骨及頭蓋内組織ニ對スル態度ニ就テモ稍精細ニ検査スル所アリ、且所謂側性増殖、轉移、「エオジン嗜好細胞浸潤、瘢痕組織ト癌發生トノ關係等ニ就テモ講究スル所アリシヲ以テ、以下項ヲ追ヒテ記述スル所アラントス。尙同時ニ他部ノ皮膚ニ原發セル角化性癌腫ノ一例ヲモ檢セルヲ以テ、茲ニ並記シテ殊ニ其組織像ヲ彼此相對照スルニ便セリ、又以テ頭髪部癌腫ニ對スル見解ヲ明確ナラシムルニ與ル所無キニ非ザルベシ。

二、實 驗 例

材料 第二例ハ剖檢後、其他ハ何レモ外科的ニ切除セラレテ Kautlin's 氏液又ハ「フオルマリシ液中ニ貯藏セラレタルモノナリ。
検査方法 前報告ニ記載セル所ニ畧等シキヲ以テ此ニ細說セズ。唯特殊ナルモノハ其項下ニ記述スベシ。

第 一 例

林○太○ 男 四三歳、農業。

病歴 大正十三年十二月廿日入院(金澤醫科大學附屬醫院第一外科)。

診斷 「カンクroid」。

主訴 頭部ノ腫瘍。

既往症 生來健ニシテ酒ヲ嗜ム。家族關係ニ癌腫ニ罹患セルモノ無シ。

現病歴 三歳ノ頃後頭部ニ火傷ヲ受ケ徑約五釐ノ瘢痕ヲ以テ治癒セリ。

大正十三年三月癩痕部ニ瘙痒感アリ、搔破セル爲メニ此部ニ潰瘍ヲ生ジ、漸次周圍ニ組織ノ増殖ヲ來シ、胡桃大トナリ、六月二十六日醫師ヨリ切除

手術ヲ受ケタリ。而モ其後組織ハ再ビ増殖シ今日ノ狀ニ及ベリ。

現症 體格長、榮養中等、皮膚ハ少シク汚穢色ヲ呈セリ。呼吸、消化、泌尿、生殖器、神經系統ニ異常無シ。主訴ノ病竈ハ顛頂部ヨリ後頭部ニ亘リテ存シ、大サ手掌大ニシテ乳嘴狀ニ組織ノ増生セル部アリ。其面濕潤シ惡臭ヲ放テリ。

處置及經過 十二月二十二日腫瘍部周邊ノ皮膚約一糎ヲ距テ、健康皮膚組織ノ部ニ切開チ施シ、腱膜組織チ骨組織ヨリ剝離シ切除セリ（第一標本）。其際腫瘍中央部ノ底面拇指頭面ニ倍大ノ部ハ骨面ト癒着ヲ現ハセリ。該癒着部ヲ焼灼シテ止血シ、沃度フォルムガーゼヲ充填シテ手術ヲ了ヘタリ。其後腫瘍ト骨面トガ癒着ヲ現ハセシ部ハ再ビ強キ肉芽ヲ發生シ來リ、扁平腫瘍狀ニ増生ヲ來セルヲ以テ、十四年三月六日再ビ此部ニ觀血的處置ヲ行ヒ該肉芽組織ヲ切除シ（第二標本）、骨トノ癒着部ハ槌ト鑿トヲ以テ切除セリ。然ルニ其後頭痛、嘔吐、上下肢ノ知覺麻痺、運動障礙等ノ症狀ヲ現ハシ、又左側頸部及鎖骨上高淋巴腺ノ腫脹ヲ來シタルヲ以テ三月十二日該淋巴腺ヲ剔出セリ。尙其他ノ症狀ハ一週間許リニシテ消退セリ。而シテ尙少シク不良ナル肉芽ハ存シタレドモ創面ハ著シク小トナリテ六月五日ニ退院セリ。

以上ハ石川外科教室主任石川教授ノ好意ニヨリ貸與セラレタル病歴中ヨリ其要項ヲ轉載セルモナリ。此ニ深謝ス。

肉眼の所見

因ニ本例標本ハ前第一外科主任田中教授ノ好意ニヨリ惠與セラレタルモノナリ、茲ニ深謝ス。

第一標本 標本ハ病竈部周邊ノ有髮皮膚○・五—一糎ト共ニ切除セラレタルモノナリ。新生物ノ大サ長徑一糎、短徑八・五糎ヲ算シ、不正橢圓形ヲナシテ皮膚ノ面ヨリ隆マレリ。其表面ハ一般ニ著シク凹凸不平ニシ

原 著 茶谷ハ再ビ頭髪部癰腫ニ就テ(頭髪部角化性癰腫ノ病理追加)

テ、就中其中央部ハ粟粒大乃至大豆大ノ灰白黃色ノ結節狀部ニヨリテ占メラレ、殊ニ大豆大或ハ斯ルモノノ數個連續シテ突出セル部ニ於テハ著シク磊塊狀ヲ呈セリ。其面ニ當リ淡褐淡赤色或ハ暗赤黑灰色ノ血液狀浸潤ヲ認メシムルモノアリ。該磊塊狀部ノ附近ニ於テ稍周邊部ニ近ク、拇指頭面大ノ著シキ凹陷部アリ、其底部ハ標本ノ裏面ニ破開セリ。而シテ此部ハ上記磊塊側ニ於テ少シク掘鑿ノ狀ヲ呈セリ、凹陷部ノ内面亦平滑ナラズ。上記表面ノ結節狀部ノ間ノ部ハ、屢々淡キ黑灰色汚穢ノ物質ヲ以テ充タサル。如斯腫瘍組織ノ周緣部(即其底部)ハ一—二糎ノ幅ニ於テ少シク光澤アル灰白色或ハ灰白白色ヲナセル皮膚組織ヲ以テ覆ハレ、其面可ナリ不平ニシテ各部表面ノ腫瘍狀部ト連ナレリ、其境界一部ハ稍不明瞭ニシテ此部汚穢ナル物質ヲ附スルアリ、一部ハ明カニ表皮組織ノ消失ヲ示シ此ニ新生組織ノ面ヲ現ハセリ。此際表皮ガ嚙ミ斷ラレタル如クナレル部アリ、又腫瘍ノ一部ヲ被覆スル如キ狀ニアル部アリ、斯ル部ニ帶褐灰白色ノ不正形ノ小斑少數ニ認メラル。而シテ此ノ如キ腫瘍ノ基底ヲ作レル部ヨリ周圍ノ有髮皮膚ニ接スル部ハ、一般ニ徐々ニ相移行スルモ、帶褐色ヲナセル該有髮皮膚ト病竈部ノソレトハ明カニ區別セラル。且此移行線ハ不正ニシテ、時トシテ可ナリニ廣ク周圍皮膚ノ部ニ侵入セルヲ認メシム。標本底面ハ灰白白色ノ腱膜組織ニ裏付ケラレ一般ニ著シキ凹凸ヲ認メズ、然レドモ上記穿孔部及附近ニ於テハ、少シク不平ニシテ一部細顆粒狀ヲナセリ。又長徑ニ於テ穿孔部ニ近ク拇指頭面大ノ彌蔓性ニ隆マレル部アリ、其一部ハ組織破ラレテ腫瘍狀ノ脆キ組織ヲ此部ニ認メシム。穿孔部及隆起部並ニ之ニ近キ部等ニ於テ、腱膜組織内ニ不正形ニ暗赤色血液狀浸潤ヲ示セリ。

ナセル間質ト、其間ニ存セル實質ノ部トヲ區別セラル。實質ハ帶褐淡紅色或ハ灰白色ヲナセル、粟粒大乃至半米粒大或ハ稀ニ少シク大ナル組織塊ノ蜂窠狀集團ニシテ、屢其間ニ微細ナル結締組織ヲ認メシメ、此纖維ハ尙太クシテ明カニ間質組織ニ續ケリ。又屢淡紅色ヲナセル實質ノ部ノ中心部ニ、点狀ニ灰白色ヲ示スモノ存ス、又甚ダ少数ナレドモ点狀帶赤灰白色ノ部認メラル。而シテ斯ル新生組織ノ基底ハ深ク腱膜組織ノ上ニ坐シ、其境界ハ一部ニ於テ明カニ認メラルルモ、一般ニハ然ラズシテ、上記ノ實質巢ハ屢浸潤性ニ腱膜組織ニ侵入セル狀ヲ認メシメ、此ニ点狀或ハ稍細索狀ヲナセル小竈ヲ營ミ、殊ニ新生物ノ中央部ニ於テハ、該組織ノ下縁ニ及ベリ。カ、ル部ニ近ク腱膜ニ、西瓜種子大ノ暗赤色血液狀浸潤部ヲ認メシム。然レドモ兩側ニ於テハ、尙可ナリノ厚サ(〇・二—〇・四)ニ腱膜組織ノ存スル部アリ。皮膚及皮下脂肪織ハ標本ノ邊縁ニ於テ略正常ノ像アリ、兩側共新生物基底周邊ノ部ニ相接シ、此部ニ於テ脂肪織及毛髮失ハレ新生組織ハ直チニ腱膜ト皮膚組織トニ迫リ、之ヲ壓迫セル狀ヲ示セリ。更ニ新生物ノ表面ニ近ツクト共ニ眞皮菲薄トナリ、反之表皮ハ肥厚ヲ現ハシ且色素ヲ失ヒテ灰白色トナリ、新生物周邊ノ上部ヨリ表面邊縁ノ一部ヲ被ヘリ。

第二標本

全體トシテ稍「ハート形ヲナシ長徑六種、短徑五種、其表面ハ不平ニシテ、粟粒大、小豆大或ハ大豆大ノ結節狀部ニヨリテ占メラレ、且過半部ハ黒灰暗赤色血液狀浸潤ヲ示セリ。邊縁ニ、拇指頭大、不正形ノ部毛髮ヲ有シ帶褐灰白色ヲナセル皮膚組織ヲ認メシム。組織ノ底面ハ不平ニシテ一般ニ血液狀浸潤ヲ示セリ。

剖面。淡黄灰白色ノ結締組織ヨリ成リ厚サ〇・三—〇・五種、所々ニ少数ニ点狀灰白色ノ部ヲ認メシムルノミ。

顯微鏡的検査所見

第一標本

新生組織ハ實質上皮細胞群及間質結締組織ヨリ形成セラル。

實質細胞 概觀スレバ角化性、非角化性細胞及其移行層(中間層)細胞ヲ分チウベシ。之等各個細胞ノ形態ニ就テ簡單ニ記サンニ(前報告ニハ可ナリ精細ニ記載シアリ)。

角化細胞ハ其斷面長紡錘形ヲナシ又壓弓形ヲナシ大ナリ、核ヲ認メシメズ。

非角化性細胞 皮膚種子層細胞ニ該當シ、明カニ胞間橋ヲ有スル細胞ナルモ、其大サ一定セズ、形態亦彼ニ比シ可ナリニ不整ナリ。略二型ヲ分チ得ベク、一ハ種子層深部ノ細胞ニ相當シ(種子層深層ト云ハン)、一般ニ原形質ニ比シ核ハ可ナリニ大ナリ、他ハ種子層上部ノ細胞ニ該當シ(種子層淺層ト云ハン)、之ト甚ク相似タル狀ヲ示セドモ、屢之ヨリ大ニシテ、其胞狀核ニハ核小體様ニ「エオジン」ニ染マレル大小體數個乃至時トシテ數十個ヲ認メシムルコトアリ。尙種子層最深層ノ一列ヲ形成セル所謂基底細胞ハ一般ニ正常ト其觀チ異ニシ、正型圓柱狀ヲナスモノアレドモ少クシテ多クハ橢圓形、紡錘形等ヲナシ、基底ニ直立セズシテ斜位ヲ取り、或ハ殆ド橫位ヲ取ルモノアリ、細胞小、原形質乏シク、胞體ニ比シ大ニシテ「クロマチン」多キ一核ヲ有シ、染色性稠著明、核小體明瞭ヲ缺クモノアリ。

一般ニ該細胞及其周圍ニ於テ「メラニン色素」ヲ含マス。而シテ之等種子層細胞ノ核ノ造機ハ、前報告ニ述ベタル如キ形態ト染色トヲ示シ、核小體ノ形態不整ナルモノアルノミナラズ、假性核仁トノ關係著シク明瞭ナラザルアリ。

中間層細胞モ亦大體皮膚ノ該層細胞ト似タル性狀ヲ有シ、即皮膚顆粒層細胞ニ該當シ「ケラトヒアリン顆粒」ヲ有スルモノ(第一型)ト、其透明層細胞ニ類似シ胞體強嗜酸性色素性ニシテ光輝アリ、扁平、橢圓形ノ「クロマチン」ニ乏シキ核或ハ其痕跡ヲ認メシムルモノ(第二型)ト存ス。

組織的造機 新生組織ノ全般ニ亘リテ概觀スルニ、上記ノ如キ實質細胞

ハ相集リテ不規則ナル大小ノ胞巢ヲ作ル、胞巢ノ稍定型的ナルモノハ、其周邊部ニ種子層細胞ヲ有シ、中部ニ角化細胞アリ、之等ノ中間部ヲ占メテ移行層細胞ヲ認メシム。然レドモ如斯序列ヲ示スコトハ多カラズシテ、多數ノ胞巢ハ顆粒層ニ相當スベキ細胞ヲ缺キ、或ハ種子層淺層ニ當ルベキ細胞認メラザルモノアリ、一般ニ角化傾向甚ダ強クシテ、胞巢ノ過半ノ部ハ角化層或ハ透明層ニ相當スル細胞ニヨリ占メラレ、乃至之等ノ細胞ヨリ成レル葱根狀體ヲ現ハシ、其周邊ニ種子層ノ數層時トシテ唯一層ノ基底細胞ヲ認ムルニ過ザルモノアリ、勿論ガ、ル部ノ種子層細胞ハ著シク扁平トナレリ。而シテ一般ニ斯ル角化ノ傾向ハ中部ノ中層ニ最も強クシテ、此部ニ最も多ク大ナル胞巢認メラレ、之ヨリ周邊ノ側ニ至ルトトモニ、胞巢ノ角化部ハ僅カニ僅少トナル傾向ヲ有セリ。尙如斯胞巢ノ外又小ニシテ唯一—二層ノ種子層ヨリ形成セラル、胞巢、或ハ尙少シク大ナルモノ認メラレ、斯ルモノハ所ニヨリ數個或ハ十數個集簇シテ現ハル、部アリ。之等ノ胞巢ニ於テ殊ニ種子層深層及之ト淺層トノ境界ニ當ル部等ノ細胞ニ、多數ノ核分割像ヲ認メシム、一般ニ正型的ノモノニシテ、母星期、子星期ニ屬スルモノ多ク、少數ニ糸綫期ニアルモノヲ見ル、之等ニ混ジテ甚ダ稀ニ非定型的分割像(多極分割、不相對性分割、イグロマチン横逸等)ヲ認メシム、其基底層ニアルモノハ必ズシモ基底ニ垂直ノ方向ニ分割セズ、斜位、横位ヲ取ルモノアリ、分割像ノ内ニハ分割ノ途中變性ニ陥レルモノアリ、又種子層淺層等ニ於テ稀ニ直接分割像ヲ認メシム。核分割像ハ一般ニ稍集簇的ニ現ハレ常ニ增殖強キ部ニ多ク存セリ。如斯著明ナル進行性ノ變性認メシムル一方ニ於テ、又著シキ退化性變化ヲ現ハシ、即種子層ニ於テ、少數ニ其細胞ガ核空胞形成ヲ現ハスモノ存ス、尙大ナル胞巢中心部ニハ細胞浸潤(後述)ヲ來シテ組織崩壞シ、或ハ角化細胞破片ト遊走細胞トガ混在シテ大ナル竈ヲ形成シ、實質ハ甚ダ狹キ帶狀ノ組織トシテ、著シク壓迫セラレタ

原 著 茶谷 再ビ頭髮部癩腫ニ就テ(頭髮部角化性癩腫ノ病理追加)

ル狀ニ存スルモノ少カラズ。而シテ斯ル崩壞部或ハ然ラザル角化部ニ於テ、石灰沈着ヲ來シ、不正微細顆粒狀、或ハ略同質性ニ鹽基性色素嗜好性ヲ現ハセル大小ノ部ヲ形成セリ、而シテ屢上記中部中層ノ大ナル胞巢中ニ、カ、ル變性認メシム。如斯石灰沈着ヲ現ハセル胞巢ニシテ尙增殖性強キコトヲ認メシムルモノ無キニアラザルモ、一般ニ斯ル胞巢ハ種子層甚ダ菲薄ナリ。間質ハ大部分真皮組織ヨリ成リ、及新生組織ノ下部ニ於テハ一部腓膜組織自個ヨリ形成セラル。一般ニ可ナリニ細胞ニ富メル纖維性組織トナリ纖維ノ方向ハ錯雜セリ。而シテ所々少數年ヲ核分割像ヲ有シ、或ハ更ニ幼若ナル結締組織ヨリ成レル部アリ。然レドモ斯ル部ハ又遊走細胞浸潤ヲ來タシテ鬆粗トナリ、加之一部ニ於テハ粘液組織様ニ鬆粗トナレル部アリ、殊ニ增殖性強キ胞巢ガ不規則ナル增殖ヲ營メル間ノ部ニ見ラル。一般ニ大ナル胞巢ガ集レル部ニ於テハ、其部ノ纖維性間質組織ハ少ナケレドモ、小索並ビ存スル部ニハ可ナリニ豐富ナル觀アリ。間質ヲナセル部ニハ小動脈管ノ性状ヲ有スルモノ可ナリ多數ニ殘存シ、且毛細管就中其新生セラレタルモノモ多ク認メラル。之等ノ血管ハ屢充盈シ、或ハ一部ニ於テ組織内血液浸潤ヲ現ハセリ。加之動脈管ニ於テハ其内膜ガ可ナリニ強ク纖維性ニ肥厚セルモノアリ。

如斯結構ヲ有スル新生組織ハ、外方ニ向ヒテ增殖スルノミナラズ、深部及側方ニ真皮組織ヲ侵襲シ、更ニ下方腓膜組織ニ向ヒテ不羈ナル增殖ヲ營メリ。其上皮索及間質ガ上下ノ方向ヲ取ルモノアレドモ、必ズシモ然ラズ一般ニ甚ダ不整ニシテ索狀、巢狀等ヲナセル上皮群ガ種々ナル方向ニ錯雜セリ。而シテ胞巢大ニシテ壓迫性ニ增殖スルモノ多ケレドモ、又之等ノモノヨリ細長ナル上皮索ヲ分歧シ浸潤性ニ組織間隙ヲ進メルモノ少ナカラズ。

新生組織ノ基底ニ座スル腓膜組織ハ、豐富ナル纖維性物質ヲ有スル強キ

結締組織ヨリ成リ、其太キ纖維間ニ造結締細胞或ハ毛細管内被細胞ヲ可ナリ多數ニ認メシム。一部ノ毛細管ハ充盈シ網狀ヲ呈スル部アリ、又其骨膜面及之ニ近キ部ニ於テ可ナリ廣汎性ニ、其他ノ一部ニモ僅カニ組織内ニ血液浸潤ヲ示セル部アリ。實質胞巢ハ該腱膜組織ノ表層ノミナラズ、新生組織ノ中部ニ於テハ、其大部分ヲ侵襲シ、一部ニ於テハ其全層ニ亘リテ壓迫性或ハ浸潤性ニ増殖セリ、殊ニ其小索ヲナスモノハ、毛細管其他ノ小血管ノ周圍ニ於ケル淋巴腔ヲ傳ヒテ、其質纖維ノ方向ニ浸潤スルモノ少ナカラズ。之等ノ侵襲部ニ當リ、及之ニ近キ部ニ於テ、肉芽性變ヲ呈スル部アリ、或ハ圓形細胞浸潤ニヨリ纖維鬆粗トナリ、此部ニ實質巢ノ侵入スル像又見ラル。然レドモ又大ナル胞巢ヲナスモノニアリテハ、其周圍ニ當レル僅少ノ其實組織が粘液組織様ニ鬆粗トナレルコト多シ。一般ニ腱膜組織ハ正常ノ方向ヲ取ルモ、新生組織ノ増殖部ノ附近ニ於テハ、一定ノ範圍ニ亘リ、間質締縮纖維ノ走行ノ錯雜ト、増殖ノ像乃至上記ノ如キ變ヲ認メシム。

新生組織ノ表層部ニハ一般ニ細胞浸潤強ク、且此部ノ實質索ハ殊ニ種子層ト角化層トノ間ニ壓間隙ヲ生ジ、此部ニ液狀物質ノ存在ヲ認メシム。而シテ其表面ノ大部分ハ細胞浸潤ヲ示セル頹敗セル角化物質、實質乃至間質組織ヲ面ニ曝露シ、周邊ノ一部ノミ表皮組織ヲ以テ覆ハル。而シテ肉眼上面ニ突隆セル大小ノ結節狀部ハ、主トシテ細胞浸潤ト新生血管トヲ伴ヘル肉芽樣間質及不規則ナル實質胞巢ヨリ構成セラレ、其内大ナル一個ニ於テハ表皮組織ヲ以テ覆ハル、モ(後述)、其他ハスルコト無クシテ、角化物質或ハ又實質細胞巢が薄ク表皮様ニ面ヲ覆ヘル部アリ。

新生組織が其周邊ニ於テ周圍ノ皮膚組織等ニ對スル態度ヲ鏡下ニ檢スルニ、其兩側ニ於テ多少ノ差ハアレドモ、一般ニ略相近キ像ヲ呈シ、即新生組織ハ増殖ヲ現ハセル皮膚表皮組織ニ接近シテ、其下方ニ於テ眞皮最表層

ノ部ニ増殖ヲ營ミ、加之眞皮中層、下層並ニ更ニ深部ニ存スル膜腱表層ノ一部等ニ向ヒテモ、不羈ナル態度ヲ示シテ増殖セリ。而シテ之等ノ部ニ於ケル實質細胞巢ハ大ナル群團ヲナシ、壓迫性ニ増殖シ、此部ニ角化性葱根狀體ヲ形成スルモノアリ、又小ナル細胞が單列乃至二三列等ノ細索ヲ作リテ殊ニ其組織纖維ノ方向ニ、組織間隙ニ侵入セルヲ見ル。此際侵襲セラレル眞皮並ニ腱膜組織ハ、壓迫性細胞浸潤ヲ示シテ鬆粗トナリ、此部ニ向ヒテ實質索ノ侵入ヲ示シ、又纖維密邇シ且其方向錯綜シテ、新生組織ニヨリ壓迫セラレ、トトモニ、多少ノ度ニ増生ヲモ現ハセル像屢認メラル。而シテ皮下脂肪組織ハ新生組織ニ最も近キ部ニ於テハ全ク失ハレ、之ヨリ少シク距タレル部ニ於テハ、該組織ノ其實ハ著シク纖維性ノ組織トナリ其間ニ僅カニ脂肪細胞ノ混在スルガ如キ狀ヲ示シ、或ハスル部ニ更ニ圓形細胞浸潤ヲ示シテ鬆粗トナレリ。新生組織索ノ如斯部ニ向ツテ侵入スルモノアリ、斯ル際皮下脂肪織中ニ存スル毛根部或ハ之ニ近キ造構ヲ有スル部が、上記實質索ノ侵入ヲ蒙レル部ニ殘存シ、細胞、核、全形共ニ稍小ニシテ萎小ヲ現ハセルモノアリ、或ハ毛幹ノ一部斷面ヲ眞皮中層、上層ニ相當スル部ニ認メシムルモノアリ。之ト共ニ脂腺、汗腺が新生組織ノ周邊部ニ近キ間質中ニ認メラル、モノアリ、之等ノモノハ屢々壓排性ニ増殖スル實質組織ニヨリテ壓迫セラレタル如キ狀ニ存シ、變形又ハ萎小シ、進行性ノ像ハ殆んど全ク認メラレズ。但新生組織侵襲ノ周邊部ニ近キ眞皮組織中ニ於テハ、之等ノ組織ハ壓迫セラレテ多少密邇ナル觀ヲ呈シ、之等ノモノノ周圍ノ眞皮組織ニ細胞浸潤ヲ來シ、或ハスル部ト新生組織侵襲部トノ間ノ其實組織ニ夥シキ圓形細胞集積ヲ示セリ。而シテ斯ル部ニ於テハ之等ノ上皮性組織ノ萎小ハ殆んど認メラレズシテ、稀ニ一部ノ上皮細胞ハ核分割像ヲ示セルモノアリ、又脂腺組織ノ脂肪化細胞ハ少ナクシテ、其基底ニ近キ部ヲナセル脂肪化セザル細胞却ツテ多シ。一般ニ斯ル上皮性組織が新生實質細胞中ニ

殘存スル場合、ソレ等ノモノガ著シク散在性ニ存スルコトハ稀ナリ。尙如斯像ヲ示セル部或ハ新生組織ノ侵襲ニ當レル部ノ真皮表層部ニ於テ、稀ニ起毛筋纖維ノ存スルヲ認メシム、該纖維ニハ著變ヲ認メシメズ、實質細胞ハ其周圍ノ組織中ニ僅カニ認メラル、モ、特ニ該纖維ヲ圍繞スルガ如キ特殊ノ像ヲ認メシメズ。如斯新生組織ノ周邊部ノ表皮下ノ部、殊ニ表皮肥厚ト乳頭間上皮下索ノ吻合ヲ現ハセル部(後述)ノ下部又ハ長キ表皮索ノ間ニ當リテ真皮組織中ニ、著シク充盈セル小血管ノ認メラル、部アリ、斯ル部ヨリ更ニ外方ニ於ケル皮膚真皮組織ハ唯真皮上層ニ於テ、多少ノ圓形細胞浸潤ノ存スル外、直接新生組織ニ關聯セル變ヲ認メシメズ。次ニ表皮組織ノ狀態ヲ見ルニ、兩側ニ於テ少シク差アリ。一側ニ於テハ上述真皮が新生組織ノ侵襲ヲ蒙レル部ヨリ更ニ外方ニ於テ、先ヅ表皮層ノ肥厚ト乳頭間上皮下索ノ延長及肥厚トヲ現ハシ來リ、新生組織ノ邊緣部ヲ覆フガ如キ部ニ至レバ、全ク毛髮脂腺、汗腺組織ヲ失ヒ、反之乳頭間上皮下索ハ稍密トナリ相互ニ吻合ヲ營ムニ至ル。如斯ニシテ肥厚ヲ増スト共ニ基底細胞ニ於ケル「メラニン色素」ノ存在及含量ハ、一様ナラザルニ至リ、著明ニ之ヲ含メル部アリ、又之ニ反スル部アリ。之ト共ニ真皮上層ノ「クロマトフォール」ノ數、大サ、色素含量モ少シク不揃ヒトナリ來リ、所ニヨリ真皮ニ「クロマトフォール」ヲ見ラル、ニ反シ表皮ニハ殆ンド「メラニン色素」ヲ缺キ、或ハ之ニ反スル像アリ、真皮、上皮共ニ多量ノ色素ヲ含メル部アリ、上皮細胞間ニ存スル色素含有性有偏足性細胞ノ數モ一定セズ。如斯狀ヲ呈シテ肥厚セル表皮組織ハ、正常頭部表皮及乳頭間上皮下索ノ三―四倍ノ大サヲ有シテ、新生組織周邊部ノ上部ヲ覆ヒ、其間實質組織ハ之ニ接近スレドモ、接著或ハ吻合等ヲナセル部ハ少シモ存セズ。而シテ斯ル部ノ新生組織ヲ覆ヘル端ノ部ニ至レバ、新生實質上皮下索ノ著シク接近セル部ニハ、表皮層ハ急ニ其厚サヲ減シ、乳頭間上皮下索ハ細小トナリ且下方ヨリ壓セラレテ、表皮層ト平行スル

如キ方向ニ置カレテ存ス、而シテ一般ニ上皮細胞モ小トナリ、「メラニン色素」ヲ含マズ、核造構ハ可ナリニ明カニシテ、空胞形成等ノ變モ認メラレズ、此際真皮ニハ尙「クロマトフォール」ヲ認メラル。如斯ニシテ新生組織自個ガ表面ニ曝露セラル、部ニ對シテ存スル表皮組織ノ最端部ハ、角化組織ノ厚サヲ増シ且種子層ニ相當スル細胞ノ萎小扁平化ガ著明トナレル一方其種子層深層部殊ニ基底細胞層ハ稍急ニ其細胞配列不整ニ且疎トナリ細胞又少シク大トナリ、此部ヨリ真皮ニ向ヒ細長ナル二個ノ上皮下索ヲ表皮下ニ沿ヒテ送り、細胞ハ一般ニ橢圓形、長橢圓形ニシテ配列亦粗ナリ。然レドモ其核造構ハ表皮組織ノソレト著シキ差異無シ。而シテ斯ル表皮組織ノ連續部ト新生組織竈トハ僅カノ間質組織ニヨリ距リ、連續切片ニヨリ檢スルモ兩者ノ連續セルモノナル像ハ存セズ、但シ其表面ニ於テハ、前記角化層ハ、著明ニ萎小シ扁平トナレル上皮下層ニ裏付ケラレツ、他方新生組織索ニ接著シ其面ヲ覆ヘリ。更ニ他方ニ於ケル表皮組織ハ、腫瘍ノ隆起セル部ニ近ク、肉眼上僅カニ溝狀ニ低マリシ部ニ近キ所ヨリ、上述他側ニ於ケル如ク漸ク肥厚ト次テ乳頭間上皮下索ノ吻合トヲ生ジ、之ヨリ腫瘍部ノ表面ヲ覆フト共ニ益々著シクナリ、漸クニシテ大ナル角化織ガ表面ヨリ組織内部ニ且リテ存スル部ニ至リ、表皮ハ之ニソヒテ内方ニ連リ、次第ニ新生組織竈ノ部ニ移行セリ。但シ斯ル移行部ニテハ表皮索非薄ニシテ、基底細胞ノ如キモ斜位或ハ橫位ヲ取り、其胞體、核造構等角化性葱根狀體ノ部ニ見ラル、モノニ彷彿タリ。上記大ナル角化織ヲ距テ、更ニ新生組織ノ表面ヲ覆ヘル表皮組織アリ、亦肥厚ヲ現ハシ、一部ノモノハ真皮組織ト共ニ覆狀平扁ニ新生組織ノ表面ニ隆マレルモノアリ、而シテ其端ノ部ハ、不羈ナル增殖ヲ營メル新生組織索ニ連リ、其移行部ハ又非薄ナリ。之等ノ表皮組織ニ於ケル「メラニン色素」及真皮「クロマトフォール」ノ關係ハ前記他側ノ部ニ相同シ。尙腫瘍表面ノ一部ニ突出セル結節狀部ニ於テ認メラレタル外

面被覆表皮組織(前記)モ亦増殖ヲ現ハセドモ、其度ハ著シカラズ、其基底細胞ノ部ハ波狀ヲ呈シ乳頭間上皮下索ヲ認メシメズ、又「メラニン色素ヲ缺キ、真皮ニ僅カニ「クロマトフォール」認メラル、ノミ、其周邊部ニ於テ、一方ハ菲薄ナル表皮層ヲ以テ實質上皮下索ニ連リ、他方ハ細胞浸潤ヲ示シテ壞死セル角化層ノ部ニ連レリ。

其他新生組織ノ周邊ニ近キ基底部周邊ノ真皮組織其他本組織ノ間質中ニ往々神經纖維ノ断面ヲ認メシム。其新生組織中ニ存スルモノ及之ニ近ク存スルモノニ於テハ、屢新生組織索ガ細索ヲナシテ之ヲ圍繞シ、殆ンド全ク或ハ其半ヲ包メル如キ形ヲナセリ。此際周圍神經鞘ハ極メテ僅カナレドモ肥厚ヲ現ハセルモノアリ、神經纖維自個ニハ變ヲ見ズ。而シテ神經鞘附近ノ組織ニ細胞浸潤ヲ示セル際ニハ此鞘ノ周圍ニモ同様ノ浸潤ヲ認メシムルモ、然ラザル際ニハ神經纖維及鞘ニハ殆ンド何等ノ變ヲ見ズ、然レドモヨク新生組織細胞ノ外套狀ニ圍繞浸潤スルハ認メラル、所ナリ。殊ニ其附近ニ當リ何等實質細胞團ノ存在ヲ認メズシテ、新生組織ノ基底ヨリ少シク距タレル部ニ當リ、同様ナル狀態ヲ呈スルコト見ラル、部アリ。尙可ナリニ太キ神經纖維ヲ認メシムル部ニ於テハ、可ナリニ大ナル實質胞巢ガ之ニ衝突シ、少シク之ヲ壓迫シ、且之ニ追隨シテ迂回増殖スルガ如キ像ヲ示セル部アリ。

尙上記セル種々ナル部ニ於ケル弾力纖維ノ狀態ヲ檢スルニ、正常皮膚ノ部ニ於テハ其真皮上層部ニ當リ、多少紛糾セルモノ又ハ斷裂セルモノアレドモ、其度ハ輕シ。然レドモ新生組織ノ内部ニ於テハ略中央部ノ若干部ヲ除キ、一般ニ其上層部ニ於テハ間質中ニ可ナリノ量ニ彈力纖維ノ存スルヲ認メシメ、其アルモノハ屢紛糾シ、或ハ又伸展セラレタル狀ニ存シ、太サ亦平等ナラザルモノ多シ。而シテ所々ニ散在性ニ少數宛認メラレ、唯一部ニ於テノミ可ナリニ集リテ存スル部アリ、其部ハ屢圓形細胞浸潤ヲ示シ、

殊ニ「プラスマ細胞浸潤ヲ示セル部ニ一致スルコト多クシテ、斯ル際ニハ其纖維自個ノ濃淡不平等ナルコトアリ、或ハ同時ニ膨大ヲ示シ又ハ顆粒狀ニ崩壞ヲ示セルモノアリ、又斷裂ヲ示セルモノ等アリ、加之微細ナルモノハ甚ダシク色淡キモノアリテ明カニ退行性變ヲ示セリ。多形核白血球浸潤部ニハ大抵彈力纖維ヲ見ズ。如斯間質ノ彈力纖維ハ新生組織周邊部ニ於テハ殊ニ著シク多量ニ存スル部アリ、斯ノ如キモノハ屢新生組織ガ表皮下ニ増殖ヲ營メル部ニ一致シテ見ラレ、表皮ト新生組織間、又ハ新生組織胞巢ト胞巢トノ間ノ部等ニ於テハ、密ニ紛糾セル彈力纖維塊アリテ、殆ンド瀰蔓性ニ此部ヲ占メ、其部ノ結構組織ハ全ク之ニヨリテ占メラレタル如キ狀ヲ示セリ。表皮ノ乳頭間上皮下索ガ著シク増生シテ真皮中ニ侵入セル部ノ周圍ニ當リテモ同様ノ像ヲ呈セリ。新生組織上層部ノ中央部ト共ニ、一般ニ其中層、下層ニ於テモ、少量ニ彈力纖維ガ散在性ニ存スルヲ認メシム、又前記ト同様ノ變ヲ現ハセリ。

最後ニ上記實質、間質、周邊部等ニ記載セル細胞浸潤ノ狀態ニ就テ精査スルニ、其間質ニ於ケルモノハ、主トシテ圓形細胞殊ニ淋巴球及「プラスマ細胞」ニシテ、之ニ少許ノ造結締細胞ヲ混ズル部最モ多シ。一般ニ之等ノ細胞ハ混在スレドモ、所ニヨリ其多少アリテ、殊ニ淋巴球ハ新生組織周邊部及其基底部ニ近キ間質、其他周圍真皮組織、腱膜等ノ部ニ於テ多ク、之ニ僅カニ小ナル「プラスマ細胞」ヲ混シ、其間ニ造結締細胞ヲ少數ニ認メシム。次ニ新生組織ノ表層部及之ニ近キ部、表面ノ結構部、其他ニ於テ間質組織ニ浸潤セル細胞中、主ナルモノハ「プラスマ細胞」ニシテ其大小ハ種々ナリ、之ニ少數ノ淋巴球樣細胞ヲ混シ、且多クノ造結締細胞乃至新生小血管ヲ伴ヒ、其血管壁細胞ニ核分割像ヲ現ハセルモノ可ナリニ認メラル。尙「プラスマ細胞」ノ胞體ハ、時トシテ嗜酸性色素性顆粒狀ヲ呈シ、殊ニ大型「プラスマ細胞」ヨリ尙大ニシテ如斯性狀ヲ呈スルモノアリ。更ニ

顆粒前記ノモノヨリ尙少シク大ニシテ、光澤アルモノノ集合スルアリ、其含有顆粒數ハ前記ノモノヨリモ少ナク、其車軸狀核ハ尙認めラル、又顆粒ガ一層大ニシテ淋巴球核大ナルモノ、或ハ尙少シク大ナルモノ等、同様性狀ヲ有シテ大サナ異ニセル小體ヲ、之等浸潤細胞ノ部ニ認めシム。然レドモ血管ノ外膜細胞ガ「プラスマ細胞」ニ類似スルガ如キ像ヲ認めズ。尙之等ノ細胞ニ混ジテ、核淡明ナル所謂組織球ト認めムベキ細胞及多形核白血球ヲモ少數ニ認めシム。上述ノ如キ圓形細胞浸潤ハ一般ニ彌蔓性ナルモ、又間質ガ豊富ニ存スル所ニテハ、一部ニ於テ強キ纖維性造構ヲ示シ、細胞浸潤極メテ輕ク或ハ殆ンド之ヲ缺ケル部アリ。其他實質胞巢ノ角化部、角化性崩壞部、或ハ角化部ト移行層トノ間等ニ集積シ來レル細胞ハ、主トシテ中性色素嗜好性多形核白血球ニシテ、此モノハヨク種子層細胞ノ間隙ヲ遊走セリ、新生組織表層部ニ於テモ斯ル細胞浸潤少ナカラズ。尙新生組織ノ中部中層ヨリ基底膜ノ表層部ニ亘リテ、主トシテ多形核白血球ガ廣汎性ニ浸潤スル部アリ。此部ヲ精査スルニ、實質ノ大部分ハ全ク崩壞セラレ、唯角化性葱根狀體及胞巢ノ遺殘物ト認めムベキ淡明、胞狀ノ核ヲ有スル細胞列ヲ僅カニ其部ニ認めシムルノミニシテ、増殖性傾向ヲ認めルコトヲ得ズ、唯一部ニ於テ僅カニ胞巢狀ヲ示セルモノアルモ、其種子層ト角化層トノ間ニ、甚ダシキ多形核白血球浸潤ヲ來シテ胞巢囊狀ニ擴ガリ、且種子層甚ダ薄ク、上述遺殘胞巢ト同様ノ狀ヲ示セリ。而シテ斯ル多形核白血球ト共ニ新生血管、造結締織細胞、組織球及多核巨噬細胞(後述)ニヨリテ如斯部以外ノ組織ヲ占メ居レリ。且斯ル造構ヲ示セル電ハ、其周圍ニ於テ淋巴球浸潤ヲ現ハセル電ニ次第二相移行セリ。此電及之ト周圍トノ移行部、之等ノ部ニ近キ場所ニ於テ並ニ此部ノ新生組織間質及之ニ近キ膜膜ノ部等ニ當リ主トシテ浸潤細胞ト混在シテ、著明ニ「エオジン」嗜好性白血球ノ存在スルヲ認めシム。其膜膜組織ニ認めラル、モノハ、他ノ細胞ヲ伴フコト少ナクシテ、屢

單獨ニ其纖維ト纖維トノ間ノ部ニ存シ、多少其纖維ノ方向ニ數個相並ベルガ如キモノアリ。一般ニ細胞ハ餘リ大ナラズ、類圓形、橢圓形、長橢圓形等ヲナシ、多ク多形核性ニシテ、二―三或ハ稀ニ尙少シク數多キ「クロマチン」ニ富メル物質ノ連續セルモノヨリ成リ、之等ハ可ナリ密ニ相接シ、甚ダ短カキ糸狀物ニテ相連レルモノ多シ、又淋巴球ノ核大又ハ少シク大或ハ小ナル單核ノモノモ可ナリニ多シ。共ニ胞體內ニ「エオジン」ニ好染スル可ナリニ大ナル顆粒ヲ充タシ、其大サハ略相等シク、其配列モ亦可ナリニ平等ナリ。而シテ如斯部ノ外新生組織全部ニ亘リテ圓形細胞浸潤アル部ニハ混在スルコト認めラル、モ、殊ニ多數ニ認めラル、ハ新生組織ノ周邊部真皮組織及基底膜ヲ侵襲セル部ニ於ケル實質胞巢ノ間質部及其周圍組織即膜組織ノ部ナリ。斯ル細胞ガ可ナリニ一部ニ集在シテ認めラル、如キ部ニ於テ、注意シテ觀察スル時ハ、之ニ近キ小血管ニ於テ同種細胞ノ赤血球中ニ混在スルヲ認めシムルモ、核分割ヲ現ハセルモノハ何レニモ認めラレス。其他一般ニ實質上皮膚性胞巢ガ殊ニ其中部ニ於テ中性色素嗜好性多形核白血球浸潤ヲ蒙レル場合ニ於テハ、之ニ甚ダ少數ニ酸性色素嗜好性白血球ヲ混在スルモノナリ、然ルニ本例ノ周邊部ニ於テ、其部ガ一般ニ彌蔓性ニ強ク圓形細胞浸潤ヲ現ハセル真皮組織ノ中層部ニ當リ、此部ヲ侵襲スル實質胞巢ノアルモノガ、其中部角化層ノ部組織粗トナリ細胞浸潤ヲ現ハシ、實質細胞ノ一部ノモノハ核染色ヲ失ヒ、崩壞ヲ示セル部アリ、而シテ此浸潤細胞ハ殆ンド全ク「エオジン」嗜好性白血球ヨリ成リ、中性色素嗜好性多形核白血球ハ數個ニ過ギズ、且該「エオジン」嗜好細胞ニハ單核ヲ示セルモノ多ク、又細胞中ニハ核染色少シク不真トナリ退行性變ヲ示セルモノ混在セリ。而シテ該胞巢ノ周圍基底細胞ニ相當スベキ部及之ニ近キ細胞ハ尙認めラル、モ、整然トシテ基底細胞ノ配列ヲ示セルモノ無く、種子層淺層樣ノ形態ヲ示セル稍扁平多角形ノ細胞ニヨリテ形成セラレ、其増殖性ハ強キモ

ノト認メラレズ。而シテ此竈ノ周圍ニ於ケル細胞浸潤ハ「エオジン嗜好細胞ヲ混在スルコト一般ニ甚ダ多シ。之等浸潤細胞ノ間ニ於テ、少數ニ且散在性ニ、所謂「マスト細胞ト認ムベキ、單核ノ胞體嗜鹽基性色素細胞顆粒ヲ呈スル細胞ヲ認メシメ、殊ニ新生組織ノ周邊部及之ニ近キ真皮ノ浸潤細胞ニ混ジテ可ナリ多數ニ出現シ、又基底部或ハ之ニ近キ部ニテ血管周圍ニ「プラスマ細胞浸潤ヲ認ムル場合、之ニ混在シテ存スルコトモ可ナリニ多シ。然シナガラ又可ナリニ腱膜深部ノ著變ヲ認メザル部ニ於テ其纖維間ニ散在性ニ單獨ニ存スルモノアリ。

尙上記種々ナル遊走性細胞ノ外、多核巨態細胞ノ存スルハ本新生組織ニ於ケル著明ナル所見ノ一ニ屬セリ。該巨態細胞ハ新生組織ノ間質内、基底ニ近キ腱膜内、殊ニ細胞浸潤或ハ肉芽性變ヲ示セル部ニ出現スルノミナラズ、時トシテ胞巢ノ一部ニ侵入セルモノ認メラル。形態ハ稀ニ類圓形、橢圓形等ヲナスモノアレドモ、多クハ不正形ニシテ、其大サモ亦甚ダ不同ナリ、其周圍組織トノ境界ハ略認メラル。核ハ橢圓形、長橢圓形等ヲナシ、核造構ハ認メラル、モノアリ、明瞭ヲ缺クモノアリテ一様ナラザレドモ、屢々浸潤細胞中ニ認メラル、組織球ト相似タリ。核ノ配列ハ不整ノモノアレドモ多クハ一側ニ偏シテ集リ存シ、屢々角化物質殊ニ石灰沈着ヲ示セル破片ニ接着シテ存シ、加之之ヲ自體内ニ攝取セル像亦ヨク認メラル。カ、實際核ハ異物ト反對側ニ集リテ存シ、定型の異物巨態細胞ノ像ヲ示セリ。而シテ胞巢内ニ侵入セルモノハ角化層ト種子層トノ間ニ存シ、本細胞ノ胞體ニヨリ兩層ヲ離開セルモノアリ。尙巨態細胞ガ種子層淺層ニ該當スベキ細胞ニ接着シ、之ヲ抱擁シ、食食セントスル像ヲ示セル部アリ、又一部ノ巨態細胞ハ尙著明ナル退行性變ヲ認メザル「エオジン嗜好細胞ヲ體内ニ攝取セルモノアリ。

第二標本

本組織ノ主要ナル構成々分ハ、纖維性結締組織及之ト並

ビ存スル稍々幼若ナル結締組織、就中多クノ新生毛細血管其他ノ小血管ヲ伴ヘル肉芽性組織ナリ。而シテ本組織ノ深部ニ於テハ前者多ク、纖維ハ錯綜シ、表層部ニ於テハ後者多シ。殊ニ肉芽性組織部ニ於ケル血管ハ、上下ノ方向ヲ取ルモノ多ク且一般ニ充盈シ加之周圍組織ニ屢々出血性浸潤ヲ現ハセリ。又本組織ノ表層或ハ底面ニ當レル部又ハ之ニ近キ部ニ於テハ、廣汎ナル出血竈ヲ形成シ、又斑狀ニ出血セル部アリ、且斑狀ニ圓形細胞浸潤ヲ現ハシ、殊ニ肉芽組織ヲ呈シテ鬆粗トナレル部就中血管周圍等ニ著明ナリ。浸潤セル細胞ノ主ナルモノハ「プラスマ細胞ニシテ、之ニ次テ淋巴球樣細胞認メラレ、尙酸性色素嗜好性並ニ然ラザル白血球ガ之等ニ混在シ、殊ニ後者ハ所ニヨリ可ナリニ多クシテ、瀰蔓性ニ粗ニ浸潤スル部アリ、又之ニ僅カニ他ノ遊走細胞ヲ混ズル部アリ。上記「エオジン嗜好細胞中ニハマタ單核ノモノアリ、唯一部ニ於テ浸潤細胞ノ或部ニ限局シ殆ンド此細胞ノミガ存スル部アリ。然レドモ周圍ノ浸潤細胞トハ銳利ナル境界無ク次第ニ移行セリ。

如斯基質ノ間ニ於テ、所々ニ散在性ニ小ナル上皮性胞巢ヲ認メシム。該胞巢ハ表層ニテモ深部ニテモ、肉芽性ヲナセル部ニ存シ、一般ニ小索ヲナスモノ多ク、角化傾向乏シクシテ、最モヨク浸潤性ニ殊ニ血管ノ周圍ニソヒテ増殖セリ。如斯増殖ハ一般ニ可ナリニ不羈ニシテ、種々ナル核分割像ヲ現ハセリ。然レドモ一部ニ於テハ數個ノ胞巢ガ多少壓排性ニ發育シ、胞巢内ニ葱根狀角化性小體ヲ形成シ、種子層細胞ハ扁平菲薄ナルモノモ認メラル。殊ニ其稍々大ナルモノハ、中部崩壞シ白血球浸潤ヲ來シ、一部ノモノハ斯ル浸潤ニヨリ胞巢囊狀ニ擴大スルモノアリ、或ハ又石灰沈着ヲ認メシムルモノアリ。而シテ斯ル上皮性胞巢ハ、新生組織ノ中部或ハ之ヨリ少シク周邊ニ近キ部ニ、甚ダ少數ニ且限局シテ認メラル、ノミニシテ、其他ノ部ハ全ク斯ル竈ノ存在ヲ認メズ。

其他基質結締織内ニ於テ、殊ニ上記ノ如キ退行性變ヲ現ハセル胞巢ガ存スル部ノ間質組織ニ當リ、石灰沈着ヲ示セル不整形ノ物質認メラレ、精査スルニ其邊縁ニ增殖強カラザル上皮性細胞甚ダ少數ニ存スル如キモノアレドモ、一般ニハ然ラズシテ、此モノハ廣ク不整形ノ胞體ヲ有スル多核巨細胞ニヨリテ抱擁セラレ、又石灰沈着物ノ小ナルモノハ明カニ其體內ニ攝取セラレテ存スルヲ認メシメ、明カニ異物巨細胞ノ性状ヲ現ハセリ。尙斯ル部ヨリ少シク距リテ、少シク表層ニ、不整形ナセル小骨片アリ、該骨片ハ脫灰セザル標本ナルニ拘ラズ、「ヘマトキシリン」染色性甚ダ弱クシテ唯邊縁部ノミ細線狀ニ「ヘマトキシリン」ニ染マリ、其度ハ石灰沈着ヲ現ハセル上皮巢ノ部ニ比シ却ツテ染色性弱ク、大部分ハ骨小體不明瞭ニ、骨小體ノ走行モ明視シ得ズ、明カニ脫灰性變ヲ現ハセリ。其周邊ハ著シキ Howship 氏窩ヲ現ハシ、此部ニ當リ、類圓形、淡明ナル、核數個ヲ有スル巨細胞認メラレ。

頭蓋骨組織 検査ニ供シタル骨組織ハ鑿ト植トキ以テカキ取ラレタルモノニシテ、其多數ヲ集メテ脫灰シ、組織標本ヲ作製セルモノナルガ故ニ、此ニハ主トシテ新生組織ガ骨組織ニ對スル態度ヲ檢索スルニ止メントス。一般ニ骨質片ハ其内部ニ於テハ、骨層板及骨小管等ノ狀ニ著變ヲ見ズ。

最モ著明ナル變ハ髓腔ノ部ヲ占ム骨髓組織ニ於テ認メラレ、モノニシテ、即多クノ該組織ハ殆ンド全ク纖維性組織ト化シ、脂肪細胞等ハ殆ンド認メラレズ。其細血管ハ可ナリニ充盈スル部アリ、又一部ニ於テハ髓腔部ニ著明ナル滲透性血液浸潤ヲ示セリ。新生實質組織ハ、如斯纖維性骨髓組織ノ一部ニ於テ、殊ニ圓形細胞浸潤アリテ鬆粗トナレル部ニ認メラレ。該胞巢ハ角化傾向著明ナル有核扁平細胞ヲ有シ蕞根狀體ヲ形成スルモノ多ク、且斯ルモノ集リテ壓排性ニ發育シ、一般ニ骨組織自個トハ上記纖維性物質ニヨリ距タレリ。而シテ斯ル部ノ周邊ニ於テ、骨組織ニ近キ部ニハ細索チナ

シタル胞巢認メラレ。骨組織ノ邊縁ハ不正ニシテ廣ク Howship 氏窩ヲ作リ、此ニ多核巨細胞ヲ有シ、或ハ其縁ガ結締織ニヨリテ直接ニ侵サル、モノアリ、又一部ニ於テハ、骨組織ノ縁ハ弧狀等ナシ、其縁ニ沿ヘル骨組織ノ薄層ハ、「エオジン」染着甚ダ輕度ニシテ石灰ノ沈着殆ンド認メラレズ、又骨小體少ナク、骨小管ハ星芒狀ヲナサズ、且其縁ニ當リ一層ノ「オステオプラステン」ガ可ナリニ密ニ相並ベルモノアリテ、骨組織ノ新生ヲ示セリ。如斯像ハ新生組織侵襲部ニ近キ骨梁ニ於テモ認メラレ。

頸部淋巴腺 大サハ指頭大ナリ。之ヨリ切片標本ヲ作リテ檢スルニ、該腺周邊ノ一部ニ於テ淋巴腺組織殘存スルノミニシテ、其大部分ハ上記頭部ニ見タル新生組織ト同様ノ性状ヲ有スル實質胞巢ニヨリテ占メラレ、増殖強シ。但シ角化傾向強ク又其胞巢ノ大部分ガ酸性色素嗜好性顆粒狀ニ壞死ヲ現ハシ、或ハ圓形細胞殊ニ白血球集簇ニヨリ崩壞セルモノ等ヨク見ラル。其間質チナセル部ニ多核巨細胞ノ存スル所モアリ。而シテ淋巴腺自個ノ他又周圍被膜結締織内ニモ浸潤性ニ増殖セル部アリ。

鎖骨上窩淋巴腺 大サハ頸腺ヨリモ少シク大ナリ。其組織學的所見ハ上記セル所ニ略相同ジ。

以上ノ所見ヲ概括スルニ、本例ハ頭髮部火傷癢痕ニ續發セル癩腫ニシテ、病竈部切除後更ニ再發シ、此際頸部及鎖骨上窩ノ淋巴腺ニ轉移ヲ來セルモノナリ。原病竈部ハ肉眼上表面ニ向ヒテ明カニ乳嘴性増殖ヲ營ムト共ニ、深部ニ向ヒテ真皮並ニ腱膜組織ヲ突き破リテ増殖セリ。之ヲ鏡檢スルニ、定型の角化扁平上皮癌ノ構造ヲ示シ、一般ニ著シク角化ノ傾向強ク、胞巢ハ主トシテ壓排性増殖ヲ營ムモ、又一部可ナリニ浸潤性増殖ヲ現ハセリ。其種子層ニハ種々ナル時期及正型、不正型ノ核分割像アリ、殊ニ正型ノモ

ノ多シ。同時ニ核空胞形成ノ如キ變ヲ現ハスノミナラズ、角化部ニ於テハ石灰沈着ヲ來セリ。而シテ其増殖部ニ當レル真皮及臚膜組織ハ屢鬆粗トナリ、圓形細胞浸潤ヲ現ハシ、又結締組織ハ反應性ニ増殖ヲ現ハス部アリ、又壓迫性ニ萎小ヲ示セル部アリ。殊ニ其基底ニ於テ臚膜組織ニ接スル部ニ當リ、胞巢内ニ多形核白血球集簇シテ囊狀ニ擴ガリ、又全ク崩壞ニ陥レルモノアリ、且結締織及血管ノ新生シ侵入スルヲ認メシメ、尙多核巨態細胞モ出現スルアリテ盛ナル貪食性ヲ示セリ。一般ニ間質組織ニハ圓形細胞浸潤アリ、殊ニ基底部及周邊部ニハ「エオジン嗜好細胞甚ク多數ニ存シ、多クハ多核性ナレドモ又單核ノモノ可ナリニ存ス。一部ニ於テ細血管ト親密ナル關係ヲ示セリ。尙癌腫組織周邊部間質ニ殘存セル皮膚附屬器ハ、屢萎小ヲ示シ、之ニ近キ周邊真皮組織ノ部ニ存スルツレハ、多ク不變ニシテ、稀ニ僅カニ反應性ニ増殖シ、核分割像ヲ示セルモノアリ。又神經纖維束周圍淋巴腔ニ相當スル部ニ、癌組織ノ外套狀ニ増殖セル部アリ、此際其周圍ニ於ケル細胞

第 二 例

〇〇〇〇 男 四二歳、鐵道工夫。

病歴大要 大正十四年十一月十日初診 (金澤醫科大學附屬醫院皮膚科性病科)。

家族歴 直系其他ノ近親ニ癌ノ遺傳ヲ證明セズ。

既往症 生來健康ナリ。一七歳ノ時淋疾ニ罹リ、二六歳ノ頃陰莖ニ下疳

ヲ受ケ兩側便毒ヲ發シタルモ、「サルツアルサン」注射及外科の療法ニヨリ約一〇〇日ヲ經テ治セリ。又三五歳ノ時左足背部ニ外傷ヲ受ケ第三、四趾

浸潤ハ必發ナラズ、癌腫組織ニ隣接セル表皮ハ反應性増殖ヲ現ハセルモ、其腫瘍組織ニ直接スル部ニ於テハ菲薄ナリ。又癌組織表面ノ周邊部ニ表皮ノ乳嚙性増殖ヲ示セル部アリ。尙癌組織ノ表層周邊部ノ間質及周圍真皮組織ノ壓迫ヲ蒙レル部ニ當リ、彈力纖維ハ屢集簇シテ殘存シ、退行性變ヲ現ハセリ、腫瘍表層ノ中央部並ニ中層、深層ノ間質ニハ彈力纖維極メテ乏シクシテ亦同様ノ變ヲ示セリ。一般ニ圓形細胞浸潤部ニハ彈力纖維ハ變性シ、多形核白血球浸潤部ニハ殆ンド之ヲ見ズ。次ニ再發部組織ハ主トシテ肉芽組織ヨリ成リ、癌性組織ハ多ク小索ヲナシ浸潤性ニ増殖セリ。其深部ニ於テ骨組織ヲ侵襲スル部ヲ見ルニ、骨髓組織ハ纖維性トナリ、癌索ハ主トシテ此部ニ存シ、骨組織ハ主ニ多核巨態細胞及纖維性組織ニヨリテ吸收セラレ、一部ニ於テハ癌索自個ニヨリテ侵蝕セラル。又一部ノ骨梁ニハ脫灰性變ヲ來シ、他方反應性ニ骨組織ノ新生ヲ示セル部モ存ス。

末節脱落セリ。嘗テ妻帯セルモ舉兒無シ。煙草ヲ嗜ムモ飲酒セズ。

現病歴 二〇歳ノ時偶々日露戰役ニ會シ、自ラ志願シテ出征シ、明治三十七年七月砲彈ノ破片ノ爲メニ顛頂部ニ射創ヲ蒙リ、約三ヶ月ノ醫療ニヨリ小兒手掌大ノ癩痕ヲ殘シテ治癒セルガ、年月ヲ閱スルト共ニ縮少シ近時ハ天保錢大トナレリ。然ルニ昨大正十三年十月隧道工事中ニ石塊ノ爲メニ該癩痕部ニ裂創ヲ受ケシガ、自家治療ニ委ネテ殆ンド醫治ヲ加ヘザリシ爲メ作舊治癒セズ、遂ニ本年三月頃ニ至リ該病竈ハ一個ノ腫瘍トナリ疼痛ヲ

覺エタレバ、始メテ某醫ニ治ナ乞ヒ、冷却處置ヲ獎メラレテ百餘日ニ亘リ該部ニ氷或ハ冷水ヲ貼用セルモ、腫瘍益々大トナリ且其中心ハ潰瘍ニ陥リタレバ、該處置ヲ廢シ、九月下旬ヨリ更ニ他ノ病院ニ入院シテ該部ノ搔把術ヲ受クルコト前後六回ニ及ベルモ著効ヲ見ズ。十月下旬ニハ繃帶交換ノ際二三個ノ爪大ノ骨片ガ脫失セラレタリ。斯クテ病勢益々旺ニシテ頭部一體ニ亘リ疼痛甚クシク就眠スルヲ得ザルニ至リ、金澤醫大皮膚科性病科外來ヲ訪ヒ直チニ收容セラレタリ。

現症 體格中等、榮養著シク侵サレ貧血ヲ呈シ顔面ニ輕度ノ浮腫ヲ呈セリ。口腔ニ於テ右側扁桃腺ハ僅カニ腫大セリ。内科的診查ニ著變ヲ見ズ。Röntgen 検査ニヨルニ肺門腺ノ數個ガ多少腫大セルモ痛轉移ニ該當スル陰影ヲ認メズ。

局所々々見 顛頂中央ヨリ左側顛頂骨部ノ殆ンド全面ヲ占メ更ニ後頭部ニ至ル手掌二倍大ノ廣面ニ亘リテ矢狀徑約一〇釐ノ不規則ナル腎臟形ノ翻花狀腫瘍アリ。其表面ハ汚穢ナル肉芽面ヲ呈シ、血液性や膿液性ノ分泌物ヲ以テ被ハレ耐エ難キ惡臭ヲ放テリ。特に左側後縁及前縁ノ肉芽ガ隆起セルガ爲メ其中間部ハ著シク陷没シテ窠狀ノ肉芽面ヲ呈シ、其底面ニ於テ臍搏動ヲ顯著ニ認メラル。腫瘍ノ大部分ハ彈力性硬ナルモ所々稍柔軟トナレリ。觸診ニヨリ激痛ヲ訴フ。而シテ周圍ノ皮膚トハ比較的明確ニ區劃セラレ邊縁ニ直接シテ健常ノ毛髮ヲ密生シ、唯後端ニ接スル皮膚ハ一帶ニ僅カニ發赤腫脹セリ。淋巴腺ハ左側頸部ニ於ケルモノガ四―五個豌豆大乃至拇指大ニ腫脹シ彈力性硬ニ觸レ時々偶發痛ヲ訴フ。反之右側ハ豌豆大ニ達セルモノガ二―三個アルモ比較的硬固ナラズ。鎖骨上窩ニ於テハ左側ニハ豌豆大ノモノガ二―三個硬固ニ觸ル、モ右側ニハ之ナシ。腋窩及鼠蹊腺ハ兩側共大豆大ノモノ數個觸知セラル、モ硬固ナラズ。

經過 入院後腫瘍ノ後縁部ヨリ試験的組織切除ヲセリ、左頸部ノ腫脹セ

原 著 茶谷 再ビ頭髮部痛腫ニ就テ(頭髮部角化性癌腫ノ病理追加)

ル淋巴腺ノ一個ヲ剔出シテ組織的檢査ニ資セリ。而シテ病竈部ハ既ニ外科的處置ヲ施シ難カリシ故、主トシテ「リソノール」ニテ淨化シ且其濕布ヲ行フニ止メ、内服藥トシテ健胃劑ヲ與ヘ又臭剝ヲ投ジテ鎮痛ヲ助ケ、尙發熱時ニハ安知必林ヲ服用セシメタリ。斯クテ入院當初ハ頭痛輕減シテ心身稍爽快ヲ覺エタルガ、十一月十五日午後ヨリ精神稍朦朧トナリ歌ヲ唄ヒ類ニ拍手セリ。爾後時々意識障礙アリ、二十四日頃ヨリ兩手無力鈍感トナリ、十二月ニ入り食思頓ニ減ジ、同四日午後ヨリ視神經衰ヘテ辨別力ヲ失ヒ譫妄ヲ發セリ。「ガ―ゼ」交換ノ際病竈部ニ疼痛ヲ感ゼザルガ如キモ、他ノ體表ハ一般ニ知覺過敏トナリ切ニ疼痛ヲ訴フ。然レドモ四肢ニハ強直或ハ痙攣等ヲ認メズ。體溫ハ三八度内外、脈搏ハ一〇〇至前後ヲ往來セリ。即腦膜ノ刺戟症狀ヲ呈セリ。十日頃ヨリ尿閉止シテ殆ンド食物ヲ攝ラズ、十五日午前八時五十分遂ニ鬼籍ニ入ル。

尙試驗切除片ノ組織學的檢査ニヨルニ腫瘍ハ定型的ノ「カンクroid」ニシテ、頸部淋巴腺ニハ癌組織ノ存スルコトヲ認メズ。

以上ハ皮膚科性病科教室伊藤助教教授ノ好意ニヨリ貸與セラレタル同助教授ノ手記中ヨリ其大要ヲ轉載セルモノナリ。茲ニ深謝ス。

病理解剖上所見 (十六日午後一時剖檢)

身長一五一釐、體重三二・七疋。骨格中等、榮養不良ナル男ノ屍。諸臟器ニ就テ肉眼的並ニ顯微鏡的檢査ニ於テ直接頭部新生組織ニ關聯スル点少ナキヲ以テ、一々ノ記載ハ大半之ヲ省略シ先ヅ病理解剖上診斷ヲ記サン。

病理解剖上診斷 頭蓋部癌腫、左側肋膜纖維性癒着、右側肺下葉ノ慢性膿瘍、肺臟炭粉沈着、褥瘡。

頭部ノ肉眼的所見

前記病歴中ノ局所々々見ニモ記載セラレタルガ如ク、病竈部ハ主トシテ左側顛頂部ニ相當シテ著シキ物質缺損ヲ現ハセル竈ヲ形成シ、大凡不正腎臟

形ヲ呈シテ大體頭部外表ヨリ可ナリニ低マレリ。此部ハ頭蓋ノ矢狀徑ニ於テ前額髮際部ヲ距ツル一二・五糎ノ部ヨリ、後頭骨ノ外後頭結節ノ前方三・五糎ノ部ニ亘リ、其徑一一・五糎ヲ算ス。其中部ニ於テ之ニ直角ナル徑ハ八糎ヲ算セリ。該潰瘍面ハ一般ニ泥膏樣物質ヲ附着シ灰白色乃至淡黃色或ハ淡褐灰白色ヲ呈シ、又所々黑灰暗赤色痂皮樣物質ヲ附着セリ。其中央部ハ周邊ノ部ヨリ少シク低マリ、面ハ一般ニ不平ニシテ小豆大、大豆大等ノ隆起部認メラレ、又指頭面大、拇指頭面大ノモノアリ。平扁ナルモノ多シ。斯ル部ヲ圍メル周邊ノ部ハ所ニヨリ其狀ヲ異ニシ、殊ニ其右緣及後緣ヲナセル部ハ稍磊塊狀ヲナシテ著シク隆マレリ。且著シク外方ニ轉轉シ、中部ノ低マレル部トノ間ニ裂隙ヲ示セリ。上記ノ部ニ續ケル左緣ノ後部モ亦僅カニ轉轉ヲ示セドモ、其面ニ中部底面ト相似タル狀ヲ示シ、次第ニ後緣及中部底面ニ移行セリ。之ニ續ケル左緣前部ハ面粗糙ニシテ帶赤灰白色ヲ呈シ、此部ハ毛髮ヲ有セル軟組織ノ部ニ連ナレリ。此部ニ連ナレル前緣ノ右半ハ僅カニ軟組織ノ轉轉ヲ示シ、此部ト磊塊狀ヲナセル左緣トノ間ニ亘リテ存スル前緣ノ左半ノ部ハ、中部底面ヨリ土堤狀ニ隆マリ、前方ハ直チニ毛髮ヲ有スル部ニ移行シ且兩側ノ部ニ移行セリ。

如斯變ヲ示セル部ノ周圍ニ存スル頭髮部ハ、一般ニ三・五糎ノ長サヲ有スル毛髮ヲ以テ密ニ被ハレ、之ニ僅カニ白髮ヲ混セリ。

上述ノ變ヲ示セル潰瘍部ニ於テ、頭蓋ノ矢狀徑ニ直角ニ、此部ノ前三分ノ二ト後三分ノ一ニ相當スル部ニ、前額斷ヲ施シテ剖面ノ性狀ヲ檢スルニ上記潰瘍底ヲナセル部ハ全ク骨質ヲ失ヒ、灰白色或ハ帶赤灰白色ヲナセル新生組織ハ、直接ニ硬腦膜組織ニ密着シ、右側顳頂部ノ矢狀竇部ニ於テハ硬膜ノ存在可ナリニ明カナリ。然レドモ左側大腦半球ノ穹窿部ハ一般ニ硬膜組織ノ性狀ヲ明カニセシメズ、新生組織ハ次第ニ此組織ニ移行シ、殊ニ其顳頂葉ノ部ハ蜘蛛膜下腔ニ相等スル部稍廣クシテ此ニ新生組織ヲ充タシ

斯ル部ヨリ著シク判然タル境界無クシテ大腦表層ノ部ニ移行シ、其部ノ灰白質ハ明カニ薄マリ、最も著シキ部ニ於テハ正常皮質ノ三分ノ一ノ厚サヲ有スルニ過ギズ。如斯性狀ヲ示セルノ部中部ニ於テ軟膜組織ニ相當スル部ニ、米粒大淡黃灰白色ノ限局セル部アリ。亦顳頂葉ニ續ケル顳顬葉ノ一部モ僅カニ接着ヲ示セドモ、灰白赤色ヲナセル軟膜組織ニヨリ腦質ト新生組織トハ相距タレリ。矢狀竇ハ徑四耗ヲ有シ、内ニ灰白白色ノ實性物質ヲ充盈セリ。此部ト上述左側顳頂葉トノ境界ハ、細血管ノ充盈ヲ示セル硬膜組織ニヨリ境界明カナリ。斯ル部ニ近ク顳頂葉ノ軟膜部ニ、粟粒大ノ灰白色類圓形ノ部認メラレ、此部ハ暗赤色ノ細纖維ナル輪ニ取圍マレ、血管組織ナルコトヲ示セリ。之等潰瘍底部ノ新生組織ハ一般ニ薄層ニシテ、右側顳頂部ニテハ最も薄ク、硬腦膜ノ上三・五糎ヲ有スルニ過ギズ。左側顳頂部ハ最モ厚キモ尙硬腦膜ニ相當スル部ノ上一糎ヲ算スルノミ。而シテ外觀上左緣ニ於テ磊塊狀ヲナセル部ハ二・七糎ノ高サヲ有シ、既述潰瘍底面ノ部トノ間ニ深キ緣下嚮入ヲ示セリ(二・五糎)。其潰瘍ニ臨メル部ハ一般ニ新生組織ノ増生ニヨル肥厚ヲ示シ、殊ニ其表層ニ於テハ皮膚組織ヲ、深部ニ於テハ腱膜組織ヲ強ク侵セリ。如斯ニシテ新生組織ハ、腱膜ノ最下層部ト骨組織トヲ侵襲シツ、深ク外下方ニ浸潤スレモノニシテ顳顬葉ノ中部ニ至ルマテ全ク骨組織ヲ認メシメズ。新生組織ト骨組織トノ移行部ハ僅カニ帶赤灰白色ヲ示シ、粗糙ニシテ少シク硬ク、スル組織ハ外板部ヨリモ内板部ヲ深ク侵セリ。此部ハ矢狀竇ヨリ八糎ヲ距タレル部ニ當ル。此部ヨリ少シク距リテ上方ニ於テ新生組織内ニ、帶赤灰白色ヲナシテ僅カニ膠樣ノ觀アル部存シ、次粟粒大、粟粒大ノ暗赤色点狀ノ部二―三此部ニ散在セリ。之等ノ骨質ヲ存セザル部ヲ裏付ケテ存スル硬膜ハ、其下面粗糙ニシテ細血管ノ充盈ヲ示セリ。次ニ潰瘍底ノ右側ニ於テ新生組織が頭蓋骨質ト相接スル部ハ矢狀竇ヨリ二・五糎ヲ距ツル部ニシテ、此部ニ於テハ新生組織ハ殊ニ板障

ノ部ニ向ヒテ強ク侵入シ、又内板ノ部ハ外板ノ部ヨリ強ク侵襲セララル。此部ニ續ケル皮膚腱膜組織モ亦侵襲ヲ蒙レドモ、新生組織ニヨル著明ナル肥厚ハ認めズ。最後ニ腦組織ヲ矢狀斷シ右側大腦半球ヲ切除シタル後、矢狀竇ノ部ヲ開檢スルニ、上述額断面ニ於テ矢狀竇充實シタル物質ハ、更ニ前後ニ伸ビテ竇腔ヲ充タシ、前方ニ五種、後方ニ二種ニ亘リテ灰白色ノ稍脆キ物質ヲ存シ、更ニ其前後ニ暗赤色凝血狀物ヲ有セリ。該血栓狀物ハ前方ニ向ヒテハ五種、後方ニ向ヒテハ四種ニ及ビ遂ニ横竇ニ達シテ其一部ヲ充タシ、横竇部ニテハ一部灰白色ヲナセリ。

顯微鏡的検査所見

本例ニ於テモ亦肉眼上所見ニ一致シ、新生組織ハ實質上皮性細胞群ト、其間質ヲナセル結締織性物質トヨリ形成セララル。

實質細胞 大體ニ於テ前例ト相同シク、非角化性細胞及角化性細胞ト、其移行部ニ相當スル細胞トヲ區別シ得ベシ。角化細胞ノ形態ハ前例ト殆ンド相同シ。

非角化性細胞 二型ヲ分チ得ベク、一ハ皮膚種子層深部ノ細胞ニ相當シ(種子層深層)、一般ニ細胞ハ前例ヨリモ稍小ナルモ、多角形、橢圓形等ヲナシ核亦細胞ニ準ジテ小ニ、核造構認メラル、但核小體ハ認めルモ一般ニ著シク分明ニハアラズ。其基底細胞ニ相當スル部ハ多クハ紡錘形、橢圓形等ヲナシ、圓柱狀ヲナスモノハ唯一部ニ於テ認めラル。斯ル細胞ニ「メラニン色素ヲ有スルモノ無シ。他ハ皮膚ノ種子層淺層ノ細胞ニ相當シ(種子層淺層)、細胞ハ富稜形ニシテ原形質ニ富ミ、酸性色素嗜好性細顆粒狀觀ヲ有シ、深部ノソレニ比シ一般ニ大ナリ。少數ニ原形質顆粒ノ大ナルモノアリ。核ハ胞狀ニシテ核造構分明、核小體モヨク認めラル、二個又ハ其以上存スルモノアリ。概シテ斯ル非角化性細胞ハ皮膚ニ於ケルソレニ比シテ稍小ナルモノ多シ。然レドモ各部位ニヨリ可ナリ著シキ差異アリテ、又

ソレヨリ大ナルモノモ見ラルル所アリ。且一般ニ細胞密遊シ細胞間橋ヲ見ザルコト多キモ、細胞大ニシテ密着甚シカラザル部ニハ又明カニ之ヲ有セリ。而シテ細胞ハ一般ニ第一例ニ比シ鮮明ノ度弱キ觀アリ。

中間層細胞 ニ相當スル細胞ハ主トシテ有核角化細胞トシテ出現シ、其核ハ一般ニ淡明ナリ。顆粒層ニ相當スベキ細胞亦一部ニ於テ(上述胞間橋ヲ現ハス如キ部)認めラル。鹽基性色素嗜好性顆粒ハ大小ノ差可ナリニ大ニ、其數ハ少ナク核周圍ニハ少シク密ナルモ、一般ニ胞體內ニ散在性ニ稍不規則ニ存セリ。

組織的造構

先ヅ潰瘍底ノ部ニ於テ一般的造構ヲ觀ルニ、該部ノ肉眼上所見ニ一致シ、正常ノ腱膜組織、骨組織ハ全ク存セズ、新生組織ハ直接ニ硬腦膜組織ニ相連ナレリ。該組織ノ大部分ハ、巢狀、索狀等ニ錯綜スル上皮性組織ニシテ、間質ト共ニ所謂蜂巢狀造構ヲ營メリ。胞索胞巢ノ稍定型のナルモノハ、中央部ニ角化性細胞層アリ、屢葱根狀ニ重疊シテ特異ノ像ヲ現ハセリ。之ヲ圍ミテ有核角化細胞層、顆粒層細胞ヲ存シ、更ニ其外方ニ非角化性細胞ヲ有セリ。而シテ非角化性細胞ノ中心ニ近ク存スル部(種子層淺層)ハ可ナリニ密遊スレドモ、周邊部(種子層深層)ハ略正常ニ近ク細胞間橋、基底層ノ狀ニ著變ヲ見ザルモノアリ。基底結締織トノ境界モ明カナリ。然レドモ如斯造構ヲ示ス所ノ胞巢、胞索ハ少ナクシテ、多數ノモノハ上記ノ如キ整然タル序列ヲ示スコト無ク、多クノモノハ顆粒層ニ相當スベキ細胞認メラレズ、角化物質、有核角化層ト種子層トハ屢々直チニ相移行セリ。之等ノ角化性上皮索ハ屢々著シク角化傾向ニ富ミ、時トシテ角化部ハ著シク大ニ、非角化細胞ハ唯周邊ニ一二列ニ認めラレ、而モ扁平トナリテ著シク壓迫セラレタル狀ニ存スルモノアリ。其基底層細胞ハ紡錘形等トナリ殆ンド橫位ヲ取レリ。然ラザル場合ニ於テモ種子層殊ニ基底層ハ屢々上述實質細胞條下ニ記載セル如キ變ヲ認メシム。尙上記角化部ニ於テ

ハ所々圓形細胞浸潤ヲ來シテ一部角化物質崩壞ヲ現ス部アリ。或ハ角化部ノ一部ニ於テ不整形ニ石灰沈着ヲ來シ、不平等ニ強鹽基性色素嗜好性ニ染着セリ。之等ノ間ニ混リテ、小ニシテ細胞密邇スル小索ノ多數ニ存スルヲ認メシム。而シテ斯ルモノハ數十個ノ細胞ヨリ成ルモノモアレドモ、小ナルモノハ橢圓形、紡錘形等ヲナセル細胞ガ唯一列ニ相並ビ、周圍結締織トノ境界ハ著シク分明ナラザルモノアリ。如斯胞案ハ上記大ナル胞巢ト相互ニ交錯シテ存スル部多クレドモ、又一部ニ於テハ著明ニ角化傾向ヲ有スル索ガ多數ニ密集シテ見ラル、部アリ、他方ニ於テハ反對ニ小索ガ甚ダシク集在スル部アリ。一般ニ此部新生組織ノ中層、表層ニ近キ部ニ於テハ角化ヲ來セル胞巢殊ニ其大ナルモノ多ク、深部ニ於テハ小索著シク多クシテ角化傾向乏シ。斯ル上皮索ハ基底ニ平行ナルモノモアレドモ、又一般ニ上下或ハ斜ノ方向ヲ取ルモノ多ク、壓排性増殖ヲ營ムト共ニ、殊ニ其小索ヲナスモノハ著明ニ浸潤性増殖ヲ營ミ、組織間隙或ハ血管周圍淋巴腔ノ部ヲ侵襲シ不羈ナル像ヲ示セリ。核分割像ハ一般ニ多キモ、第一例ニ比シテハ少シク少ナキ觀アリ、主トシテ母星期、子星期ノモノ認メラル。其他亦糸穗期ニアルモノ、「クロマチン横逸アルモノ、直接分割等見ラル。而シテ一般ニ稍集簇性ニ存セリ。

間質ハ一般ニ少許ノ纖維性組織ヨリ成リ、緻密ナル部アリ、又稍鬆粗ナル部アリ、一部ニ於テハ可ナリニ幼若ナリ。而シテ上皮索ノ走行ニ一致シテ錯綜シ、所々僅カニ圓形細胞浸潤ヲ認メシメ、「プラスマ細胞、淋巴球様小細胞多シ。又血管ハ一般ニ怒張シ、殊ニ表層ニ近キ部ニ多シ。彈力纖維ハ何レニモ認メラレズ。

潰瘍底組織ノ表面ハ多クノ場所ニ於テ角化シ崩壞セル層ニヨリテ覆ハレ其部ハ全ク核染色ヲ失ヘリ。此部ニ多形核白血球ノ少數ナガラ迷入シ來ルル部アリ、所ニヨリ如斯白血球浸潤竈ハ可ナリニ不整形ニ且廣汎ナル部ア

リ、其周圍トノ境界ハ著シク分明ニハアラズ。斯ル細胞浸潤ヲ示サル部ニ於テモ壞死部ガ潰瘍底ノ中層ニ及ブガ如キ部モ存セリ。又斯ル表層ノ一部ニ當リテハ其間質著シク鬆粗トナレル部見ラレ、之ニ液狀物質ノ浸潤セルモノアリ。

尙此部ノ中層或ハ稍表層ニ近キ部ニ當リテ、所々ニ少數ニ骨片ガ間質中ニ僅カニ介在スルヲ認ム。該骨片ハ何レモ小ニシテ形不正ニ、其周邊部ハ何レモ不正ニ陷凹ヲ示シ、一般ニ嗜酸性色素性ニシテ、縁ノ部及内部ニ當リテ僅カニ鹽基性色素嗜好性トナリ、骨小管ハ殆ンド認メラレズ、骨小體ハ僅カニ認メラル、ノミ。其周邊部陷凹ハ多ク結締織ニヨリ占メラレ、該組織ガ此部ニ當リテ多核性トナリ増殖セル如キ部アリ。多核性巨態細胞ハ認メラレズ。

上述ノ如キ新生組織ハ其深部ニ於テ直チニ硬膜組織ニ迫リ、緻密ニ組織的結合ヲ營メリ。然レドモ其境界ハ稍明カニシテ、即其一部ヲ除キ硬膜纖維ハ略正常ノ走行ヲ取リ、基底ニ平行ナレドモ、新生組織間質ハ反之上記ノ如ク其走行錯雜セリ。而シテ實質上皮索ハ硬膜ニ向ヒテ鉛直或ハ斜等ノ方向ヲ取リテ進メルモノモ、此境界部ニ近ヅクト共ニ其方向ヲ轉ズルモノアリ。一般ニ硬膜組織ノ肉眼上著變ヲ認メザリシ部即殊ニ潰瘍周邊ニ相當スル部ニハ唯細血管ノ充盈ヲ認ムルノミ、所ニヨリ其周圍ノ狹キ範圍ニ圓形細胞浸潤アリテ、新生組織ガ此部ニ侵入スルガ如キ像ハ殆ンド認メラレズ。屢ク其表層部ニ彈力纖維ノ走行ヲ認メ、新生組織ハ如斯部ニ至リテ増殖ヲ阻マレタル如キ狀ヲ示セル部アリ。唯潰瘍底ト腦膜及大脳組織ガ接着ヲ示セル部及之ニ近キ部ニ於テハ上記ノ部ト趣チ異ニセリ。

即此部ニ於テハ硬腦膜組織ト新生組織間質トハ所ニヨリ尙明カニ境セラレ、硬腦組織稍細胞性トナリ肥厚セル部アレドモ、多クノ場所ニ於テハ新生組織ハ其硬膜トノ境界ヲ越エテ深部ニ侵入シ、此際一部ニ當リ硬膜表層

部又ハ之ニ近キ部等ニ、糸球狀ニ紛糾セル彈力纖維ヲ極メテ少數ニ認メシメ、或ハ染色不良トナリテ淡染シ特異ノ彎曲ヲ示サ、太キ纖維ガ認メラル、部等アリテ、此部ニ圓形細胞浸潤ヲ來スモノアリ。斯ル際新生組織ハ此部ニ於テ硬膜ノ纖維ニ平行ニ侵入スルモ、實質増大ニ應ジ間質ハ不規則トナルヲ認ム。而シテ組織間隙或ハ血管周圍淋巴腔ヲ傳ヒテ侵入シ、一般ニ大ナル索ヲナスモノハ少ナク小索甚ガ多數ニ存セリ。且斯ル部ニ存スル血管ハ充盈シ其周圍ノ部ニ少數ニ細胞浸潤ヲ示セル部アリ。上記ノ如キ部ニ當レル膠膜組織自個モ稍肥厚シ僅カニ多細胞性トナリ、所ニヨリ少數ニ遊走細胞ノ存スルヲ認メシム。圓形細胞浸潤ハ間質ノ一部ニ於テモ存シ、此浸潤部ニ於テ稀ニ彈力纖維ガ崩壞セルヲ見ラル。如斯強ク硬膜組織ニ侵襲ヲ受クル部ニ於テモ、一部ニハ其中層全ク新生組織ヲ見ズ殆ンド正常ニ近キ構造ヲ示セル部アリ。

次ニ中央ヨリ少シク後方ニ於ケル額断面切片ニテ檢スルニ、矢狀竇ハ大部分核染色ヲ失ヘル物質ヲ以テ充タサレ、其一部ニ於テ所々ニ多數ノ小ナル不正形又ハ不正顆粒狀ニ「ヘマトキシリン」ニ濃染セル部アリ。精査スレバ核染色ヲ失ヘルモ尙重疊性ヲ現ハシ類圓形、橢圓形ヲナシ弱ク「エオジン」ヲ取ル部ヲ認メシム。又甚ダ少數ニ且極メテ散在性ニ多形核白血球及小圓形細胞認メラル。但シ竇縁ニ當ル部ニ於テハ、其部ノ内被細胞ハ分明ヲ缺キ、竇内ヲ充タセル組織ハ直チニ壁ノ結締織ニ相接シ、此部ニ於テ所所ニ小上皮性細胞ガ相並ビテ一列稀ニ二列許リ存スルモノヲ認メシム。其核造構ハ認メラル、モ胞狀ニシテ屢萎縮ノ狀ヲ現ハシ退行性變ヲ示セリ。斯ル細胞層ノ上ニ角化上皮細胞ノ層ヲ認メシメ、核ハ尙不正形ニ染マレルモノアリ。且竇内組織塊ノ一部ニ當リ、所々ニ充盈セル小血管ト之ヲ圍メル纖維性組織トヨリ成ル部數個認メラレ、細胞浸潤可ナリニ強シ。斯ル部ヲ圍メル組織ハ「エオジン」色ヲ取ルコト稍強キ扁平有核性角化性細胞ヲ以

テセルモノアリ。要之此靜脈竇ヲ閉塞セルモノハ、主トシテ壞死性異型性上皮組織ニシテ、間質ハ之ニ比シ極メテ乏シキモノナリ。而シテ此竇内膜ハ可ナリニ核ヲ有スル纖維性組織トナリ、圓形細胞浸潤ヲ示シテ鬆粗トナル部少ナカラズ。此靜脈竇ニ近キ部ニ於テ、蜘蛛膜又ハ蜘蛛膜下腔ノ二一三ノ靜脈管ハ著シク廣キ腔ヲ有スルモノトナリ、血球及液狀物質ヲ以テ強ク充タサル。

上記セル新生組織ト硬膜、腦組織トノ接着部、矢狀竇部ニ近キ周圍部ニ於テ、之ニ近キ硬膜組織ノ一部、殊ニ其外層部モ亦新生組織索ノ侵入ヲ蒙リ、此部ノ纖維ノ方向亂サレタリ。其内層ニ於テハ唯細血管ノ充盈ト其周圍ノ少數ノ細胞浸潤ニ過ギズ。而シテ之ニ續ケル蜘蛛膜ハ可ナリニ其厚サヲ増シ、脂肪顆粒細胞ノ出現アリ、又散在性ニ少數ノ圓形細胞浸潤アリ。然ルニ上記大脳ト接着スル部ニアリテハ、軟腦膜モ亦全ク新生組織ニヨ

リテ占メラル、モ、尙周圍ノ關係ヨリ軟腦膜ナルコトヲ認メシムル部アリ、然レドモ一般ニハ硬腦膜ヨリ大脳ニ續キテ新生組織ニ占メラレ殆ンド軟膜組織ノ所在ヲ明示セズ。即之等ノ部ヲ占ムル上皮群ハ主トシテ細索ヲナシ、殊ニ斜或ハ上下ノ方向ヲ取ルモノニシテ、著明ニ浸潤性増殖ヲ營ミ、唯其間ニ甚ダ稀ニ、角化性組織或ハ一部石灰化ヲ現ハセル可ナリ大ナル竇ノ散在性ニ存スルモノヲ認メシム。其間質組織ハ一般ニ可ナリニ核ヲ有スル纖維性組織ニシテ、割合ニ鬆粗ナリ。而モ一般ニ甚ダ少量ニシテ、且少數ニ圓形細胞浸潤アリ。細血管ハ一般ニ充盈セリ。新生組織ハ屢斯ル血管周圍淋巴腔ヲ傳ヒテ浸潤シ、或ハ結締織間隙ノ部ヲ進メリ。殊ニ其大脳ニ侵入スルニ當リテハ、組織間隙ニ一定ノ規則ナク亂入セルモノ可ナリニ存セリ。其他小血管ノ周圍淋巴腔ニ侵入セルモノモヨク見ラル。而シテ如斯腦組織ニ侵入セル新生組織ニ於テ少シク内部ニ當ル部ニハ明カニ纖維性組織ガ間質ヲ作り、上皮細胞層ト結締織トノ境界ハ明カナルヲ常トスル

モノナレドモ、最先進部ニ於テハ實質素ガ腦組織ニ直接セル部アリ、此所見ハ格子狀纖維染色標本ニ於テ殊ニ分明ナリ。一般ニ之等腦實質ニ侵入スル上皮素ハ細長ニシテ、細胞亦長橢圓形或ハ稍紡錘形等ヲ呈シ、核亦之ニ準シテ其侵入方向ニ一致シテ長シ。然レドモ一部ニ於テハ又角化ヲ示シ、稍壓排性ニ腦組織内ニ進メル像アリ、殊ニ此侵入新生組織ノ先進部ニ近ク、少シク内部ニ當リテハ、小ナル實質素ニシテ角化性重疊體ヲ作レルモノ多數ニ集在スル部アリ。又間質少シク多クナレル部ニハ、實質素ハ細ク核小ニシテ核内造構分明チ缺キ、退行性變ヲ現ハセリ。而シテ如斯侵襲チ蒙レル部ノ大腦組織ハ、新生組織ニ直接スル部ニ於テ屢細血管ノ充盈ヲ示シ、又此部ニ少數ナレドモ圓形細胞浸潤ノ見ラル、モノアリ。此細胞浸潤部ニ相當シテ新生上皮素可ナリニ侵入セリ、且一般ニ「グリア」細胞核ハ此侵入組織ニ近キ部ニ於テ數ヲ増シ、此部ハ Van Gieson 氏染色法ニヨリ黄染スル度強シ。斯ル部ニ當リ又少數ニ「ノイロノフアギー」ヲ認メシム。

次に肉眼上蜘蛛膜腔ノ部ニ認メラントル灰白淡黄ノ限局セル竈ハ、殆んど全ク嗜中性色素性多形核白血球ノ浸潤集積ニヨリ成ルモノニシテ、唯其周邊ノ一部或ハ中部ニ於テ多核巨態細胞數個認メラル。類圓形、橢圓形、不形等ノ胞體ヲ有シ、内ニ小圓形細胞、白血球等ヲ有スルモノアリ。核ハ類圓形、橢圓形等ナリ、屢一側ニ集在セリ。而シテ如斯竈ハ其周圍ニ於テ、核染色性ヲ失ヒ壞死ニ陥レル實質組織ニ相連リ、且此壞死部ハ外方ニ於テ直チニ核ノ明カニ見ラル、種子層性上皮素ニ圍繞セラル、モノナリ。尙此竈ニ近ク細血管多數ニ存シ且充盈ヲ示セルモノ少ナカラズシテ、屢多クノ多形核白血球ヲ腔内ニ認メシムモノアリ。又此竈ニ近ク腦實質ニ接スル側ニ於テ、小動脈管ノ纖維性組織ヲ以テ全ク閉塞セラレタルモノアリ、其壁ハ尙明カニ内彈力板ニ相當スル強キ纖維ヲ認ムルモ、其外方ニ於テハ之ニ直接シテ新生上皮素ノ侵入スルモノアリ。如之腔内ノ一部ニ

モ甚ダ少數ナレドモ上皮性細胞ノ小竈ヲ其管壁ノ部ニ認メシム。此血管ハ纖維部ノモノニシテ、即上記ノ化膿竈ハ纖維ト硬膜ト間ノ部ニ當レリ。上述ノ如キ新生組織ニ近キ部ノ軟膜組織ヨリ續キテ腦溝中ニ侵入セル組織モ亦血管ノ充盈ヲ示シ、且其周圍ノ部等ニ少數ノ圓形細胞浸潤ヲ示セリ。此部蜘蛛膜下ノ部ニ散在性ニ黄色ノ色素顆粒ヲ有スル不整形ノ細胞アリ、「クロマトフォールン」ト認ムベキモノナリ。

更ニ潰瘍底周邊部ニ於ケル新生組織ノ状態ヲ檢スルニ、先ヅ右側顳頂部ニ於テハ、潰瘍底ノ組織ハ、此部ニ近ヅクト共ニ少シク其厚サヲ増シ、胞巢ノ大ナルモノ多數ニ存シ、一般ニ著明ナル胞間橋ヲ認メシム。其表層ニ於ケル壞死部モ可ナリニ厚キ部アリ。一部ニ液狀物質集マレル部アリ。又其邊緣ハ著シク凹凸不平トナレル小骨片ニシテ、全ク無構造トナレルモノナリ。此部ニ認ムルアリ。斯ル部及硬膜ニ近キ部ノ間質ニ小骨片ヲ認メ、此部ニ一致シテ間質少シク多ク、多核性トナリ、此モノガ骨片周縁ノ淺キ窩ヲ充タセルモノアリ。間質ニハ所々圓形細胞浸潤殊ニ「プラスマ」細胞浸潤可ナリニ著シ。下底ハ骨膜境界部ニ當リ、少數ノ圓形細胞浸潤ヲ認ムルモ、此部ニ新生組織ノ侵襲ヲ認メズ。而シテ新生組織ガ骨梁ノ存在部ヲ侵襲スルニ當リテハ、多クノ上皮素ハ之ニ近ヅクト共ニ、骨組織ニ向ヒテ細長トナリ、先ヅ内外兩板ノ間ノ部ヲ侵入シ板障ヲ侵シ、爲メニ楔狀ヲナシテ全ク骨梁ヲ失ヒ、新生組織ニテ占メラル、ヲ見ル。其間質ハ稍鬆粗ナル纖維性結構ニシテ、細血管ハ餘リ多カラズ。新生組織ハ斯ル部ヨリ更ニ板障ノ深部ニ向ヒテ、骨梁間ノ組織ヲ其組織間隙及細血管周圍ニ沿ヒテ浸潤性ニ進メリ。如斯侵襲チ蒙レル骨體組織ハ、少數ノ脂肪細胞及鬆粗ナル纖維性結構ト、充盈ヲ示セル細血管トヨリ成リ、少數ニ且散在性ニ圓形細胞、單核「エオジン」嗜好細胞等ヲ有セリ。上皮素先進部ニ當レル骨體組織ニハ可ナリニ圓形細胞殊ニ「プラスマ」細胞浸潤ヲ示セル部アリ。如斯部ヨ

り更ニ遠ザカレル不變ノ部(新生組織ノ侵襲ヲ蒙ラザル)ニ於テモ亦纖維性

骨髓ヲ形成セリ。斯ル部ニ於テモ單核「エオシ」嗜好細胞、淋巴球其他ノ單核細胞(マスト細胞等)ヲ散在性ニ認メシメ、一部ニ於テハ多形核白血球ヲ認メシムル部アリ。而シテ其髓腔ハ、新生組織侵襲ニ近キ部ニ比シテハ著シク廣ク骨梁ハ細シ、即新生組織ノ侵襲ヲ受クル部ニ近キ骨梁ハ、一般ニ不變ノ部ニ比シ明カニ密邇スルモノアリテ、骨梁ニ増生アルコトヲ認メシム。尙侵襲セラル、骨梁ハ、前記セル間質中ノ骨片ト共ニ、多クノ部ニ於テハ其周縁著シク凹高ヲ示シ、此部ニ巨態細胞ヲ形成スルコト多シ。斯ル巨態細胞ハ可ナリニ大小アリ、核ハ一般ニ稍小ニ、類圓形、橢圓形等ヲ

ナシ、核造構分明ヲ缺ク、胞體ハ橢圓形等ヲナシ、屢々淺キ或ハ深キ凹高ノ部ニ骨緣ニ密着シテ存スルモノ多シ。其他癌索自個ガ骨梁ニ迫リ、其部骨質凹高ヲ示セルモノ亦甚ダ多ク、所ニヨリ多數ノ癌索相並ビテ骨組織ニ迫リ、其アルモノハ骨緣ニ接シテ核分割像ヲ示セリ。一般ニ癌索自個ニヨル骨組織ノ侵襲甚ダ強シ。然レドモ亦一部ノ骨梁ニ於テハ其緣ハ如斯不正ナラズシテ、淺キ大ナル凹高ヲ示シ、増生セル間質結締織ガ此部ヲ充タセリ、殊ニ内板ノ硬腦膜側、外板ノ腱膜側ニ於テハ、新生上皮索ガ此部ニ向ヒテ増殖スルト共ニ、此部ニ於ケル結締織増生シ、血管充盈ヲ現ハシ、骨質ハ淺キ凹高ヲ示シテ著シク消耗ヲ來セリ。尙板障部ニ於ケル骨梁ノ一部ノモノハ、新生上皮索ト少許ノ結締織トノ侵入ノ爲メニ、著シク深キ管狀ノ凹高ヲ示セルモノアリ、其骨緣ハ一部結締織ニヨリテ、一部上皮索自個ニヨリテ種々ナル凹陷部ヲ呈セリ。而シテ之等ノ部ヲ侵襲スル新生組織ノ増殖ハ何レモ旺盛ニシテ、角化甚ダ少ナク胞間橋著明ニシテ、核分割像少ナカラズ。而モ如斯侵襲ヲ蒙レル骨梁ハ、其緣ニ當リ上述ノ如キ變ヲ示セ

ドモ、内部ニハ著變無ク骨小體、骨小管明カニ認メラル、部多シ。唯侵襲ヲ蒙レル緣ニ當レル骨質ノ一部ガ、少シク染色状態等ヲ異ニシ脱灰性變ヲ

認メシムルモノアリ。

而シテ頭蓋骨外板上部ニ存スル腱膜組織モ亦新生組織ニヨリテ侵襲セラレ、之ニ當面セル腱膜自個ニ於テハ、可ナリノ範圍ニ亘リテ血管充盈ヲ示シ、殊ニ侵入組織ニ近キ部ニ於テハ、屢々圓形細胞殊ニ「プラスマ細胞」浸潤著シキ部アリ、造結締織細胞亦少シク増加セリ。新生組織ハ一般ニ細索ヲナシ、其部ノ纖維ノ方向ニ、一部少シク斜ニ此部ニ侵入シ來リ、組織間隙ヲ進メルモノ多ク、血管周圍ヲ進メルモノハ稀ナリ。而シテ此間質ヲナセル部モ亦細血管充盈シ、一部ニ組織内血液浸潤アリ、遊走細胞亦認メラル。

尙此部ニ於ケル新生組織ガ皮膚組織ニ對スル關係ヲ見ルニ、侵入セル上皮索ニ面セル皮下脂肪織ハ少ナクシテ、其部ハ纖維性組織ヲ示シ、此ニ細胞浸潤ト上皮索ノ進入トヲ見ル。真皮組織モ亦新生組織ニ最も近キ部ニ於テハ、細胞浸潤ニヨリ著シク鬆粗トナレリ、此ニ異型上皮群アリ。然レドモ斯ル細胞浸潤無クシテ、組織間隙ヲ小索ノ侵入スルモノモ多シ。而シテ真皮組織ヲ側方(潰瘍側)ヨリ侵襲スルモノアルト共ニ、上方表皮側ヨリ鉛直又ハ斜ノ方向ニ侵入スルモノアリ。此部ニ於テモ細索多クレドモ上層ニ於テハ屢々角化ヲ現ハセリ。而シテ新生組織ハ表面ノ一部ニ於テ、皮膚表皮組織ト接着ヲ現ハシ、此接着部ノ表皮組織ハ菲薄ニシテ細胞亦寡ナヲ現ハセドモ、少シク距タレル部ニ於テハ上皮層及乳頭間上皮索共ニ肥厚シ、後者ハ密邇シ明カニ増殖ヲ現ハセリ。之等ノ部ハ何レモ基底細胞ニ「メラニン色素ヲ認メシメ、又細胞間ニ色素ヲ有セル細胞認メラレ、且真皮ニ「クロマトフォール」アリ。異型上皮群ハ表皮ノ基底ニ近ク、真皮ノ上層ヲ之ニ沿ヒテ少シク浸潤スルモノアリ。尙真皮中層ヲ侵入シ、脂腺組織ニ迫レルモノアリ。斯ル部ニ於テ、間質ニ「クロマトフォール」存スル所ニハ新生組織種子層間隙ニモ同種細胞ノ認メラル、モノアリ、然レドモ其上

皮細胞自個ニハ「メラニン」ト認ムベキ色素ヲ有セズ。之等真皮及新生組織間質部ニ存スル「クロマトフォールン」、表皮層細胞間ノ有偽足性細胞及新生異型上皮胞巢内ノ色素ヲ有スル細胞ハ、何レモ其胞體微顆粒狀乃至稍瀰蔓性ニ帶黃褐色ヲ呈シ、之ニ混ジテ顆粒狀帶黃暗褐色ヲ含メリ。其形態、真皮ニ於ケルモノハ紡錘形、橢圓形或ハ不正形ニシテ、表皮及新生組織ノモノハ殊ニ偽足狀ノ突起ヲ各細胞間ニ伸バセル如キモノ多シ。一部ノモノハ真皮ト表皮組織、又ハ新生組織間質ト實質基底細胞ニ亘リテ見ラル、モノアリテ、之等ハ何レモ相同ジキモノナルコトヲ示セリ。

次ニ左側顳顬部ニ於テ、潰瘍底部ガ縁下彎入ヲ示セル部ニ當レル組織ヲ檢スルニ、其部モ亦大小ノ胞巢ヨリ成レル實質ト少許ノ間質組織トヨリ成リ、細索ヲナセルモノヨリモ不規則ナル胞巢ヲナセル部多シ。其縁ニ當レル部ハ實質或ハ一部間質組織ヲ面ニ曝露シ、此部ハ壓壊死ニ陥リ、多形核白血球散在性ニ浸潤セリ。此部ニ近キ間質細血管ハ著シキ充盈ヲ現ハセリ。一般ニ此部ノ間質ハ懸粗ナル結締織ニシテ、圓形細胞浸潤ヲ認メシムル部稀ナラズ。此ノ如キ狀ヲ示セル部ヨリ上方ニ當レル組織ハ、可ナリ廣汎ナル範圍ニ亘リテ新生組織ノ發育セルヲ認メシメ、周圍ノ關係ヨリ見テ頭蓋骨ノ存スル部ニ相當スレドモ、殆ンド全ク骨質ヲ存セズ、前記ノ如キ造構ヲ示セル不規則ナル組織ガ、全般ニ亘リテ不羈ナル増殖ヲ營ミ、一般ニ角化傾向強クシテモ、其増殖ハ浸潤性ニシテ殊ニ細索ヲナスモノニ於テ然リ。一般ニ細索狀ノモノハ胞巢狀案ニ混ジテ存スレドモ、此部ノ上方ニ於テ腱膜組織ニ迫レル部ニ於テハ、殆ンド角化性胞巢ヲ認メズシテ小ナル索ト間質トヨリ成リ、此部ニ於テ極メテ少許ノ斷片狀又ハ僅カニ粉狀ノ彈力纖維ヲ見ル部少ナカラズ、殊ニ腱膜ニ近キ部ニ多シ。而シテ斯ル小索ハ腱膜組織纖維ノ方向ニ浸潤シ、殊ニ其最上層部ニ多ク、此際該侵入部ニ當リ一般ニ圓形細胞浸潤認メラル。而シテ如斯浸潤ニヨリ腱膜組織ハ粗ト

ナリ、其纖維間ニ實質群ヲ容レ腱膜組織ハ其間質ヲナセリ。尙斯ル纖維或ハ之等ノ實質侵襲部ニ近キ纖維ハ核ヲ増シ増生ヲ現ハセルモノアリ。更ニ肉眼上上來記載セル部ト直角ヲナセル潰瘍縁ノ堤狀部モ亦殆ンド同様ノ像ヲ呈シ、同ジク新生組織ヨリ成ルモノナリ。其一部ニ於テハ圓形細胞浸潤可ナリニ強キ部アリ、壊死ノ像ハ一般ニ上記縁下彎入部トソレニ比シ高度ニシテ、一部ニ於テハ可ナリ廣汎性ニ現ハレ、多形核白血球亦著明ナル部アリ。如斯部ガ外方ニ向ヒ皮膚其他ノ組織ニ連ナレル部ノ狀態ニ就テ觀察スルニ、腱膜部ニ於テハ上記セル部ニ相續キ全ク相等シキ狀ヲ示シ、其上部ニ當レル皮下脂肪層ハ、前記右側ニ於ケルト等シク上皮索進入ニ近キ部ニ當リテハ纖維性トナレリ。而シテ之等ノ部ヨリ真皮組織ニ亘リテ、新生組織ハ一般ニ著シキ増殖ヲ營ミ、此部ニ當リテハ皮膚附屬器認メラレズ、唯侵襲端ノ部ニ當リテ僅カニ汗腺、毛囊、毛根等少數ニ認メラレ。之ヨリ外方ニ於ケル真皮ノ部ニ於テハ、之等ノモノガ密在スル部アリテ、上記ノ部ト共ニ他側ニ於ケルト相似タル狀ヲ示シ、圓形細胞浸潤著明ナリ。但此部ノ新生組織間質中ニ存スル「クロマトフォールン」及新生上皮索ノ細胞間ニ存スル色素細胞ハ右側ニ比シ著シク多ク、殊ニ多數ニ胞巢内ニ侵入スルモノ認メラレ、或モノハ有核角化細胞ニ近ク及ベルモノアリ、形極メテ不整ナリ。尙表皮組織ハ堤狀部表面ノ内端ニ於テ新生實質索ト相接着シ、前者ハ一般ニ菲薄トナリ乳頭間上皮索ヲ失ヒ、基底部平滑ナリ。少シク距タレル部ニテハ表皮組織少シク増生ノ狀ヲ示セリ。其表皮索ハ真皮内ニ延ビテ新生異型上皮群ト接着スルモノアリ、カ、レ部ノ境界ハ著シク分明ニハアラズ。而シテ上記表皮ノ菲薄ナル部ニ於テハ基底細胞ハ「メラニン」色素ヲ含マズ、色素含有細胞ノ表皮間ニ存スルモノ無シ。且一般ニ新生組織周邊皮膚真皮組織ニ於テ、新生組織ノ侵襲ヲ受クル部ノ彈力纖維ハ、尙間質ノ部ニ僅カナレドモ認メラレ其或モノハ少シク膨大シ染色淡シ。斯ル像ヲ

示セル部ヨリ更ニ外方ニ於テモ真皮ニハ僅カニ細胞浸潤ヲ示セル部アリ、彈力纖維ニハ著シキ變ヲ見ザルモ表皮ハ少シク菲薄トナレルハ年齢ニ基ク變ト認ムベシ。

更ニ該右側顳顬部ノ掘鑿部ノ底ニ當レル部モ亦上記潰瘍面ト同様ノ像ヲ示セリ、但此部ニ於テハ硬膜ニ當レル部ノ新生組織ハ斜或ハ殆ンド鉛直ニ近キ方向ヲ取リテ深部ニ増殖シ、蜘蛛膜組織ノ部ニ於テモ亦錯綜セル細索ヲ作りテ不規則ニ増殖セリ。其内面ハ壞死ヲ現ハス部アリ、之ニ續ケル上層ノ部ニ細胞浸潤認メラル。尙如斯部ニ隣接セル軟膜部ニハ、前記左側顳顬部ニ於テ記載セル如キ反應性變ヲ現ハセリ。而シテ硬膜ノ上方ニ當レル新生組織ハ、掘鑿部ニ架スル組織ト同様ノ造構ヲ有シ、又著シク肥厚セリ。但前ノ部ト異ナリ、所々ニ骨破片ヲ散在性ニ認メシメ、此モノハ多ク結締組織ニヨリテ、殊ニ其周邊ノ凹陷部ハ増殖セル結締組織細胞ニテ充タサル、モノ最モ多シ。唯一部ニ當リ其 Howship 氏窩ニ多核巨態細胞ヲ認ムルモノアリ、之等骨片ノ造構ハ著シク分明ニハアラズ。但腱膜組織ト新生組織トノ間ニ横ニ長ク横ハレル一骨片ハ、其骨小體ヨク認メラル。而シテ斯ル部ニ於ケル新生組織實質ハ、細索ヲナセル部ト角化性胞葉部トアリテ、殊ニ其中層ノ一部等ニ於テハ角化胞葉ノ著シク集マレル如キ部モ存ス。如斯ニシテ更ニ外方ニ至ルト共ニ肥厚ノ度弱クナリ、同時ニ骨片次第ニ多キチ加ヘ、ヤガテ頭蓋骨質ヲ侵襲スル部ニ至ル。此部ニ於テハ板障部ヨリ各骨梁間ヲ侵入スルノミナラズ、又腱膜側、硬膜側ヨリモ、間質ト共ニ、實質上皮膚組織ガ外板、内板ニ向ヒテ侵蝕シ來リ、板障部骨梁及内外板ハ何レモ不正形ニ強キ物質消耗ヲ現ハセリ。其侵襲細胞ノ狀、骨質ノ變、骨髓組織ノ態度等ハ殆ンド右側ニ於テ見タル所ニ相同シ。而シテ斯ル骨組織ト腱膜トノ間ニ當リ横紋筋組織ヲ認メシメ、其骨組織ニ當レル側ニ於テ新生組織増殖甚ダ強キ部ニ於テハ、筋纖維ハ之ヲ支持スル結締組織ト共

原 著 茶谷 再ビ頭髮部癩腫ニ就テ(頭髮部角化性癩腫ノ病理追加)

ニ腱膜組織ヲ侵襲スル新生組織トノ間ニ挾マレ、爲メニ筋纖維自個ガ多少萎小ヲ示セルノミナラズ、一部ノモノハ横紋不明トナリ、蠟樣變性ヲ現ハシ、或ハ空胞形成ヲ示セルモノアリ、然レドモ一般ニ其變ハ輕シ。

本例ニ於ケル細胞浸潤ノ狀態ニ就テハ各部ニ於テ記載セルモ、一般ニ間質ニ於ケルモノハ淋巴球樣小細胞多クシテ、之ニ「プラスマ細胞、造結締組織細胞、組織球等ヲ混在シ、」エオジン嗜好細胞ハ極メテ少ナク、「マスト細胞亦甚ダ少ナシ。又細胞浸潤中特ニ「プラスマ細胞多キ部ニ於テハ Rous 氏「フクシン小體ヲ認メシムルモノアリ、其小體ニハ大小アリ、且「プラスマ細胞ノ胞體ニシテ細小小體ヲ示セルモノモ所ニヨリ認メラル。

一般ニ「プラスマ細胞ハ所ニヨリ大小アリ、其核及胞體ノ性狀ハ淋巴球トノ間ニ親密ナル關係ヲ示セリ。其他本例ニ於テハ一般ニ新生組織ニ直接シテ、或ハ間質部ニ於テ、出現スル多核巨態細胞ハ甚ダ少ナクシテ、唯所々ニ稀ニ一個或ハ二三個ノ斯ル細胞ヲ見タルノミ。唯右側顳顬部ニ於テ腱膜ニ近キ部ニ當リ、實質角化細胞ニ接觸シテ七―八個ノ巨態細胞ヲ見タルモノアリシハ最モ多キ所ナリ。其形、大サハ不同ニシテ核ハ小ナル方、屢一部ニ集リテ存シ異物巨態細胞ノ型ヲ取レリ。

肺臟 肉眼上右肺下葉ニ於テ鞏ニ觸レ割チ加フルニ膿樣物ヲ洩シタル部ヨリ數個組織片ヲ取り切片ヲ作りテ組織學的ニ檢スルニ、其部ノ肋膜ハ纖維性ニ肥厚シ細血管充盈シ、肋膜下ニ於テ一部ハ多形核白血球、一部ハ大單核圓形細胞、淋巴球等ニヨリ肺胞腔ヲ充タセル竈ヲ形成シ、斯ル竈相並ビテ存セリ。殊ニ後者ノ型ヲ取ルモノ多シ。而シテ如斯單核細胞ヲ充タセル肺胞壁ニ於テ、其肺胞上皮ハ屢骰子形ニ相並ビ、腺腫樣像ヲ呈スルヲ認メタリ。

淋巴腺 左右顳顬部皮下チ檢シテ小豆大、大豆大ノ淋巴腺三個ヲ得、檢シタルニ、之等淋巴腺ハ共ニ濾胞ノ狀分明ヲ缺キ、一般ニ纖維性物質及紡

錐形細胞ノ増生ヲ示シ、且被膜亦肥厚シテ慢性炎ノ性状ヲ現ハスモ、上記
頭部ニ見タル新生組織細胞ニ該當スベキ細胞及細胞團ハ一モ之ヲ認メシメ
ズ。

頸部ノ淋巴腺ハ指頭大、蠶豆大ノモノ數個、氣管分岐部淋巴腺ハ蠶豆大
ノモノ數個ニシテ、何レモ剖面黒灰色ナリ、殊ニ氣管分岐部ノモノニ強
シ。之等ノモノヲ鏡檢スルニ、何レモ炭粉ノ沈着ヲ示シテ纖維性トナリ、
殊ニ後者ニ強ク、唯一部ニ淋巴組織ヲ認メシム。氣管分岐部ノ二一三ノモ
ノハ陳舊ナル結核結節ト認ムベキ硝子様類圓形ノ殆ンド無構造ノ瘤ヲ形成
セルモノアリ。然レドモ新生組織ト認ムベキ細胞團ハ何レニモ認メズ。

上述ノ記載ニヨリテ明カナルガ如ク、本例ハ彈創痕ヨリ發生セ
ル角化扁平上皮癌腫ニシテ、頭髮部軟組織ノミナラズ、骨質ヲ侵
襲シ全ク之ヲ崩壞シ、遂ニ頭蓋腔内ニ侵入シ一部大脳組織内ニ増
殖ヲ營メルモノナリ。腫瘍組織ハ一般ニ角化傾向著シク大ニシテ
胞巢壓排性増殖可ナリニ認メラル、モノナレドモ、殊ニ浸潤性増
殖亦強ク、就中周邊部ニ於テ著シ。其皮膚組織、腱膜、骨組織ニ
對スル態度ハ第一例ニ似タル點多シ、然レドモ其増殖ハ彼ニ比シ

第三例

本例ハ石川外科教室所藏ノ標本ニシテ、同教室主任石川教授ノ好意ニヨ
リ貸與セラレ且檢索スルコトヲ許サレタルノミナラズ、病歴ノ使用等種々
ナル點ニ便宜ヲ與ヘラレ、尙有益ナル助言ヲ得タルコト尠ナカラズ。茲ニ
同教授ニ對シ厚ク感謝ノ意ヲ表ス。

出○彌○次 男 三七歳、農業。

病歴 大正十四年七月二十日入院(金澤醫科大學附屬醫院石川外科)。

著シク浸潤性ニシテ且彈力纖維ノ崩壞變性少ナカラズ。又真皮組
織ノ中層及深層ニ多數ノ「クロマトフォアレン」存シ、此モノハ癌
組織ノ間質ノミナラズ實質組織中ニモ存セリ。又骨組織ノ癌細胞
索ニ侵サレ吸收セラル、コト第一例ヨリモ多シ。而シテ癌組織ハ
蜘蛛膜下ノ部ニテ強キ増殖ヲ現ハシ、之ニ一致シテ反應性ヲ示
シ、又白血球ノ集簇ニヨリ癌組織ノ破滅ノ狀アルモノアリ、斯ル
竈内ニ多核巨態細胞ノ出現アリ、又周圍ノ間質部ニハ細血管ノ多
數ニ存スルコトヲ認ム。次ニ大脳組織内ニ増殖スルニ當リテハ血
管周圍淋巴腔ノ部ヨリ侵入スルコト最モ強ク、然ラザル場合ニハ
先ヅ局所ニ結締織性組織増殖シ此ニ癌索ノ進入ヲ見ルコト多シ。
然レドモ實質ニ追隨シテ間質結締織ノ増生ヲ來シ實質ハ腦組織ノ
少シク鬆粗トナレル部ニ向ヒテ亂入スル部アリ。如斯侵入セル癌
組織ニ接シテハ、腦組織ハ神經細胞ノ消失或ハ減少ト「グリア細
胞」ノ増生、少數ナレドモ「ノイロノファギー」ノ出現、乃至圓形細
胞浸潤並ニ細血管ノ擴張、充盈及新生等ノ變ヲ來セリ。

診斷 頭部角化扁平上皮癌。

主訴 火傷癩痕後ノ潰瘍。

現病歴 三歳ノ時右側顳頂部ニ大ナル火傷ヲ受ケ、該肉芽面ハ當時父親
ノ上膊部内側ノ皮膚組織ヲ移植シテ癩痕ヲ結成セシムルコトヲ得タリ。其
後該癩痕部ニ異常無カリシモ、五一六年前此部拇指頭面大ノ部ガ濕潤シテ
遂ニ潰瘍トナリ、碳酸軟膏、「ヨードフォルム」劑等ヲ用ヒテ治療ヲ試ミタ

ルモ、荏苒治癒セズ常ニ炎症狀ヲ伴ヘリ。然ルニ昨年三月、植木ノ手入中ニ松樹ノ枝ニ此部ヲ衝突シ、斯ル外傷後前記セル潰瘍ハ醫治ニ抗シテ増大シ現今ニ及ベリ。著シキ自覺症狀ヲ訴ヘズ。

既往歴 生來健康ナリ。家族關係ニ惡性腫瘍ヲ認メズ。

現症 体格、榮養共ニ良、皮膚ノ色ハ一般ニ帶褐色ニシテ汚穢ナリ。呼吸器、消化器、循環器、泌尿生殖器、神經系統ニ異常ヲ認メズ。

局所々見 右側顳頂部ヨリ顳顬部ニ亘レル部ニ、手掌大ヨリ尙少シク大ナル癩痕部アリ。此部ハ毛髮ヲ有セズ滑澤ナリ。該部ニ於テ其中央ヨリ少シク顳顬側ニ偏シテ、小兒手掌大ノ不正圓形ノ潰瘍性ノ瘻アリ。此部ハ皮膚ノ面ヨリ凹陷シ、其底ノ大部分ハ骨質ヲ存セズシテ不良ナル肉芽面ニテ蔽ハレ、直チニ硬腦膜組織ニ移行ス、其組織ハ凹凸不平ニシテ、豌豆大、指頭大ノ肉芽腫瘍多數ニ存シ、殊ニ其周邊ノ部ニ少ナクシテ中部ニ多シ。色ハ赤又ハ暗赤ニシテ出血シ易シ。該潰瘍ノ周縁ニ當レル部ハ汚穢灰白色乃至僅カニ赤色ノ不平ナル肉芽面ヲナシ、肉芽ノ一部ハ癩痕狀ヲナセル皮膚ノ面ヨリ僅カニ膨隆セル部アリ。且此部ニ於テハ皮膚組織ノ下ニ於テ不正ニ縁下彎入ヲ示セルアリ。骨質ハ該擱斃部ノ下方ニ當リテ、潰瘍底ノ最周邊ニ不正ニ波濤狀ヲナシテ僅カニ認メラレ、其縁自個モ亦汚穢ニシテ著シク凹凸不平ナリ。

處置並ニ其後ノ經過 七月二十四日石川教授執刀ノモトニ此部ニ觀血の處置ヲ行ヘリ。即潰瘍性瘻ノ縁ヨリ外方ニ一・八釐ヲ距テタル部ニ、輪狀ノ切開ヲ施シテ深ク頭蓋骨ニ及ビ、此切開部ヨリ潰瘍縁ニ當レル組織塊ヲ切除シ、更ニ其下方ニ於ケル骨質ハ、健康部ニ亘リテ骨質ヲ以テ切除セリ。出血シ易キ硬腦膜表面ハパツクラン氏燒灼器ヲ以テ燒灼シ「ガーゼ」ヲ以テ壓抵シテ手術ヲ了ヘタリ。

手術後右側上膊全体ニ亘リテ知覺鈍麻アリ。七月二十七日日朝六時頃ヨリ二―三回右側上肢ニ痙攣ヲ來シタルモ、頭部ノ繃帶ヲ緩ニシテ治癒セリ。七月二十九日、硬腦膜ノ一部ニ瘻孔ヲ認メ、此部ヨリ膿ヲ分泌シ來ル。八月四日硬腦膜燒灼部ノ縁ニ當リ肉芽腫瘍ヲ生シ來レルヲ以テ、六日、十九日、二十七日ニ該病竈ノ全部ニRöntgen線放射ヲ行フ。然ルニ前記ノ腫瘍ハ之ノ處置ニ抗シテ却ツテ増大シ來リ、遂ニ指頭大、拇指頭大トナレリ。更ニ上下肢ノ知覺麻痺、運動障礙、言語障礙及嘔吐等ヲ來ス様ニナリ、尙左側眼球ノ視力障礙ヲモ來スニ至レリ。依ツテ十月ヨリ局部ノ「ラヂウム線治療」ヲ試ミ、一日、三日、四日ニ一〇屈ノ「ラヂウム」ヲ四―九時間ニ亘リテ局部ニ貼用シタルモ、病竈部腫瘍ハ尙増殖強クシテ、且此部ヨリ盛ニ液狀物質(腦脊髓液)ヲ洩スニ至リ、十月七日患者ノ都合ニヨリ退院セリ。

肉眼の所見

前記病歴中ニ記載セラレタル如キ術式ニヨリ切除セラレタル組織塊ニ就テ其性狀ヲ檢スルニ、

該組織塊ハ略輪環狀ヲナシ、中部ニ當レル潰瘍性乃至肉芽性ノ部ハ大部分認メラレズ、主トシテ前記病竈部ノ周邊部ヲナセル組織ヨリ成リ、即其部ハ癩痕様ニシテ全ク毛髮ヲ有セズ、平滑ニシテ灰白色、灰白々色又ハ極メテ僅カニ淡紅色ヲ呈シ、一部ニ於テハ面ニ汚穢帶黒色ノ物質ヲ附着セリ。而シテ斯ル部ノ幅ハ所ニヨリ多少ノ廣狭ハアレドモ、大約一・五釐ヲ算シ所ニヨリ一釐ニ滿タザル部アリ。如斯癩痕様部ノ内方ニ當リテ一部潰瘍性部ノ組織認メラレ、此部ハ一般ニ周圍部ヨリ少シク低マレル狀ニ存シ、且一般ニ不平ニシテ次粟粒大、粟粒大ノ細顆粒狀ヲ呈シ、稀ニ米粒大ニ至ル小結節ヲ混在セリ。唯一個上記癩痕様部ニ接シテ指頭大ノ結節アリ、皮膚面ヲ越エテ半球狀ニ膨隆シ、其面亦細顆粒狀ニシテ不平ナリ。而シテ斯ル部ノ面ハ殊ニ其細顆粒狀部ノ凹陷部ニ相當シテ癩痕部ニ見タル如

キ物質ヲ附着セセリ。上記癩痕様皮膚ト潰瘍性部ト境界ハ一般ニ不正ニ波狀ナシ、皮膚組織ハ多クノ部ニ於テ潰瘍部組織ノ端ヲ僅カニ覆ヘル如キ狀ニ存ス。唯前記指頭大ノ結節ヲ認メタル部ニ於テハ、結節ノ一部ハ却ツテ皮膚面ヲ被覆セリ。而シテ被檢組織塊ニ於テ如斯潰瘍性狀ヲ現ハセル部ハ、一部ニ於テハ唯二一三種ノ幅ヲ殘スニ過ギザルモ、上記結節部或ハ之ニ近キ部ニ於テハ、癩痕部ノ内方ニ當リ一・五種ノ範圍ニ亘リテ認メラル。

次ニ此組織塊ノ底面ノ性狀ヲ檢スルニ、癩痕組織ニ相當スル周圍部ノ底面ハ一般ニ平滑ニシテ、潰瘍性部ニ當レル組織ハ不平ニ顆粒狀ヲナシ、之等ノ部ノ境界ハ分明ナル部アリ或ハ著シク分明ヲ缺ケル部アリ、増殖強キ部ニ於テハ一般ニ分明ナリ。而シテ所々ニ帶褐墨色ノ物質ヲ面ニ附着セリ。

顯微鏡的検査所見

本例ニ於テ認メラル、新生組織モ亦、基質ヲナセル纖維性結締ト實質細胞群トヨリ成レリ。

實質細胞 種子層細胞、有核角化細胞及角化細胞ヲ區別シ得ベク、顆粒層細胞ハ認メズ。有核角化細胞及角化細胞ノ形態ハ前二例ニ記載セルト殆ンド相同ジキヲ以テ再説セズ。

種子層細胞ハ一般ニ正常表皮ノソレヨリモ稍大ナルモノ多シ。殊ニ其深層ニ相當スルモノハ正常ト可ナリニ著シキ差異ヲ示シ、即其胞体ハ長橢圓形、紡錘形等ヲナシ、核膜明瞭、核内顆粒狀ニシテ、核小體二個以上ノモノアリ、類圓形、橢圓形等ヲナシ又桿狀其他不整形ノモノアリ。且膜胞間橋ヲ示セリ。基底細胞層ニ相當スル部ハ胞体ノ稍小ナルモノヲ見ルコトアリ。種子層淺層ニ相當スル細胞ハ多角形其他ノ形ヲナシ大ニシテ胞体ノ「エオジン嗜好性可ナリニ強ク微細顆粒狀ヲ呈シ、胞間橋ハ認メラレズ、

細胞ハ一般ニ密邇セリ。胞狀、橢圓形ノ核ヲ有シ、核小体ノ數ハ一般ニ深層ノソレヨリモ多キモノ多シ。

組織的造構 肉眼上潰瘍縁ニ當リテ認メラレタル指頭大ノ結節部ヲ鏡檢スルニ、其表層ノ大部分ハ可ナリノ厚サニ亘リ角化性物性及壞死性物質ヲ以テ覆ハレ、中部ヨリ深層ノ一部ニ亘リテ種子層細胞ヨリ成ル胞巢不規則ニ存シ、屢該胞巢ハ索狀ヲナシ、其周圍部ハ屢非角化細胞ニヨリ、中部ノ大部分ハ角化細胞殊ニ有核角化細胞ヨリ成レルモノ可ナリニ見ラル。種子層ノ部ニ當リテハ屢母星期、子星期ノ核分割像、其他種々ナル異型的分割像ヲ可ナリ多數ニ認メシム。一般ニ種子層基底ノ部ハ凹凸不平ノ度可ナリニ強ク、其凸出部ニ相當シテ核分割像ヲ示セルモノアリ。一般ニ核分割像ハ集簇的ニ出現スル傾向アリ、又有核角化細胞ニ近キ部ニモ認メラル、コトアリ、最も多キハ種子層深層及之ニ近キ淺層部ナリトス。種子層細胞ニシテ核ノ空胞形成ヲ示セル如キモノハ殆ンド認メラレズ。一般ニ之等ノ胞巢ハ角化ノ傾向餘リ強カラズ、殊ニ深層ニ至ルト共ニ胞巢小トナリ愈々角

化物質少ナシ。斯ル角化性物質ノ一部ニハ所々細胞浸潤殊ニ多形核白血球ノ集簇ヲ示シ、此部崩壞ヲ示セルモノアリ。斯ル部ハ時ニ稍囊狀ニ擴大セルモノアリ。如斯退行性變ヲ示セル胞巢ヲ除キ、多クノ胞巢ハ浸潤性ニ深層ニ向ヒテ増殖シ、一部ヲ除キ多クノ胞巢ハ上下ノ方向ニ存スルヲ見ル。間質ハ一般ニ少ナク實質細胞群ノ間ヲ樹枝狀、網狀ニ存セリ、可ナリニ核ニ富ミ、少數ノ核分割像アリ、所ニヨリ極メテ僅カニ彈力纖維ヲ認メシメ、夫等ハ相連絡セルモノニ非ズシテ唯不整ニ存シ、染色不良ナルモノアリ又紛糾セルモノアリ。其基底ニ近キ部ニ當リ間質中ニ、基底ニ平行ニ存スル血管ハ著シク怒張シ、一部組織内血液浸潤ヲ示セリ。又所ニヨリ小圓形細胞浸潤ヲ示シ殊ニ如斯細胞浸潤ハ新生組織基底部ニ著シクシテ、其一部ニ於テハ間質根部ヨリ基底部ニ亘リテ瀰漫性ニ圓形細胞殊ニ「プラスマ

細胞浸潤ヲ示セリ。

基底ニ存スル結締織ハ可ナリニ厚キモノニシテ、其纖維ノ方向ハ多少錯綜スル部モアレドモ、大體新生組織基底ニ平行セル位置ヲ取リテ走り、其下部ニハ脂肪織アリ。脂肪織ニ近キ部ニハ小動脈管アリテ其内膜ハ肥厚セリ。斯ル部及其他ノ小血管周圍ニ「プラスマ細胞浸潤」アリテ竈狀ヲナセリ。之等ノ部ニ當リ所々ニ彈力纖維ノ塊狀ニ紛糾シテ存スルモノアリ、一般ニ真皮組織ニ相當スル部ニハ之ヲ見ズ、皮下脂肪織ノ部ニハ相當ニ認メラル。上記新生組織間質部及其基底ノ癩痕樣組織等ニ於テ、其部ノ浸潤細胞ニ混在シテ可ナリニ「エオジン嗜好細胞」存在ヲ認ム、殊ニ「エオジン嗜好細胞」ハ新生組織侵襲部ヨリ少シク深部ニ當ル部ノ、稍粗ナル細胞浸潤部ニ多クシテ、斯ル部ニテハ結締織間隙ニ數個ノ「エオジン嗜好細胞」が間隙ノ方向ニ相並ベルモノ屢見ラル。其多クハ多形核ヲ有シ少數ニ單核ノモノ存セリ。

如斯腫瘍組織ガ一方癩痕樣ヲ示セル皮膚ニ接スル部ノ狀態ヲ檢スルニ、其表皮組織ガ新生組織ニ移行スル性狀ハ可ナリニ徐々ナルモノアリ。即該癩痕樣皮膚ノ部ハ、真皮組織核ニ貧シキ硝子樣纖維性結締織ヨリ成リ、其上層部ニ少許ノ細胞浸潤アリ、此部彈力纖維ヲ見ズ。唯真皮中層、下層ニハ中等量ニ存シ、殊ニ中層ノ上部ニハ帶狀ヲナシテ、正常ニ比シ纖維細ナル彈力纖維ガ此部纖維ノ方向ニ集リテ存シ、染色ハ餘リ可良ナラズ。表皮組織ハ殆ンド全ク乳頭間上皮素ヲ有セズ、僅カニ認メラルル一―二ノモノモ、甚ダ小ニシテ、基底ヲ表皮側ニ有スル楔狀ヲ示シ、表皮ニ平行セントスル狀ヲ現ハセリ。表皮ノ種子層ハ正常ノソレニ比シ約二倍ノ厚サヲ示シ細胞、核共ニ大ニシテ明カニ増生ヲ示シ、而モ基底細胞ハ小ニシテ密邇セリ。中間層認メラレ、且角化層著シク厚シ。此部皮膚附屬器ヲ有セズ、又真皮、表皮共ニ色素ヲ有セズ。如斯皮膚組織ハ、腫瘍組織ニ近ヅクト共ニ、

真皮上層ニ於ケル細胞浸潤ヲ増加シ、反之中層上部ニ於ケル既記彈力纖維ハ少ナクナリ、遂ニ全ク失ハル、ニ至ル。而シテ斯ル真皮ノ變化ニ應ジテ表皮ノ乳頭間上皮素ハ其數ヲ増シ、且少シク大トナリ、次第ニ斜ニ深部ニ侵入スル傾向ヲ示シ來ル、斯ル部ニ於テハ「クロマチン」ニ富メル核ヲ有スル小細胞ノ密邇スルモノヨリ成レル表皮素多ク、其部ノ真皮組織ハ「プラスマ細胞浸潤」ヲ示セリ。而シテ更ニ新生組織ニ接近スルト共ニ、其表皮表層ノ角化層ハ殆ンド境界無ク新生組織ニ移行シ、カ、ル部ニ當レル深部ニ於テハ、真皮殊ニ其乳頭部ニ「プラスマ細胞浸潤」甚ダ強ク、長ク延ビタル表皮素ハ前記セル部ヨリモ更ニ大ニシテ密邇シ吻合シ、之ヲナセル細胞ハ一般ニ小ニシテ、且其種子層深層ノ細胞核ハ、次第ニ其胞狀ノ性狀、新生組織ト類似シ來リ核小体ノ數多クナレルモノアリ、其胞間橋ハ表皮部ノ整然タルモノニ比シ配列少シク不整トナリ新生組織ノソレニ類セル部アリ。而シテ基底細胞及其他ノ細胞ニ核分割像著シク多クナレリ、核分割像ハ種子層淺層ニ見ラル、モノアリ。而シテ此部ニ於テハ尙基底細胞ハ整然ト相並ベルモ、此部ト明カニ新生組織ナル胞巢トノ間ニ存スルモノハ、基底細胞ノ配列不整トナリ、又類圓形ヲ示スモノアルニ至リ、遂ニ殆ンド新生組織ト區別シ得ベカラザルニ至ル。而シテ乳頭間表皮素ハ如斯増殖ヲ現ハスト共ニ、一般ニ表皮組織ハ薄クナリ、上述新生組織ト區別シ得ベカラザル部ニ於テ、概シテ最モ薄キ觀アリ。此部ニ於テテ少數ニ多形核白血球浸潤ヲ示セリ、然レドモ退行性變ニ著シカラズ。

次ニ本腫瘍ガ潰瘍側ニ向ヘル部ノ狀態ヲ觀ルニ、其邊緣部ハ表層ヨリ深部ニ至ルマテ上記セル新生組織ノ連續セルモノニヨリテ占メラレ、真皮組織、皮下組織、腱膜組織ヲ側方ヨリ侵襲セリ、而シテ深部ニ於テハ角化傾向強シ。且如斯浸潤部ノ深層ニ當ル部ニ於テモ亦其浸潤細胞ノ間ニ多クノ「エオジン嗜好細胞」ノ混在セルヲ認メシム。

其他本例ノ潰瘍性部ノ周邊ヨリ切除セラレタル二・三ノ部ヨリ組織片ヲ
 截リ取リテ檢スルニ、上述セル部ノ所見ト類似スルモノ多シ。即其大部分
 ハ表皮組織ト真皮ノ癩痕樣結構トヨリ成リ、皮膚附屬器及毛髮、毛根ハ
 認メラレズ、一汎ニ表皮ハ正常ヨリモ厚クシテ其乳頭間上皮下索ハ甚ダ短小
 ナリ。真皮乳頭層及表皮下層ニハ多クハ彈力纖維ヲ見ズ、中層ノ上部ニ當
 リテ時ニ稍細キ彈力纖維ノ集リテ存スルモノアリ、染色ハ不良ナルモノア
 リ、濃染シ、紛糾セルモノアリ。乳頭層ニ當リテ「クロマトフォールン」ヲ
 認メシムルモノ多シ、然レドモ表皮ニハ「メラニン色素ヲ認メシムルモノ
 アリ、然ラザル部アリ、一定セズ。而シテ斯ル組織ニ向ヒテ表層ヨリ、或
 ハ真皮組織ヲ側方ヨリ、異型上皮群ノ不規則ニ侵入スルモノアリ、其際眞
 皮殊ニ其上層ノ強ク硝子樣ヲ呈セル結構纖維個々ノ間隙ニ向ヒテ、密ニ
 異型上皮細胞索ガ細索ヲナシテ侵入スルモノノ認メラル、アリ。斯ル部ニ
 當リ圓形細胞浸潤ノ存スルアリ、又殆ンド存セザルアリ、殊ニ「プラスマ
 細胞多ク次テ淋巴球多シ。「エオジン嗜好細胞亦少ナカラズ。

上記ノ如ク本例ハ火傷癩痕ノ中部ニ發生セル角化性癌腫ニシ

參 考 例 皮膚癌腫(教室ニ貯藏シアリシ標本)

姓名、性、年齢、職業 不詳。

肉眼の所見

標本ハ病竈部周邊ノ皮膚一・二釐ヲ殘シテ切除セラレタルモノナリ、其
 一半ハ癩痕樣皮膚組織ニ、他半ハ正常皮膚組織ニ連ナレリ。

新生物ノ大サ長徑八釐、短徑七・五釐ニシテ稍不正橢圓形ヲナシ、其癩
 痕樣皮膚ニ接スル部ハ甚ダ狹キ裂隙ヲ示シテ稍平面ニ相移行スルモ、正常
 皮膚ニ連レル部ハ高ク隆起シ(一・五釐)之ト明カニ境シ、新生組織周邊部
 ト皮膚ノ面トノ間、鈍角、時ニ銳角ヲナシテ、溝ヲ挾ミテ相移行セリ。新

テ、其増殖ハ一般ニ甚ダ旺盛ニ、壓排性ニ増殖スルト共ニ、殊ニ
 著明ニ浸潤性ニ細索ヲナシテ増殖シ、深部ニ向ヒテ破壞性ニ進メ
 ルト共ニ、側方ニ癩痕組織ヲ侵襲スルモノナリ。該癩痕組織ハ主
 トシテ強キ纖維性組織ヨリ成リ、所々圓形細胞浸潤アリ、一般ニ
 彈力纖維ハ正常ニ比シ乏シク且細クシテ染色悪ク、退行性變ヲ現
 ハセリ。此部ノ表皮ハ一般ニ正常ニ比シ肥厚ヲ示シ且基底層ハ細
 胞密適シ増生ヲ示セル部アリ。斯ル部ガ新生組織周邊部ニ近ヅク
 ト共ニ所謂側生増殖ヲ現ハシ、表皮ノ肥厚ト共ニ眞皮ノ最上層ニ
 圓形細胞浸潤ヲ來シ表皮索ノ深部ニ向ヒテ侵入スルモノ生ジ次第
 ニ形態ヲ變ジテ、新生組織周邊ニ於テ殆ンド境界無ク癌組織ニ相
 移行セリ。本例ニ於テモ間質ニ圓形細胞浸潤存スルノミナラズ、
 殊ニ基底部、周邊部ニ於テハ著明ニ「エオジン嗜好細胞ノ混在ス
 ルヲ認メシメ一部ニ於テハ少シク集マリテ存スル部アリ。

生物ノ表面ハ細顆粒狀ヲナシ凹凸不平ニシテ不規則ニ數條ノ裂隙ヲ認メシ

ム、且面ニアタリ所々汚穢暗赤色又ハ黒灰色ヲナシテ血液狀浸潤ヲ現ハセ
 ル部アリ。標本ノ裏面ハ殆ンド全面ニ亘リテ脂肪層ニ覆ハレ、唯中部ニ於
 テハ面ニ腱樣組織ヲ曝露セリ。

剖面 新生組織ハ略基底ヲ上ニ向ケタル三角形ニ類シ、兩側ニ於テ正常
 並ニ癩痕樣皮膚ニ連リ、且基底ノ大部分ハ癩痕組織ニシテ、該接觸縁ハ何
 レモ著シク不正ニ強ク波濤狀ヲ呈セリ。精査スルニ、病竈部ハ樹枝狀或ハ
 網狀ニ錯綜スル間質ト其間ニ當レル實質部トヲ認メシメ、所謂蜂窠狀結構

ヲ現ハセリ。而シテ其間質ノ殊ニ太キ幹ハ癩痕或ハ正常皮膚ノ真皮組織又ハ皮下脂肪織ノ部ト相續ケリ。此際表皮組織ハ正常皮膚ノ側ニ於テハ新生組織ニ近ツクト共ニ其厚サヲ増シ、前記外面ヨリ見シ溝狀部ニソヒテ、少許ノ真皮結締織ト共ニ新生組織ノ端ヲ覆ヘリ。然レドモ癩痕樣側ニ於テハ新生組織ニ近キ部ニ於テ表皮組織ヲ認メ難キニ至ル。

顯微鏡的検査所見

實質細胞 角化性、非角化性細胞及其移行部ニ相當スル細胞アリ。非角化性細胞中余ノ所謂種子層深層ハ細胞ノ形態所ニヨリ可ナリニ不同ナリ、又細胞間橋ヲ有スルモノト然ラザルモノト存ス。種子層淺層ニ相當スルモノモ亦大サ不同ナリ、殊ニ「エオジン嗜好性強キモノ」少ナカラズ。一般ニ種子層細胞ハ、前記諸例ニ比シテ大ナル方ニシテ、殊ニ核小體亦大ニシ著シク明示セラル。中間層細胞ハ主トシテ有核角化細胞トシテ現ハレ、顆粒層細胞ニ相當スルモノハ甚ダ乏シ。角化細胞ハ菲薄トナリ長キモノ多シ。

組織的造構

之等ノ實質細胞相集リテ不規則ナル細胞團ヲ形成シ、可ナリニ大小アリ、或ハ巢狀ニ、或ハ索狀ニ、又ハ種々不正ナル形ニ相集レリ。之等細胞團ノ中部ハ角化層又ハ有核角化細胞ヨリ形成セラル。而シテ種子層細胞ハ一汎ニ角化著明ニシテ大ナル胞巢ヲナセルモノニハ少ナク、反之、角化少ナク小ナル胞巢ヲナセル部ニ多シ。此部ニ當リテハ種々ナル時期ノ正型分割像及不正型ノ分割像ヲ多數ニ認メシメ、殊ニ種子層深層ニ多シ、亦集簇性ニ現ハル、傾キアリ。一汎ニ角化傾向アル細胞及角化細胞ハ著シク豐富ニシテ、屢胞巢中部ニ蕊根狀體ヲ形成シ、或ハ斯ル中部組織ノ不規則ニ崩壞ヲ現ハセル部アリ、時ニ此部ニ細胞浸潤アルモノアリ。如斯退行性變或ハ角化性傾向ハ本組織ノ表層部及中層ニ多クシテ深層部ニ少シク少ナク、最深部ニ於テハ殊ニ少ナシ。而シテ上皮索ハ一汎ニ上下ノ方向或ハ之ニ近キ方向ヲ取ルモノ最モ多ク、深部ニ於テハ可ナリニ錯綜スル

モノアリ、浸潤性發育可ナリニ著明ニシテ所ニヨリ殊ニ胞巢ノ大ナルモノハ壓排性ニ増殖ヲ現ハセリ。

間質ハ纖維性結締織ヨリ成リ一般ニ豐富ナラズ。且表層ヨリ深部ニ至ルマテ彈力纖維ノ存在極メテ稀少ナリ、唯中部中層ニ當リテ中等大ノ動脈管認メラレ其管壁及附近ニ之ヲ認ム。其他之ニ近キ最深部ニ於テ認メラル、部アレドモ、其部ハ細胞浸潤ニヨリ著シク粗トナリ彈力纖維ハ斷裂シ、又一部ニハ密集紛糾ヲ示セリ。一般ニ間質ニハ圓形細胞浸潤著明ナル部多シ。如斯浸潤細胞ハ本組織ノ中層ニ於テハ主トシテ淋巴球ニシテ「プラスマ細胞」ヲ混ジ、之ニ嗜中性色素性多形核白血球及「エオジン嗜好細胞」ヲ混ズ。而シテ實質胞巢中ニ於ケル細胞ハ中性色素嗜好性多形核白血球最モ多クシテ、其中部殊ニ角化蕊根狀體ノ部、或ハ其周圍ニ當ル角化細胞部ニ集在スルコト最モ多ク、組織崩壞部ニ一致セリ。又斯ル多形核白血球浸潤部ニ當リ殆ンド全胞巢ノ崩壞ヲ現ハシ、周圍部ニハ増殖強カラザル一ニ列ノ種子層ヲ殘スニ止マリテ、爲メニ胞巢囊狀ノ觀ヲ呈スル部亦認メラル。尙表層部間質ニハ上記ノ如キ浸潤細胞中多形核白血球可ナリニ多クシテ、此部實質中ニ於ケル同細胞ノ浸潤亦少ナカラズ。又深部ニ於テハ淋巴球、「プラスマ細胞」ト多形核白血球ト混在ス。且最深部ニ於テハ新生組織ノ基底ニ真皮組織ヲ認メシムル部ニ當リ、新生組織胞巢ハ一般ニ少ナクシテ、基底組織ハ主トシテ正常ニ近キ方向ヲ取り、如斯部ニテハ浸潤細胞乏シクシテ、主トシテ「エオジン嗜好細胞」ヨリ成リ、此細胞ハ多クハ結締織間隙ニ當リテ散在性ニ存シ、屢ニ二三個相並ベル狀態ニ存スルモノ多シ。稀ニ斯ル部ノ異型上皮細胞間隙ニ現ハル、モノアリ。其核ハ多ク多核性ニシテ之等ニ混在シテ稍大ナル單核ヲ有シ橢圓形、長橢圓形、棍棒狀等ヲナスモノ可ナリニ存セリ。原形質ハ可ナリニ大小アリ、形態ハ第一例ニ記載セル所ニ略同シ。時ニ胞體內ノ一部ノ顆粒が崩壞ヲ現ハセルモノアリ。又一部ノ「エ

オジン嗜好細胞ハ核、胞體共ニ長クナリテ亞鈴狀ヲナシ其アルモノハ核ニ個ニ分レ、其間ニ甚ダ細長ナル「クロマチン糸狀物アリテ僅カニ連絡シ、胞體モ亦同様ニ二分シ、上記糸狀物ニソヒテ殆ンド認め難キ程度ニ數個ノ「エオジン嗜好顆粒ヲ認めシムルモノアリ。此ノ如キ像ヘノ移行ト見做スベキ種々ナル程度ノ同様或ハ類似ノ細胞認めラル。尙又長橢圓形ノ核ヲ有スル「エオジン嗜好細胞ニシテ、其赤道部ニ相當シテ明カニ分割線ヲ現ハセルモノアリ。之等ノ像ハ少數ナレドモ何レモ核ノ直接分割ト認めテ不可無キモノナリ。然レドモ間接分割像ト認めムベキ核ハ何レニモ之ヲ認ムルコトヲ得ズ。斯ル像ヲ示セル部ヨリ皮下脂肪織ニ至ル真皮組織ハ癩痕樣性狀ヲ示シ(後述)所々細胞浸潤著明ナリ、淋巴球、「プラスマ細胞多ク、其一部ニ「エオジン嗜好細胞混在セリ。

次ニ新生組織ノ周圍ニ於テ認めラル、癩痕樣組織ハ、前記新生組織基底ノ大部ヲナセル癩痕樣組織ト同一ナル造構ヲ示シ、即其真皮組織ハ全層ニ亘リテ方向稍錯雜セル強キ硝子樣結構纖維束ヨリ成リ、其纖維間ニハ稍多クノ造結構細胞認めラル、且之等纖維束ノ間ニ當リテ不規則ニ小血管、毛細管等ヲ介在シ、周圍ニハ少數ノ圓形細胞ノ認めラル、モノアリ。毛根、脂腺、汗腺等ノ皮膚附屬器ハ一モ認めラレズ。而シテコノ如キ組織ニ當リテハ殆ンド全ク彈力纖維ノ存スルヲ見ズ、唯癩痕組織ノ基底ニ存スル皮下脂肪織ニ於テハ略正常ノ狀態ニ同纖維ノ存スルヲ認めシム。

該癩痕組織ノ表層部ニ於テ新生組織ノ邊緣部ヲ成セル實質組織ハ、其胞巢一般ニ上下ノ方向又ハ之ニ近キ方向ヲ示スヲ當トシ、角化傾向稍乏シク、其表面ニ於テハ角化性組織ヲ曝露セリ。而シテ其深部ニ於テハ癩痕性結構織束ノ間隙ニ向ヒテ浸潤セリ、此際多少ノ圓形細胞浸潤ヲ示セル部アリ、又然ラズシテ其部ノ結構織ハ却ツテ多核性トナリ纖維性物質乏シキ部アリ。一般ニ斯ル異型上皮浸潤部ニ近キ部ノ小血管周圍ニハ細胞浸潤アリ

テ、他ノ癩痕組織ノ部ニ於ケルヨリモ著明ナリ。而シテ如斯性狀ヲ示セル結構織ヨリ異型上皮組織間質ノ部ニ續キ、該間質ハ鬆粗ナル結構織ヨリ成ル部モアレドモ(殊ニ表層ニ近ク)、多クハマタ硝子樣ニシテ彈力纖維ヲ伴ハズ。

如部邊緣部ノ新生組織ハ、其端ニ近ツクト共ニ益々表層ニ局在シ來リ、胞巢ハ短トナリ、遂ニ全ク如斯異型上皮組織ヲ缺如スルニ至ル。而シテ此部ト癩痕組織ノ表層ヨリ覆ハレタル部トノ間ニ、上述肉眼上認めラレタル狭キ裂隙部ニ一致シ鬆粗ナル幼若結構織及血管ト少數ノ浸潤性細胞トヨリ成レル肉芽性組織ヲ面ニ曝露シ上皮性組織ヲ見ズ。ヤガテ上記癩痕部ヲ覆ヘル表皮ノ部ニ至レバ、其端ハ棍棒狀ヲナシテ肉芽面ノ一部ヲ覆ヒ、一部ノ表皮組織ハ肉芽ノ面ヨリ少シク内部ニ、其先端ヲ突入シタル形ニ存セリ。角化物質及表皮ノ壞死物質ハ此部ノ表皮表面ヲ被ヒ、更ニ延ビテ肉芽組織ノ一部ヲ覆ヘリ。斯ル表皮組織ノ端ヨリ更ニ外方ニ至ルニ、表皮組織ハ可ナリニ厚キ角化層ト種子層トヨリ成リ、其乳頭間上皮索ハ著シク短カクシテ其端ハ腰彎曲シ、或ハ斜ノ方向ニ其先端ヲ真皮ノ癩痕樣組織ノ部ニ送レリ、其上皮細胞ノ増殖ハ餘リ強カラズ、皮膚附屬器ヲ認めシメズ、又真皮乳頭ハ殊ニ其表皮ニ接スル部ニ於テ鬆粗トナリ多形核白血球等多少ノ度ニ此部ニ認めラル。此ノ如キ部ノ乳頭下ニ當ル真皮中層ノ上部ニ於テ、及上述新生組織トノ間ニ存セル肉芽組織ノ部ニ當リ、殊ニ恰モ表皮ノ角化物質ガ肉芽ヲ覆ヘル範圍ニ亘リテ、共ニ其部ニ「クロマトフォレン」ヲ少數ニ認めシムルモ、表皮組織及新生組織細胞ニハ少シモ「メラニン」ヲ含有セルモノ無シ。

更ニ肉眼上略正常皮膚組織トシテ認めラレタル部ニ於テハ、新生組織ハ其端ニ於テ、該皮膚ヲ蓋ヘル形ニ於テ隆起シ、表皮組織ハ皮膚ト新生組織トノ間ニ認めラレタル溝狀部内面ヲ被ヒ、而シテ如斯部ニ於ケル表皮ハ一

況ニ種子層ノ肥厚著明ニシテ、乳頭間上皮索ハ短大トナリ、乳頭トナリ、一部ノ種子層基底細胞ニハ核分割像ヲ認メシムルモノアリ、其上皮細胞間隙ニ多形核白血球ノ遊走セルモノ少ナカラズ。此部ト新生組織細胞案トハ、細胞浸潤著明ナル真皮組織ニヨリ距テラル。而シテ新生組織表層ノ邊緣ヨリ表面ノ一部ヲ覆フニ至ルト共ニ、種子層ノ増殖漸ク弱クナリ、斯ル部ニ於テ存スル真皮乳頭ハ大ニシテ、此部ハ細血管ノ充盈ヲ示スチ見レドモ、細胞浸潤ハ却ツテ之ヲ見ルニト少ナクナリ、乳頭間表皮索ハ細長トナリテ表皮層ニ平行セントスル如キ位置ヲ取り、其先端ニ近キ部ニ於テ、此部ト新生組織ト接着ヲ示セルモノアリ、其境界ハ著シク明瞭ナラズ。如斯ニシテ新生組織表面ノ中部ニ近ヅクト共ニ角化物質多クナリ、新生組織ト表皮トノ境界ハ全ク認め難キニ至ル。「メラニン色素ハ前記溝狀部ノ底ニ至ル迄ハ、表皮、真皮共ニ之ヲ有スルモ、新生組織ノ周邊部ヲ被フ部ニ於テハ、表皮ハ之ヲ缺キ真皮中ニハ尙少數ニ色素ヲ有スル」(クロマトフォール)ヲ見ル、新生組織端ノ表面ヲ覆フニ至レバ既ニ之ヲ認メラレズ。而シテ「クロマトフォール」ノ有スル色素ハ稍粗大ニシテ、上皮細胞ノ有スル色素ハ之ニ比シ微細ナルハ、明カニ認メラル、所ナリ。而シテ新生組織ノ周邊ニ於テ真皮ニ接スル部ニ當リ、上述新生組織ト皮膚トノ間ニ挾マレタル溝ノ部ヨリ外方ニ於テハ、真皮ニ彈力纖維ヲ認メシメ、殊ニ新生組織ニ接スル部ニ於テハ、上層ヨリ深層ニ至ル迄可ナリ太ク、多少染色ニ濃淡アリ、且稍密ナリ。一般ニ正常皮膚ノ部ニ於テハ、皮膚附屬器、殊ニ汗腺組織ハ可ナリニ認メラル、モ毛根、脂腺ノ如キハ極メテ少ナク僅カニ一―二ノモノヲ散見スルノミ、新生組織周邊部間質及附近真皮組織ニハ殆ンド全ク之等ノモノヲ認メズ。

上來記載セルガ如ク、本例ハ皮膚(頭髮部ナラザル)ニ原發セル

原著 茶谷 再ビ頭髮部癰腫ニ就テ(頭髮部角化性癰腫ノ病理追加)

表皮癰腫ニシテ、半癰痕組織ニ坐シ所謂癰痕癰腫ト考ヘラル。組織學的検査ニヨルニ明カニ角化性扁平上皮癰腫ニシテ、其細胞ハ一般ニ可ナリニ大ニ角化傾向モ亦著明ナリ。壓排性並ニ浸潤性ニ増殖シ、深部ニ於テハ浸潤性増殖強シ。其種子層ニ於ケル核分裂ハ多數ニシテ正型、不正型ノ種々ナル像ヲ呈シ、同時ニ細胞ノ退行性變モ多少認メラル。胞巢ノ角化部ハ遊走細胞殊ニ多形核白血球浸潤ヲ現ハシ、所ニヨリ胞巢崩壞シ、囊狀ヲ呈シテ所謂部分的自然治癒現象ト見ルベキ變ヲ來セルモノアリ。其周邊部ニ於テ正常皮膚組織ニ隣接スル部ニ於テハ、皮膚表皮組織ハ所謂側性増殖ヲ現ハシ、一部ノ癰胞巢ハ所々ニ增生表皮索ト接着ヲ現ハセリ。而シテ如斯部ヨリ更ニ外方ニ於テ、所謂表皮下ノ増殖ヲ營メリ。間質ハ少許ノ纖維性結締織ヨリ成リ、表皮ノ一部ニハ鬆粗ナル部アリ、一般ニ圓形細胞浸潤ヲ現ハシ、周邊真皮組織ニモ及ベリ。殊ニ周邊部ニ於テハ之等ノ浸潤細胞ニ混在シテ、甚ダ多數ニ「エオジン嗜好細胞」ノ出現ヲ來シ、就中癰實質ノ基底ヲナセル癰痕部纖維間ニ著シク多數ニ見ラレ、屢其間隙ニ數個相連レルモノアリ。該細胞ハ多クハ多核性ナレドモ、單核ノモノ亦少カラズ。其二核性ノモノハ亞鉸狀トナリ、次第ニ核、胞體共分割シ所謂直接分割ヲ現ハセリ。癰痕組織ノ部ニ於テハ皮膚附屬器及彈力纖維ヲ認メズ、所々細胞浸潤ヲ示セリ。

四、所見總括並ニ卑見

上來實驗例ノ條下ニ於テ記載セル事項ヲ總括的ニ觀察スルニ、各例トモ瘰癧組織ニ由來セル癌腫ニシテ、殊ニ其三例ハ頭髮部ニ原發セルモノニ屬セリ。且何レモ角化性扁平上皮癌腫ノ定型の構造ヲ有スルモノニシテ、實質細胞團並ニ間質結締織ヨリ成リ、殊ニ前者ハ種子層細胞、角化細胞及中間層細胞ヨリ構成セラル、モノニシテ、一般ニ角化物質甚ダ多ク、至ル所所謂瘰癧真珠ヲ形成セリ。其種子層殊ニ深層ニ於テハ、種々ナル時期及正型、不正型ノ核分割像甚ダ多數ニ存シ、進行性ノ像顯著ナルモノアルト共ニ、又核空胞形成、其他角化部石灰沈着、壞死等ノ退行性變ヲ現ハセル部少ナカラズ。間質ハ局所ノ結締織ヨリ形成セラレ、所ニヨリ多ク、亦甚ダ少ナキ部アリ。其周圍組織ニ向ヒテ増殖スルニ當リテハ、一般ニ浸潤性並ニ壓排性ニ侵襲スルヲ認メシムルモ、殊ニ余ノ所謂乳嘴型ニ屬スト認ムベキモノ(第一例)ニ於テハ、壓排性増殖ヲ營ムコト強ク、所謂潰瘍型(第二、第三例)ニアリテハ、浸潤性ノ態度ヲ現ハスコト大ナル傾向ヲ示セリ。而シテ腱膜ノ如キ強キ結締組織ヲ侵襲スルニ當リテハ、屢癌索其方向ヲ變ジ組織纖維ノ方向ニ一致シ、浸潤性ニ細索ヲナシテ増殖スルモノ多シ。更ニ其深部ノ頭蓋骨ヲ侵襲スルノミナラズ、硬腦膜、軟腦膜、大脳實質ヲ侵スモノアリ(後項參照)。如斯癌腫組織ノ増殖ニヨリテ、其周圍ニ當レル組織ハ屢被働性變ヲ現ハシ、即癌腫組織ニ隣接セル既存表皮組織ハ、屢所謂側性増殖ヲ示セル部アルトトモニ、一部ニ於テ壓迫性ニ萎小消耗ヲ來シ、皮膚附屬器亦主トシテ萎小ニ陷ルモノアリ。又結締組織ハ反應性ニ増殖ヲ現ハス部ト、壓迫性ニ萎小ヲ來セル部トアリ。且新生組織周邊部及間質組織ニ著明ナル圓形細胞浸潤アリ、其癌腫増殖ニ對スル意義ハ所ニヨリ必ズシモ同一ナリト思惟スル能ハズ。又癌胞巢内中性色素嗜好性多形核白血球ノ集簇ハ各例ニ於テ認メラレ、多核巨態細胞モ出現セリ、殊ニ第一例ニ甚ダ多ク、其基底腱膜組織ノ部ニハ白血球ノ胞巢内ノ出現ニヨリ、胞巢ノ著シク崩壞セラレ、多核巨態細胞ノ出現及結締織ノ新生侵入アリテ之ヲ置換スルモノアリ、所謂部分的自然治癒現象ト見做スベキモノナリ。

上記ノ如キ所見ハ何レモ前報告⁽¹⁾所述ノ卑見ニ合致スルモノアリ、以テ頭髮部角化性癌腫ノ造構、増殖ノ態度等ニ就テ一定ノ見解ヲ確立スルニ與ル所少ナカラザルナリ。殊ニ參考例ハ他部ノ皮膚ニ原發セル定型的角化性癌腫ニシテ、其構造、腫瘍構成ニ於ケル變、周邊皮膚組織ヲ侵襲セル態度等ニ於テ頭髮部癌腫ノソレト殆ンド相同ジキ點少ナカザル事ヲ明示シ、唯局所皮膚組織成分ノ差異ニ關聯シテ、皮膚附屬器ノ癌組織ニ對スル態度等ヲ考察スルノ便宜ハ甚ダ乏シキモノアリシナリ。

尙上記ノ如キ頭髮部癌腫ニ關スル考察ノ外前報告ニ於テハ、癌組織ノ頭蓋内侵入、大脳ノ部分的脱出、組織發生ニ資スベキ所見等ヲ得、且原因、臨床上經過等ニ關シテモ聊カ系統的考究ヲ試ミタリ。之等ノ記載中頭髮部癌腫ノ頭蓋骨並ニ腦組織ニ對スル態度ニ就テハ再ビ少シク精細ナル檢索ヲ試ムベク、其他ノ點ニ就テハ此ニ反覆セザルベシ。唯被檢例中特ニ興味アリト信ズル點ニ就テハ、所見ヲ基礎トシテ以下少シク述ブル所アラントス。

頭髮部角化性癌腫ノ頭蓋骨並ニ頭蓋内組織ニ對スル態度

頭髮部ニ發生セル角化性癌腫ガ既ニ軟組織ヲ侵襲シテ、更ニ深部ニ蔓延スル時ハ、先ヅ頭蓋骨ヲ侵スベク、コレ實ニ頭蓋外ニ發生スル癌腫ノ頭蓋腔内増殖ヲ惹起スベキ階梯ヲナスモノニシテ、此部癌腫ノ増殖態度ニ關スル考察中甚ダ重要ナルモノナレドモ、斯ル檢索ハ極メテ少ナシ(前報告、周邊部組織ノ被働性變化中骨組織ノ條下參照)。而シテ骨質ヲ破壊シテ頭蓋腔ニ到達スレバ、先ヅ硬腦膜ヲ侵襲スベク、更ニ軟膜組織ノ癌腫症ヲ惹起シ、次デ腦實質ニ侵入スベシ。蓋シ神經組織ガ惡性腫瘍ノ發育増殖ニ對シテ、他ノ臟器組織ト異ナレル關係ヲ示スモノナルベキハ、近時動物腫瘍ノ腦内(或ハ末梢神經組織内)ニ移植セラレタル實驗的研究ノ明示スルトコロナリ。然レドモ人體例ノソレニ關スル特殊ナル研究ヲナセル學者甚ダ少クシテ、殊ニ其腦組織ニ對スル態度ニ就テハ、最近ニ至ル迄殆ンド記載ヲ見ザル觀アリ。一九二二年 Hassin 及 Singer⁽²⁾ハ六例ノ腦内轉移癌腫ト二例ノ腦膜癌腫症トヲ檢査シ、以テ腦組織内ニ増殖スル癌腫ノ侵襲部及其附近ニ於ケル組織の變化ヲ考究セリ。之ニ引續キテ一二ノ報告 Neubünger 及 Singer⁽³⁾、Hilpert

(11) 相次デ表ハレ、轉移性悪性腫瘍ニ因スル腦組織ノ所變漸ク闡明セラレントスル趣ヲ示セリ。然ルニ頭髪部ニ發生セル癌腫ノ腦内ニ侵入スル態度ニ就テ深ク考慮シテ爲サレタル記載ニ至リテハ殆ンド存セザルガ如シ。余ハ前報告ニ於テ頭蓋内ニ増殖セル一例ヲ検査シ、今回検査セル三例中又同様ノ像ヲ呈スルモノアリ、且其他ノ二例モ骨質ヲ侵シテ頭蓋内ニ侵入セル例ナルヲ以テ、之等數例ニ於ケル所見ニ基キテ頭髪部角化性癌腫ノ頭蓋骨並ニ頭蓋内組織ニ對スル態度ニ關シ總括的ニ記載セントス。

(一)、頭蓋骨

頭髪部角化性癌腫ガ深部ニ増殖スルニ當リ、頭蓋骨組織ガ之ヲ妨グルモノナリヤ否ヤハ最モ注意スベキ點ナリ。余ノ觀ル所ヲ以テスレバ頭蓋骨組織ハ癌腫ノ深部侵入ニ對シ著シク之ヲ妨グルモノニアラザル如ク、寧ロ却ツテ此部ニ於テ癌腫組織ノ増殖ノ比較的容易ナルモノアルヲ示スニ似タリ。即余ノ検査セル六例ノ頭髪部角化性癌腫中四例ハ既ニ骨組織ヲ破壊吸收シテ更ニ頭蓋腔ニ到達セルモノニシテ、即骨質侵襲セラルレバ、ヤガテ頭蓋腔ニ腫瘍性浸潤ヲ來スコト殆ンド免ガルベカラザルガ如シ。而シテ骨ガ癌腫ノ増生ニ好都合ノモノナルハ、前報告第三例及今回検査スル第二例ノ所見ニ徴スルモ明白ナルモノアリ、何トナレバ之等ノ癌腫例ニ於テ、殊ニ其増殖旺盛ナル側ニ於テハ、癌腫組織ハ該扁平骨ノ存在セル部位ニ一致シテ深ク掘鑿ヲ示シ、殊ニ前例ニ於テハ更ニ岩様骨ノ内部ニ向ヒテ不羈ナル増殖ヲ來セル如キ所見ノ存スルヲ以テナリ。之ヲ組織學的ニ觀ルモ、癌腫組織ガ骨組織ヲ侵襲スルニ當リ甚ダ旺盛ナル浸潤性増殖ヲ示スコト多ク、カ、ル部ニ於テ細胞大ニシテ細胞個々ノ間隙及胞間橋明カニ認メラレ、其増殖ガ甚ダ易易タルモノアルヲ推スニ難カラズ。而シテ癌組織ガ骨組織内ニ侵入スルニ先立ち、其侵入部ノ骨髓組織ハ先ヅ纖維性トナリ、脂肪織、諸種骨髓細胞多ク失ハレ、此部ニ向ヒテ實質組織ノ侵襲ヲ示セリ。此際板障部ニ向ヒテ増殖スル事最モ強ク、各骨梁間ノ部ヲ主トシテ血管周圍又ハ組織纖維ノ間隙ニ沿ヒテ深ク浸潤性ニ進ミ、場合ニヨリ稍壓排性ニ増殖シ(第一例)、其先進部ニ圓形細胞浸潤ヲ示シテ組織鬆粗トナリ此ニ癌索ノ侵入ヲ示セル部モ存セリ。而シテ如斯

癌索ハ又内方ヨリ内板、外板ノ緻密質ニ向ヒテ骨質ヲ侵シ、加之内、外板ノ癌組織ニ近キ部ハ、其部骨膜及附近ノ纖維性組織増生シ、此部ニ向ヒテ癌索侵入シ又骨質ヲ消耗セリ。骨質ハ一般ニ主トシテ蝕骨性多核巨態細胞ノ夥シキ出現ニヨリ骨縁ニ Howship 氏窩ヲ生ジテ吸收セララル、トトモニ、癌組織ノ間質ニヨリ淺キ大ナル陥凹ヲ示シテ吸收セララル、部亦甚ダ多ク、癌實質索ニヨリテ吸收セララル、コトハ甚ダ少ナキコトアリ(前報告第三例、本篇第一例)、又可ナリニ見ラル、コトアリ(第二例)、骨膜側ヨリスルモノハ主トシテ結締組織ニヨルモノ、如シ。如斯シテ骨質侵襲セラレバ、其一部ノモノハ破壊シ遊離シテ、癌組織ノ間質中ニ殘存スルモノ所々ニ見ラル、殊ニ第二例ノ縁下彎入ヲ示セル部ノ上方ニ當レル組織ニ多數ニ認メララル。

上述ノ如ク骨組織ハ癌腫ノ侵入ニアヒテ容易ニ消耗セラレ、該組織ノ崩壞ニ一致シテ、癌腫ガ周邊部ニ於テ強ク縁下彎入ヲ示シテ増殖ヲ營ムコト多キハ、甚ダ注意スベキ所見ニシテ、斯ル場合骨組織ガ癌腫ノ持續的増殖ニ對シ、甚ダ好適ナルモノナルヲ示スガ如シ。

而シテ如斯癌組織ノ侵襲ニ當レル骨組織ノ被働性變化ハ種々アルモ、被檢例ニ於テハ、骨組織ニ於ケル窩狀蠶蝕、甚ダ稀ニ穿孔管ノ形成(第二例)、及脫灰性變等ニシテ、又稀ニ少數ニ骨組織ノ増生(第一例)ヲ認メ、骨髓ニテハ唯該組織ノ纖維様變ヲ來セルニ過ギズ。

(二) 硬腦膜

癌腫ノ増殖ニ當リ、硬腦膜ガ強ク抵抗スルコトハ被檢二例ノ所見ガ明示スルトコロニシテ、即骨質ガ甚ダ廣汎ナル範圍ニ亘リテ失ハレ、癌腫組織ハ直チニ硬膜組織ニ迫レルニ拘ラズ、其部ニ於ケル癌腫性浸潤ハ甚ダ乏シク、殊ニ該組織ノ表層ニ見ラル、彈力纖維ガ其進行ヲ阻止スルモノ、如シ、即癌組織ハ彈力纖維ノ見ラレザル部ヲ通シテ硬膜組織内ニ入り、其癌索ハ斜或ハ鉛直ノ方向ヲ取ルモノモアレドモ、多クハ纖維ノ方向ニ一致セントスル傾ヲ示シ、細索狀或ハ小塊狀ヲナシテ、浸潤性ニ組織間隙及血管周圍ニ沿ヒテ進メル像多シ。如斯癌實質ハ多ク硬膜ノ表層及之ニ近

キ部ニ局在シ、唯一部ニ於テ其全層ヲ侵シテ軟膜ニ及ベリ。

上述ノ如キ癌腫組織ノ侵襲ニ面セル硬膜組織自個ハ、屢反應性ニ増殖ヲ示シ核ニ富メル纖維性組織トナレリ、又癌索附近或ハ血管周圍等ニ圓形細胞浸潤ヲ示シテ鬆粗トナレル部アリ、細血管ハ一般ニ充盈ヲ示セリ。其他癌索ノ著明ニ集在スル部ニ當リテハ、組織纖維ノ壓迫性萎小ヲ示セル部アリ。

(三)、軟腦膜

軟膜組織殊ニ其蜘蛛膜ハ多ク硬膜ト緊密ニ接着シ、就中癌組織ノ侵入シ來レル部及其附近ニ於テハ殆ンド彼此相分ツベカラズ。癌腫實質ハ蜘蛛膜組織ヲ容易ク侵襲シテ蜘蛛膜下腔ニ達シ、一般ニ細索ヲナシテ浸潤性不羈ナル増殖ヲ營ムト共ニ、又一部ニ於テハ多形核白血球ノ浸潤ヲ示セルモノアリ、殊ニ第二例ニ於テ肉眼上大豆大ノ竈トシテ認めラレタルモノハ、極メテ大ナル癌胞巢ガ上記ノ如キ變ヲ示セルモノニシテ、即該胞巢ハ囊狀ニ擴大シ、其内部ノ組織崩壞部ニ膿球集積セリ、且其一部ニ於テハ多核巨態細胞モ明カニ存シ貪食性ヲ現ハスモノアリテ、所謂部分的自然治癒現象トシ記サル、モノト相似タリ。而シテ胞巢ノ内部ガ、上記ノ變ニヨリテ殆ンド全ク破滅セラル、ニ係ラズ、其周邊部種子層ノ數列ノモノハ、尙周圍ニ向ヒテ明カニ浸潤性増殖ヲ營ミ、内部ニ於ケル上述ノ變ト相關セザルガ如キ態度ヲ示セリ。同時ニ其周圍ノ間質ハ多クノ細血管ヲ有シ局所ニ榮養的缺陷アリト考ヘラレズ。即斯ル所見ヲ他方ヨリ考フレバ、白血球ノ浸潤集簇ニヨリテ、癌組織ニ所謂部分的自治癒現象ヲ發顯スルニハ、其周圍ニ於ケル組織ノ抵抗力乃至結締織ノ新生、増殖或ハ榮養狀態ガ大ナル關係ヲ有スルモノナルベク、癌腫ノ進行阻止セラル、カ、或ハ榮養障礙ヲ來スガ如キ狀態ニ置カル、際ニ、初メテ白血球集積ガ、癌組織ノ局所的全滅ニ意義ヲ有スルモノ、如シ。

而シテ如斯癌腫實質ノ増殖ニ際シ、蜘蛛膜ニ存スル細血管ハ、一般ニ擴張充盈ヲ示シ、其周圍ノ部或ハ然ラザル部ニ於テモ細胞浸潤ヲ來セリ、又液狀物質ノ浸漬ヲ來セル部アリ。其他結締組織ノ新生少ナカラズ、一部ノ毛細血管モ新生セルモノト認めラル。尙此部ニ於テ多少興味アル所見ハ、癌腫間質部及新生組織ニ近キ軟膜組織ニ、甚ダ多數ニ

所謂脂肪顆粒細胞ヲ認メシムルコトニシテ、就中癌腫實質細胞ノ間隙ヲ遊走シ、角化部ニ當リテ存スルゴトキモノモ見ラル。而シテ軟膜ニ出現スル如斯細胞ガ主トシテ所謂組織球性細胞ナルコトハ考ヘ易ク、上記實質索内ニ於ケル盛ナル遊走性ハ該細胞ノ性質ヲ明カニ示セルモノナリ。如斯種々ナル軟膜組織ノ反應性變化ニヨリテ、癌組織ノ侵襲ニ隣接スル部ハ、一定ノ範圍ニ亘リ組織ノ肥厚ヲ示セリ。

(四)、大脳組織

上述ノ如ク軟膜組織ヲ侵セル癌組織ガ、大脳實質内ニ侵入スルニ當リテハ、先ヅ腦溝面ヲ被ヘル軟膜組織ノ血管周圍淋巴腔ヲ傳ヒテ、或ハ腦回轉ヲ被覆スル纖膜ヨリ腦質中ニ入レル小血管ノ周圍ニソヒテ、浸潤性ニ侵入スルコト最も多ク、此際此部ノ細血管ハ數ヲ増シ、且一般ニ擴張、充盈ヲ示シ、周圍ノ結締組織ハ常ニ増殖ヲ現ハセリ。如斯癌索ノ進入部ニ當リテ圓形細胞浸潤、殊ニ「プラスマ細胞浸潤ヲ現ハシテ組織鬆粗トナレル部アレドモ、又カ、ル變ヲ示サル部アリ、其癌索ハ主トシテ細索ヲナシ、一部ノモノハ角化ヲ示セドモ一般ニ増殖旺盛ナリ。上記ノ如キ浸潤性増殖ヲ來ストトモニ、又壓迫性ノ増殖ヲ示シ(第二例及前報告第三例腦脫出部)、即チ斯ル部ハ肉眼的ニ大脳皮質ノ著シク菲薄トナレル部ニ相當シ(第一例)、或ハ癌組織ト腦組織トノ境界ガ分明ヲ缺ケル部ニ相當セリ(前報告第三例)。

即軟膜組織ニ於テ、強ク不羈ナル増殖ヲ營メル癌實質ガ、纖維性結締組織ヲ伴ヒテ深部ニ向ツテ侵入シ、此際實質細胞ハ主トシテ小索ヲナシテ浸潤スレドモ、角化傾向ハ可ナリニ認メラル、屢癌眞珠ヲ形成セリ。其先進部ノ状態ヲ觀ルニ、多少ノ度ニ局所ニ結締組織増殖シ、此ニ癌索ノ侵襲ヲ示セル部最も多ク、一部ニ於テハ直接ニ腦組織内ニ亂入増殖スルモノアリ。而シテ斯ル新生組織侵入ニ向ヘル腦組織ハ、一定ノ範圍ニ亘リテ鬆粗トナリテ、癌腫組織ノ増殖ニ著シキ抵抗ヲ示セルモノニアラザルニ似タリ。且一般ニ殆ンド神經細胞ヲ認メシメズシテ、主トシテ「グリア細胞核及其纖維成分ノ多少ノ増生アルコトヲ認メシメ、神經纖維ノ染色ハ、一般ニ可ナラズ、且其部ノ細血管ハ一般ニ擴張充盈ヲ示シ、周圍ノ結締組織ニ肥厚増生ヲ來シ、加之細胞浸潤殊ニ「プラスマ細胞浸潤ヲ來セリ、細血管ノ一部ノモノハ

新生セルモノト認メラル。而シテ結締織成分ノ增殖ガ癌侵入ニ先驅スル場所ニ於テハ、之ニ續ケル腦組織ノ鬆粗ナル部ニ、圓形細胞殊ニ「プラスマ細胞浸潤ヲ來シ所謂境界層」(Eusim 及 Singer^(出)前)ノ觀ヲ呈セリ、且此部ニ於テハ少數ナレドモ「ノイロノファギー」ヲ認メシム。如斯變ヲ示セル部ヨリ更ニ深部ニ於テハ、少數ナレドモ神經細胞(大尖柱細胞)認メラレ、「グリア細胞亦著シク多キコトヲ見ズ、轉移性癌腫ノソレニ比較スレバ所謂中毒性腦炎ヲ現ハセル層ニ相當スベシ。然レドモ材料ノ都合上神經成分ノ特殊染色ニヨリ精細ナル檢索ヲ試ムベキ便宜ヲ失ヒシヲ以テ神經組織學的考察ニ缺クル點アリテ、種々ナル點ノ比較講究ニ堪ヘザルモノアルハ遺憾トスル所ナリ。

(五)、癌腫組織ニヨル矢狀竇ノ閉塞並ニ血栓形成

第二例ニ於テ、癌腫組織ノ潰瘍底ニ當レル矢狀竇ガ閉塞スルヲ認ム。鏡檢スルニ、該竇ヲ充實スルモノハ、主トシテ上皮性組織ト著シク僅少ナル間質組織トヨリ成ル。殊ニ其上皮性組織中、角化性細胞就中癌眞珠ヲ形成セル部ハ、大部分壊死ニ陥リ「エオジン嗜好性甚ダ弱ク、且所々石灰沈着ヲ示シ、又其増殖性ハ甚ダ弱クシテ、唯基底細胞層ノ部ニ當リ胞狀核ヲ有スル紡錘形細胞ノ一―二列ヲ認ムルニ過ギズ。而モ胞巢内ノ壊死部ニ、多形核白血球ノ浸潤スルコト著シク稀少ナルモノアリテ、一般腫瘍部ニ於ケル所見ト著シク其觀ヲ異ニセリ。思フニ胞巢壊死ヲ示セルモノアルモ、直チニ白血球ガ此部ニ遊走シ來ルベキ條件ヲ充スモノトハ考ヘラレズ、恐ラクハ胞巢周圍ノ狀態、殊ニ間質並ニ毛細血管ノ存在ニ至大ノ關係ヲ有スルモノアルヲ思ハシム。而シテ癌組織ガ矢狀竇内ニ一程度ノ發育ヲ示シナガラ、其増殖弱キハ、其周圍組織ニ於ケル癌索ト對比シ顯著ナル差異ヲ示セルモノニシテ、血管内ニ侵入セル腫瘍細胞ノ運命ヲ物語ルモノト考ヘラル。即癌組織ハ極メテ強キ増殖性ト、他組織内ヘノ侵入性、並ニ破壊性ヲ有スルガ故ニ、屢其増殖ニ際シ、血管壁ヲ侵シ其内部ニ増殖ヲナスコトアルハ屢見ラレタル所ニシテ、殊ニ厚壁ナル動脈管ヨリモ、薄壁ニシテ抵抗弱キ靜脈管ヲ強度ニ侵襲スルコト多シ(菊池⁽¹⁴⁾)。從ツテ頭髮部癌腫ノ如キガ、深部ニ蔓延シ硬腦膜ヲ侵スニ當リ矢狀竇内ニ増殖ヲ營ムコトハ考ヘ易キ所ナリ。然レドモ如斯侵襲ニ際シ、癌細胞ガ血管内腔ニ到達スルニ難

易アリ、從ツテ其進入ニ遲速ヲ生ジ、其速カナルニ際シテハ突然血行中ニ墜落、散亂シ、其進入ノ容易ナラザルニ際シ、反ツテ間質増殖ノ隨伴スルアリ(竹内⁽²⁸⁾)。如斯ニシテ血腔内ニ入レル癌組織ガ、母組織トノ間ニ組織的結合ノ存スル場合ニハ、多少トモ榮養供給ノ持續ヲ期待シ得ルガ故ニ、血行中ニ進入シ遊離シタル一般癌腫細胞ト、可ナリニ異ナレル運命ヲ齎サル、モノ、如シ。何トナレバ、癌腫細胞ガ血管内ニ於テ其生育ヲ持續スルハ、一般ニ甚ダ困難ナルモノニシテ、即其多數ノモノハ漸次退行シ廢滅ニ歸スルヲ常トシ、唯該細胞ガ血管内壁ト組織的結合ヲ營ミテ、榮養支持ヲ受クルコトヲ得タル場合ニ於テ、始メテ該局所ニ發育シ、以テ轉移形成ノ第一歩ヲナスモノナレバナリ。之ヲ本例ノ所見ニ徵スルニ、癌腫組織ハ著シク急速ニ矢狀竇ニ進入シタルモノニアラザルベク、即竇内癌組織ハ明カニ竇壁ト組織的結合ヲ營メルモノニシテ、而モ僅少ノ間質組織ヲ隨伴スルモノハ此部ニ於テ腫瘍組織ガ一程度ノ發育ヲナシ、遂ニ該竇ヲ閉塞セルニ與レルモノト考ヘラル。而シテ如斯ニシテ成育セル竇内癌組織ガ、強キ退行性變ト増殖性ノ減退トヲ示セルモノハ、一ハ本癌腫ノ本來ノ性質ト、榮養關係ノ不良ナルコトニ關聯スルモ、又他方血管内ニ於テ、扁平上皮細胞癌腫ノ生存並ニ増殖ガ容易ナラザル點アルコトヲ示スモノト謂フベシ。尙靜脈系統ニ於テ、如斯新生組織ノ侵入増殖アルヲ以テ、カ、ル部ヨリ分離セル腫瘍細胞ガ血行内ヲ循行スベキコト容易ニ考ヘラル、ニ係ラズ、更ニ血行性轉移ノ成立セザリシハ上述セル如キ一般の腫瘍細胞ノ運命ニ殆ジタルニヨルモノナルベシ。又癌性組織ニヨル竇ノ閉塞ガ存スルヲ以テ、著シキ血行ノ障礙ヲ生ジ、從ツテ其附近ニ於ケル軟膜組織ニ鬱血ヲ來スベク、軟膜部ノ靜脈管ニ於テ著シキ腔ノ擴張ト充盈トヲ示セルモノハ明カニ之ヲ證セリ。加之該閉塞部ノ前後ニ血栓形成ヲ認ムルハ、又局所ノ鬱血ニ關聯スルモノニシテ、即此血流ノ變調ハ、腔内ニ於ケル癌組織ノ存在、並ニ如斯破壊ヲ示セル腫瘍ト一定ノ關係ヲ以テ發生スベキ血液凝固性ノ増進ト相俟ツテ、生體ニ於ケル局所性血液凝固ヲ來セルコト殆ンド明白ナルモノアルナリ。而シテ硬膜ニ於ケル靜脈竇ノ血栓形成ハ主トシテ硬膜及附近ノ腦、耳等ニ於ケル炎症變ニ關聯シテ來ル事最モ多ク、上記ノ如キ癌腫性變ニ基クモノハ蓋シ稀ナリト思惟ス。

其他頭髮部角化性癌腫ガ頭蓋骨及頭蓋内組織ヲ侵襲スルニ當リ、上述種々ナル所變ヲ惹起スルコトアルノミナラズ、場合ニヨリ頭蓋骨缺損ヲ來セル部ヨリ腦壓昂進ニ伴ヒ大脳組織ノ部分的脱出ヲ來スコトアルヲ忘ルベカラズ(前報告第三例)。

頭髮部癌腫ノ遠隔的増殖

頭髮部角化性癌腫ノ遠隔地増殖(轉移)ニ就テモ曩ニ聊カ述ブル所アリ、前報告第三例ノ如キニ於テモ如斯像ノ認めラレザルコトヲ記載セリ。今回検査セル三例ニ於テモ亦其二例ハ全ク之ヲ缺キ、唯特異ナル條件ニヨリテ惹起セラレタリト思惟セラルベキ一例(後述)ニ於テ、頭部淋巴腺及鎖骨上窩淋巴腺ニ癌腫ノ轉移ヲ見タリ。殊ニ余ノ甚ダ興味ヲ感ズルハ、二剖檢例(前報告第三例、本篇第二例)ニ於テハ淋巴行性並ニ血行性轉移ノ共ニ見ラレザル點ニシテ、如斯頭髮部癌腫ガ、末期ニ惡液質ヲ起シ、局所ニ於テ著シク異所ノニ高度且不羈ナル増殖ヲ營ムニ係ラズ、更ニ遠隔地ニ増殖ヲ來サルモノ、如シ。就中第二例ノ如キハ臨床的ニ彈性硬ニ觸ル、左側頸部淋巴腺腫脹ヲ認め、淋巴腺轉移ヲ想像セラレタルニモ係ラズ、組織學的ニハ更ニ其痕跡ヲモ認め難ク、唯頭部ニ於ケル著シキ炎症性變ニ由來セル慢性淋巴腺炎ノ像ヲ示スニ止マリシナリ。前報告第三例モ亦同様ニ此間ノ消息ヲ示セルモノト考ヘラル。如斯事實ヨリ觀レバ Moller (7) ガ頭髮部癌腫ノ五例中三例ニ於テ、頸部淋巴腺轉移ヲ見タルコトノ記載ノ如キハ多キニ過ギタル感アリ。其他頭髮部癌腫ノ二—三ノ臨床的症例ノ記載(土肥⁽²⁾、篠本⁽²⁴⁾等)ニ徵スルモ眞ニ淋巴腺轉移アリシコトヲ述ベラレタルモノ無キガ如シ。以上ノ事實ヨリシテ、余ハ頭髮部角化性癌腫ハ著シキ轉移性ヲ有セズシテ、寧ロ主トシテ局所性ニ破壊性増殖ヲ營ミ、最末期トナルモ更ニ遠隔地ニ増殖ノ傾向ヲ強ムルガ如キ事無キヲ眞ニ近キモノアリトセントス。一般ニ局所ニ於ケル變化ガ強ク破壊性ナルモ、必ズシモ轉移ヲ來スモノニアラザレバ、腫瘍ノ惡性ノ程度ハ必ズシモ轉移ノ有無ヲ以テ律スベカラザルモノアリ。殊ニ頭髮部角化性癌腫ノ血行性轉移ニ至リテハ、淋巴行性ノソレヨリモ更ニ難キモノアルベク、矢狀竇内ニ於ケル癌組織ノ壞死セル所見ニヨリテモ半推測シウルモノアリ。而シテコレ實ニ

余ヲシテ頭髮部癰腫ガ頭蓋骨或ハ頭蓋内ニ原發セル腫瘍例ト、相似タル治療の效果ヲ來シ得ル可能性ヲ想起セシムル根據ノ一ナリトス。

如斯頭髮部角化性癰腫ガ轉移性ニ乏シキモノタルベキニ係ラズ、余ノ第一例ニ於テ上記ノ如ク淋巴腺轉移ヲ見タルハ、コレ亦實ニ興味アル事實ニシテ、此ニ一言ヲ費スノ要アリ。即病歴中ニモ明カナルガ如ク、本例ニ於テ淋巴腺轉移ヲ認メラレタルハ、再發セル腫瘍ノ再切除後、日ナラズシテ起レル事ニシテ、該手術の所置ト不可分ノ關係アルベキハ推察スルニ難カラザルナリ。實際原發腫瘍ノ切除後ニ轉移性腫瘍ヲ認ムルニ至ルコトアルハ、往々經驗セラル、所ナルガ如ク、殊ニ肉腫ノ如キニモ認メラレ(長與及兒玉⁽¹⁹⁾)、又實驗的ニ動物腫瘍ニ於テ腫瘍ヲ摘出スル時(蓼沼⁽²⁷⁾ニヨル)、就中轉移性稀有ナル鶏肉腫ニ於テ其原移植部ヲ切斷シタル後轉移ノ發生極メテ多キコト明白トナレリ(蓼沼)。之等ノ關係ト本例ニ於ケル轉移發生ノ狀態トヲ彼此比較考察スルニ、其間ニ事理一點相通ズルモノアリ。唯上記肉腫及鶏肉腫ノ場合ニ於テハ、其主要原發部位ガ全ク失ハレタル後、遠隔ナル部位ニ血行性轉移竈ノ發育ヲ來セルモノナルニ、本例ニ於テハ然ラズシテ、淋巴行ニヨリ近隣並ニ稍遠隔ナル部ノ淋巴腺ニ癰組織ノ發育ヲ見、殊ニ手術後局所ニ於テ再發スルトトモニ之等ノ竈ヲ發生セルモノナリ。一般ニ惡性腫瘍切除後ニ再發ヲ來ス時ハ、其生物學的性質惡性トナルハ知ラレタル所ナリ。故ニ本例ノ如キ場合ニ於ケル轉移ノ形成ハ、主トシテ腫瘍組織ニ於ケル如斯性質ノ變化ニ基キテ起レルモノトシテ不可ナカラシカ。

所謂側性増殖ノ知見補遺

癰腫組織ガ増殖ヲ現ハス際、其周圍ニ於ケル上皮組織ニ於テ増生ノ像ヲ認メシメ、所謂側性増殖ヲ來スモノナルコトハ屢經驗セラレタル所ニカ、リ、皮膚ニ於ケル扁平上皮癰腫ニ就テモ論議セラレタルコト一再ニ止マラズ。此點ニ就テハ余モ亦前報告中「周邊部組織ノ被働性變化」ナル條下ニ於テ、表皮組織ノ表ハセル變化ニ就テ論ジ、文獻ヲ參照シテ聊カ卑見ヲ述ベタル所ナリ。蓋シ扁平上皮癰腫ノ周邊部ニ隣接セル表皮組織ノ増殖ガ、種々ナル意義ヲ有スルモ

ノナルベキコトハ、余ノ信ジテ疑ハザル所ニシテ、場合ニヨリ之等ノ増殖部ガ、適當ナル要約ノモトニハ、又次第二腫瘍ヲ形成スベキ階梯タルヲ思ハシムルモノアルハ、前報告第三例、第一例等ノ所見ニ徴シ略推想スルニ難カラザリシ所ナリ(前報告參照)。余ハ如斯事實ヲ今回検査セル第三例ニ於テ明カニ實證スル事ヲ得タリト信ズ。即前記實驗例ノ記載ニ於テ詳述セルガ如ク、癌腫性潰瘍ノ周邊ニ認メラル、指頭大ノ結節ガ、其周圍ノ癩痕組織ノ側ニ於テ、該癩痕部表皮ト隣接セル部ニ於ケル組織の所見ハ極メテ興味深キモノアリ。此ニ其大要ヲ摘記センニ、該癩痕部ノ表皮ハ一般ニ肥厚ヲ示シ、之ガ癌組織ニ接近スルトモニ、其真皮ノ最上層ニ於ケル圓形細胞浸潤ヲ増シテ、組織鬆粗トナリ、同時ニ表皮ノ乳頭間上皮ハ其數ト大サ及長サヲ増シテ深部ニ増殖シ、其種子層ニハ核分割像ヲ認メシム。更ニ癌組織ニ近キ部ニ於テハ、表皮索ノ吻合ト其構成細胞ノ増生トヲ來シ、種子層細胞ノ核ニハ核小體明カニ、又核分割像多ク、カ、ルモノハ種子層淺層ニモ見ラル。如斯ニシテ異型ノ狀次第ニ増シ、基底細胞ガ、明カナル變型ヲ示セル實質索ノ部ニ相移行スル如キ狀ヲ現ハセリ。思フニ如斯像ハ癌組織ガ其周邊ニ接觸セル表皮組織ヲ持續的ニ腫瘍化セシメツ、アルガ如キ觀ヲ呈セルモノニシテ、嘗テ唱ヘラレタル所謂癌腫ノ同似性傳染ノ可能ヲ示説スルモノ、如シ。然レドモ癌腫組織ニ隣接セル上皮性組織ガ卒然トシテ癌腫ニ變化シ、如斯添加ニヨリテ癌腫ノ増殖ヲ來ストナスガ如キ、或ハ癌組織ガ常ニ癌腫變性ヲナス如ク準備セシメラレ居ルガ如ク考フルハ(Hansen⁵⁾)、今日吾人ハ容易ニ首肯スル能ハザル所ニシテ、亦多數學者ノ取ラザル所ナリ。余ノ考フル所ニヨレバ、上述ノ如キ像ハ、單ニ所謂反應性増殖乃至代償再生の増生トモ見做スコト能ハズ、又癌索ト周邊表皮組織トガ接着ヲ示セル像ニモアらず、唯一種特別ナル場合ニ於テ如斯所見ヲ呈スルモノ、如シ。即如斯像ハ癌組織周邊部表皮ノ側性増殖ヲ現ハセル部ヨリ、發生シタル異型的異所の増生組織ニシテ、斯ル部ヨリ發生セルガタメ、偶々主腫瘍邊緣部ト相移行シタルガ如キ狀態ヲ呈シタルモノナルベシ。然ラバ何ガ故ニ本例ニ於テ如斯所變部ヲ發生シタルカ、之ニ就テハ、嘗テ藤浪氏⁶⁾モ想像シタルガ如ク、「寧ロ癌腫トナリ得ベキ素因ヲ有スル組織ガ其力ヲ展開セシ」モノナルベク、余ハ本例ノ如キ癩痕組織ヨリ原發セル癌腫

ニ於テハ、初發部以外ニモ如斯變性ヲナシ得ベキ素地ヲ存セシニ基クモノト考ヘントス。蓋シ癩痕組織ヲ被覆スル上皮ハ、生理的表皮ト多少異ナレル状態ニ置カレ、且眞皮組織ニモ變ヲ認メシムルモノアルガ故ニ(後項參照)、初發部ニ作用シタルト相似タル條件ガ、或部ニ作用スル場合ニハ又ヨク腫瘍性增生ヲナシ得ベク、殊ニ側性増殖ヲナセル部ニ於テハ如斯事態ヲ發生シ易キモノアラシカ。コレ癩痕部表皮ガ既ニ有セル増殖性(後項參照)ヲ、癌組織ノ接近シ來ルコトニヨリテ、更ニ反應性ニ鼓舞セシメラレタル状態ニ存スト思考シ得ルヲ以テナリ。且如斯増殖ニ向ツテ、眞皮上層ノ圓形細胞浸潤ハ一種ノ意義ヲ有スベク、即之ニヨリテ組織ヲ鬆粗ニシ、局所性抵抗減弱ヲ來セル癩痕組織ヲシテ(後項參照)、更ニ其上皮組織ノ發育ニ對スル抵抗性ノ脱落ヲ幫助シ、以テ増殖ニ傾ケル此部上皮組織ノ深部侵入ヲ容易ナラシムルモノアラン。然レドモ單ニ如斯所見ノミヲ以テ癌腫組織發生ニ對シテ結締組織原發説(Ribbert⁽²⁵⁾、林⁽⁹⁾等)ヲ全然肯定セントスルモノニハ非ズ。

扁平上皮癌腫ニ於ケル遊走細胞殊ニ「エオジン嗜好細胞浸潤並ニ其意義

癌腫組織ニ於テ種々ナル遊走細胞ノ浸潤ヲ來スコトハ殆ク知ラレタルトコロニシテ、殊ニ被檢頭髮部癌腫ノ如キ角化性癌腫ニ於テハ、一般ニ甚ダシク著明ナルモノアリ。該遊走細胞ハ所謂圓形細胞浸潤ノ形ヲ以テ來ルコト最モ多ク、淋巴球、「プラスマ細胞ヲ主トシ、之ニ「ヒスチオチーレン」ト認ムベキ細胞ヲ混ズルコトアリ、又「マスト細胞ヲ認ムル部アリ(殊ニ周邊部及隣接眞皮組織ニ)。其他又所ニヨリ多形核白血球浸潤ヲ現ハセル部アリ。而シテ間質結締織、周邊部組織等ニ見ラル、コト最モ多シ、加之癌胞巢自個ノ間隙ヲ遊走シ屢其角化性部ニ集積スルコトアリ。之等圓形細胞及中性色素嗜好性多形核白血球ノ癌腫内又ハ其他ノ部ニ於ケル出現ノ意義ニ就テハ、前報告ニ於テ聊カ講究ヲ重ネタル所ニシテ、即所謂圓形細胞浸潤ナルモノハ、癌組織ノ増殖ニ對スル組織ノ反應トシテ理解スルコト妥當ナルコト多ク、就中白血球ノ癌胞巢内集簇ハ遂ニ實質組織ノ崩壞ヲ來サシムルコトアリ、適當ナル要約ノモトニハ所謂部分的自然治癒現象ヲ發來シ得ベシ。而シテ今回検査セル諸例ニ於テモ、之等遊走細胞ノ浸潤著明ニシテ、又屢前記ノ役

目ヲ演ジツ、アルハ所見ニ徴シテ明カナルモノアリ。故ニ如斯細胞ニ關スル考察ハ暫ク措キ、此ニハ主トシテ「エオジン嗜好細胞」ニ就テ少シク述ベントス。

(イ) 出現ノ部位

扁平上皮癩腫ノ檢索ニ當リ、特ニ「エオジン嗜好細胞浸潤」ニ注意シタルモノニ「二」ニ止マラス。而シテ如斯浸潤ヲ現ハセル症例ノ大多數ハ、腫瘍性組織ト之ニヨリテ侵襲セラル、周圍組織トノ間ノ部ニ相當シテ、特ニ反應性炎症ヲ惹起シ居レル層ニ當リテ、其部ニ浸潤スル細胞ニ混ジテ多數ニ存スルヲ常トス(Fischer⁹⁾)。余ノ例ニ於テモ同様ナル細胞ノ出現ヲ認メシメ、殊ニ第一、第三例及參考例ニ於テ著明ニ存シ、第二例ニ於テハ甚ダ少ナシ。如斯第二例ガ他ノ數例ト異ナレル所見ヲ來スニ至レル所以ニ就テハ甚ダ考慮ヲ要スル所ナリト雖モ、若シ Nagel⁽¹⁸⁾所說ノ如ク、癩腫ニ於ケル「エオジン嗜好細胞」ガ其早期ニ出現シ、末期ニハ血液所見ニ一致シ減少スルモノナルニ於テハ、前記余ノ例ニ於ケル所見ノ相違ヲ説明スルニ甚ダ都合ノモノナリト思惟ス。即臨床上所見ノ示スガ如ク、第二例ハ頭髮部癩腫ニ基ク惡液質ニヨリテ斃レタルモノ、其他ハ癩腫ノ進行未ダ最高度トナラザル以前ニ、外科的ニ切除セラレタルモノナルガ故ニ、第二例ガ最モ末期ノ像タルニ比シ、他ノ數例ハ之ニ比シ明カニ早期ノモノダレバナリ、且斯ル所見ハ前報告所述ノ三例中第三例(剖檢例)ト第一、第二例(外科的切除例)トノ間ノ「エオジン嗜好細胞」ノ數量的關係ヨリ觀ルモ略首肯シ得ル所ナリトス。蓋シ腫瘍發育ノ一定時期即其早期ニ出現シ、其進行ト共ニ消失ス(Feldbansch³⁾、今⁽¹⁵⁾トナスモノ、恐ラク正鵠ヲ得タルニ近カルベシ。而シテ一般間質部ノ浸潤細胞ニ混ジテ出現スルモノモアレドモ、最モ多數ニ見ラル、ハ新生組織周邊部殊ニ其基底ニ近キ結締組織維間ニシテ、如斯部ニ近キ實質細胞間ヲ遊走スルモノアリ。然レドモ角化強キ部或ハ癩腫ノ崩壞ヲ現ハセル部等ニハ、一般ニ之ヲ認メズシテ、屢中性色素嗜好性多形核白血球浸潤ヲ示セドモ、唯第一例ノ周邊部ニ於テ、實質胞巢ノ角化崩壞部ニ一致シテ、殆ンド純粹ノ狀態ニ本細胞ノ集簇セルヲ認メシム。如斯竈狀ニ「エオジン嗜好細胞」ノ集積ヲ來スコトハ甚ダ稀有ナル所ニシテ、Fischer^(前)ノ檢査セル種々ナ

ル癌腫ノ五二例中(内二八例ハ扁平上皮癌腫)唯一例ヲ、和田氏⁽³⁰⁾マタ二四例中唯一例ニ如斯所見ヲ見タルコトアルヲ記載セリ。余モ亦癌腫ニ於テ如斯像ヲ現ハセル「エオジン嗜好細胞」ノ存在ハ未ダ知ラザル所ニシテ、斯ル所見ヲ以テ例外ナル像ナリ(Fischer)ト做スハ甚ダ妥當ナルベク、唯實驗的ニ「エオジン嗜好細胞」ノミニヨル浸潤竈ヲ形成セシメ乃至之ニヨル化膿ヲ惹起セシメントシテ失敗シ、コレ畢竟「エオジン嗜好細胞」ナルモノハ個々孤在スル性質ヲ有スルニ基クモノト考ヘラレタル所(本間⁽¹²⁾)ニ對比シ興味ヲ覺ユルモノアリ。

(ロ)、組織内出現機轉並ニ其意義

上記ノ如ク「エオジン嗜好細胞」ガ、癌腫組織周邊部ニ多數ニ出現シ來ル所以ノモノハ、該細胞ガ其局所ニ於テ生産セラル、ヤ否ヤノ問題ニ關聯シ、同様ナル局所「エオジン嗜好細胞集簇」ヲ伴フ疾病(血液病、急性、慢性傳染病、寄生蟲病等)ト共ニ、古來種々ナル論争ヲ産ミ而モ現今尙解決ヲ見ザル所ナリ。此點ニ關スル先進ノ考察ハ實ニ多岐ニ亘リ、此ニ一々枚舉スルニ遑無キ所ナレドモ、大體ニ於テ之ヲ三ツニ大別シ得ベク、即或ハ如斯「エオジン嗜好細胞」ガ局所ニアルト血液中ニアルトヲ問ハズ、悉ク骨髓ニ於テ生産セラル、モノニシテ、骨髓以外ノ體組織ニアリテハ生産増殖セラル、コト無シトナスアリ、或ハ骨髓以外ノ組織内ニ於テモ生産増殖スルノ事實アルヲ主張スルアリ、又ハ以上兩様ノ成生共可能ナリトナスモノアリ。蓋シ全身「エオジン嗜好細胞」增多症ノ存スル際、局所ニ同細胞ノ多數出現スルコトハ、一般病理ニ於テ多クノ類似現象ヲ有スル所ニシテ、最モ可能性大ナルコトハ言フニ難カラズ。然レドモ如斯血液ニ於ケル所見ヲ全然缺クニ係ラズ、局所ニ「エオジン嗜好細胞集簇」ノ認めラル場合ニ於テハ、其解說甚ダ難キモノアリ。サレバ特殊ナル局所ニ於テハ場合ニヨリ「エオジン嗜好細胞」ノ產生ヲ來シ得ベシト考フルハ、必ズシモ正鵠ヲ失ヘルモノニハアラザルベク、^(前出) Nageli^(前出)ノ如キ骨髓性產生ヲ主張スル學者モ、亦高度ノ病的條件ノ下ニ於テハ、極メテ稀ニハ局所性產生アルヲ認ムルガ如シ。之ヲ余ノ諸例ニ於ケル場合ニ觀ルニ、何レモ血液検査ヲ缺ケルヲ以テ、如斯考察ヲ試ムルニ當リ甚ダ注意ヲ要スルモノアレドモ、癌組織局所ニ於ケル所見ニ徴シ、局所性增生ノ必ズシモ否定スベ

カラザルモノアルヲ示セリ。即前記顯微鏡的所見ノ條下ニ精細ニ記載セルガ如ク、第一例ニ於テハ該細胞ト血管トノ間ニ親密ナル關係存スルガ如キ點アレドモ、第三、第四例ニ於テハ必ズシモ然ラズシテ、間質或ハ真皮組織並ニ腱膜部ノ圓形細胞浸潤ニ混在シテ認メラレ、殊ニ基底部結締組織間隙ニ多數ニ見ラレ、場合ニヨリ數個相並ベル如キモノアリ。カ、ル像ハ寧ろ局所性產生ヲ否定スル Fisher³⁾ヨリモ、之ヲ肯定スル Wein³²⁾等ノ所見ト相似タルモノアリ。而シテ「エオジン嗜好性多形核白血球ニ混在シテ、可ナリ多數ニ單核性」エオジン嗜好細胞ヲ認メシメ、殊ニ其核大ニシテ類圓形、橢圓形等ヲナセルモノハ、第二例ノ骨髓組織ニ認メラル、「エオジン嗜好骨髓細胞ト略相似タル大サヲ有スルモノアリ。其長橢圓形ヲナセル核ニ於テハ、赤道部ニ分割線條ヲ明示スルモノアリ、又或モノハ瓢形ニ赤道部ニ絞窄ヲ生ジ、更ニ二核ガ細長キ」クロマチン線條ニヨリ、著シク相距タレル形ヲ示シテ相續キ、且之ニ一致シテ胞體中部ニ於テ、殆ンド全ク二分セルモノアリ、或ハ二核ヲ有スル同様細胞アリ、單核「エオジン嗜好細胞ノ小ナルモノハ、其大サ、造構ニ於テ二核性細胞ノ一核ト相似タル狀ニ存スルモノアリ。之等ノ核ト、多形核「エオジン嗜好細胞」ノソレトハ、核ノ大サ、「クロマチン」ノ狀態等ニ於テ相類スルモノアルモ、必ズシモ然ラザルアリ。余ハ上記ノ如キ所見ニヨリテ、少クトモ一部ノ「エオジン嗜好細胞」ハ、癌腫組織内或ハ其附近ニ於テ、如斯直接分割ノ方法ニヨリテ増生ヲ來スモノナルコトヲ認メントス。然レドモ如斯増生ノ像ト共ニ、一方ニハ少數乍ラ「エオジン嗜好細胞」ニ於テ、全然又ハ一部核融解ヲ示セルモノ、核膜濃染ヲ來セルモノ等存スルヲ以テ、前記種々ナル像ヲ更ニ他方ヨリ觀察スレバ、「小淋巴球型」エオジン嗜好細胞ハ、多形核「エオジン嗜好細胞」ノ直接分裂ニヨリ生ジタルモノニシテ、核分裂產物ハ恐ラクハ退行性變ニ陥レルモノナラン」(Schwartz²⁵⁾)トノ所説、亦全然否定スベカラザルモノアリ。何トナレバ上記所見中最モ著シキ標識ノ一タル單核「エオジン嗜好細胞、殊ニ其大ナルモノ、出現スルコトモ、若シ多形核白血球ガ血管外ニ出ヅルニ當リテ圓形核ヲ示スモノナルニ於テハ」(Pappenheim³¹⁾)、爾ク説明スルニ難カラザルモノアレバナリ。從ツテ癌腫ヲ有スル個體ニ於テ「エオジン嗜好細胞增多症」ガ存在セズ(Well^{前)}、^出 Pizovozki³²⁾、又其循環血中ニ骨髓細胞ヲ認メズ

トスルモ、局所癌腫組織ノ部ニ、「エオジン嗜好骨髓細胞様細胞」ノ出現ヲ期待シ得ベシ。且余ノ諸例ニ於テハ、局所ニ於テ何等骨髓組織様ノ造構ヲ形成シ居レルニアラザルヲ以テ、*Negele*^(前)等ノ唱フル如キ特殊ナル局所性產生ニ一致スル所無ク、又淋巴球ガ赤血球或ハ其破片ヲ攝取スルガ如キ所見、乃至之ヨリ「エオジン嗜好細胞」ニ移行スルガ如キ像、或ハ出血性變ト「エオジン嗜好細胞」トノ間ニ何等カノ關聯存スルガ如キ點等ヲ見ザルヲ以テ、*Waldenreich*⁽³¹⁾ノ所說亦俄カニ與シ難キモノアリ。即余ガ此ニ檢索シ得タル限リニ於テ、癌腫組織ノ局所ニ於テ「エオジン嗜好細胞」ノ多少ノ產生ハ之ヲ認ムルニ難カラザレドモ、之ヲ以テ直チニ局所「エオジン嗜好細胞」集積ノ全部ヲ説明シ得ベキヤハ甚ダ疑問ノ餘地ヲ存スルモノナリ。而モ被檢例中惡液質ヲ以テ斃レタル二例ニ於テ何レモ局所「エオジン嗜好細胞」集積ヲ認メ難キ所以ノモノハ、前記ノ如ク*Negele*所說ニ一致スルモノアリ、癌組織局所ニ於ケル「エオジン嗜好細胞」集積ガ、全身「エオジン嗜好細胞」增多症ノソレニ、影響ヲ蒙ルコト如何ニ大ナルモノアルカヲ推想スルニ難カラズ。蓋シ余ノ症例ハ檢査材料ノ都合上、カ、ル問題ノ考究ニ向ツテ必要ナル檢索ヲ試ムルニ由無キ點存シ、從ツテ此間ノ消息ヲ闡明ナラシムルニ難キモノアレドモ、上記ノ如ク種々ナル點ヲ綜合シテ、主トシテ「エオジン嗜好細胞」ノ骨髓性產生ヲ認ムルヲ穩當ナリト思考ス。

然ラバ何ガ故ニ癌腫組織ヲ有スル局所ニ於テ如斯多數ニ「エオジン嗜好細胞」ノ浸出ヲ來スモノナリヤ。之ニ就テハ、癌腫細胞ニ於ケル實質細胞ノ壞死及破壞ガ關係スト做スモノアレドモ(*Ehrlich*³、*Fischer*^(前))、又必ズシモ然ラズトナスモノアリ(*Walt*^(前))。余ノ諸例ニ就テ考察スルニ、何レモ角化性癌腫ニシテ、角化及壞死ノ如キ變化ハ著明ニ認めラル、所ナルヲ以テ、前說必ズシモ否定スベカラザルニ似タリ。而モ第一例ノ周邊部ニ於テハ、實質組織ノ中部崩壞シ胞巢囊狀ヲナセル部ニ、略純粹ノ状態ニ「エオジン嗜好細胞」集簇シテ存スルコトヲ認メタルハ、實質細胞ノ破壞ガ「エオジン嗜好細胞」ノ局所性發現ニ關係ヲ有スルコトヲ肯定セザル以上、殆ンド理解シ能ハザル所ナリ。余ハ如斯癌腫ノ崩壞ヲ現ハセル局所ニ集簇スル「エオジン嗜好細胞」ト、其周邊部ノ反應性炎ノ部ニ於ケルソレトニ對シ、多少異ナレ

ル意義ヲ有スルモノナラント思考ス。蓋シ癌腫組織ニ於ケル遊走細胞ノ集簇ガ、如何ナル状態ニ於テ發現スルトスルモ、畢竟癌組織ニ對スル生體ノ炎症反應性變ナル事實ニ至ツテハ、殆ンド疑問ノ餘地ヲ存セズ。而シテ一般ニ何故ニ炎症性細胞ノ出現ヲ見ルカハ炎症論ニ於ケル一ノ問題タルヲ失ハザレドモ、之ヲ該局所ニ於ケル陽性「ヘモタキシス性物質」ノ存在ニ歸スルコト最モ穩當ナルガ如シ。之ヲ癌腫組織ノ場合ニ於テ考慮スルニ、該組織ハ其部位の關係、組織的造構、化學的構成等ニ於テ母組織ト異ナレルモノアリ、該組織内ニ於ケル物質代謝ニモ差異存スベキハ考ヘ易キ所ナリ。從ツテ該組織乃至之ヨリ產生セラル、異常代謝產物ガ、生體ニ交感性ニ作用シ、以テ局所組織ニ炎症性細胞ノ遊走ヲ來スモノト考ヘ得ベシ。而シテ此際中性色素嗜好性多形核白血球ガ屢癌腫組織内ニ侵入シ、就中該胞集ヲ攻撃的、破壞的ニ侵襲スルニ反シ、「エオジン嗜好細胞」ハ、主トシテ癌組織間質、就中其周邊部ノ眞皮及腱膜組織ニ出現シ、恰モ寄生蟲體或ハ異種動物組織等ノ組織内接種ニ當リテ出現スル状態(本間前出)ト似同ノ關係ヲ示セルモノアリ。如斯關係ヨリ考察スルニ癌腫組織ニ出現スル「エオジン嗜好細胞」ハ、主トシテ癌組織ニ由來スル有害ナル物質ヲ中和スル如キ作用ヲ有シ、乃至其部ニ増殖侵入シ來レル腫瘍組織ニ對シ一種ノ防禦的隔壁(Schutzwall)(Feldbansch前出)ヲ營爲スルモノト解シテ大過ナカラシカ。然レドモ亦癌組織内ニ集簇シ、中性色素嗜好性多形核白血球ガ屢現ハセルガ如キ状態ト似同ノ觀ヲ呈スルモノアルハ、該「エオジン嗜好細胞」ガ或ル特殊ナル條件ノ下ニ於テハ、癌組織ノ崩壞乃至所謂部分的自然治癒現象ノ發現ト一定ノ關係ヲ有シ、該細胞ノ出現ガ、必ズシモ消極的ニ中和的、防禦的意義ノミヲ有ストナスベカラザルモノアルニ似タリ。而モ如特殊ナル事態ガ發現スベキ條件ハ之ヲ此ニ闡明ナラシムルニ甚ダ難キモノアレドモ、少クトモ該局所ハ癌腫組織ノ最周邊部ニシテ、所謂「エオジン嗜好細胞」ノ防禦的隔壁ヲ營爲セル部ニ當リ、該部ニ侵入シ來レル癌索ニ於テ招來セラレタルモノナル事ハ組織像ノ明カニ示ス所ナリ。又此際單核「エオジン嗜好細胞」ノ夥多ナルコトモ注意ニ値スルモノアラシカ。唯余ハ扁平上皮癌組織増殖ノ周邊ニ於テ、「エオジン嗜好細胞」ガ所謂防禦的隔壁ヲ作爲スル如キ場合ニハ、該部ニ侵入シ來レル癌索ニ於テ、所謂部分的自然治癒現象ト認ムベキ變

ヲ惹起シ、此際「エオジン嗜好細胞ガ中性色素嗜好性多形核白血球ト相似ノ状態ニ於テ癌索ヲ侵襲シ、積極的態度ヲ取ル場合アルコトヲ、看過スベカラザル所見トシテ此ニ記載シ置カントス。

癩痕組織ト癌發生トノ關係

外傷其他種々ナル病變ニヨリテ惹起セラレタル癩痕組織ガ、癌腫ノ發生ニ對シ所謂癌前驅性變トシテ、特殊ナル意義ヲ有スルハ既ニ古クヨリ考ヘラレタルトコロニシテ、余モ亦前報告ニ於テ聊カ此點ニ就テ記載ヲ試ミタリ。今回検査セル諸例ハ何レモ明カニ癩痕組織ヲ母地トシテ發生シタルモノニシテ、殊ニ第三例及參考例ハ其邊緣部ニ尙癩痕組織ヲ認メシメ、癩痕癌ノ發生ニ關シテ興味アル所見ヲ認メタルヲ以テ、既記セル所ニ少シク補遺セント欲ス。

由來癩痕組織ガ癌發生ノ母地トシテ屢經驗セラレタル所以ノモノハ、畢竟該組織ノ有スル性状ト、之ニ關聯スル條件トガ相俟ツテ、其部上皮組織ガ正常表皮ニ於ケルヨリモ一層異型的増殖ニ傾ク性質ヲ享有スルニヨルモノト思考シ得ベシ。即周知ノ如ク、癩痕組織ハ正常ノ皮膚組織ト異ナリテ不規則ノ造構ヲ有シ、組織纖維並ニ循環裝置ノ分布整然タラズ、且屢皮膚附屬器ヲ失ヘルコトアルヲ以テ、其部ノ官能ニ缺陷アルハ數ノ免ガル能ハザル所ナリ。殊ニ所謂癌前驅性變ヲナセル癩痕組織ハ、二三ノ記載(杉原⁽²⁰⁾、片山⁽¹³⁾、唐、伊藤⁽²⁰⁾)ニ徵スルモ明カナルガ如ク、(一)一般ニ可ナリニ大ナルモノニシテ、屢癩痕結成ニ至ル迄長期ヲ要スルコトヲ認メラレ、(二)最後ニ癩痕ヲ結成セリト思惟セラルベキ該部ノ中央部ヨリ、數年乃至數十年ヲ經テ發生スルコト多ク、(三)其癌發生ニ先立チ、持續的ニ炎症變ヲ存シ、又ハ再ビ外傷其他ノ疾病ニ因スル被害状態ヲ經タル後、局所ノ上皮性組織ノ茂生ヲ招來スルモノ、如シ。余ノ檢索セル頭髮部癌腫ノ數例ニ於テモ、概シテ如斯状態ニ存シタルコトハ病歷中ノ記載ニヨルモ略推察スルニ難カラザルモノアリ。サレバ上記ノ如キ局所ニ於テハ、先ヅ癩痕結成ニ至ルマデ、常ニ榮養液輸入過多ノ状態ヲ存シ、眞皮肉芽組織及表皮ノ再生組織ハ充分其官能ヲ營爲シ得ラルベキ所ナルニ係ラズ、局所ノ關係殊ニ外來ノ條件等ニヨリテ、就中該肉芽組織ノ中部ガ其治癒ヲ障礙セラレ、從ツテ所謂難治ナル癩痕組織ヲ構成スルニ至ルベシ。而シテ恐ラクハ此際此部表皮

組織ノ一部ノモノハ、其境遇ニ慣習シ、上皮組織ノ先天性ニ有スル發育力ヲ後天性ニ鼓舞セラレ、且癩痕結成後ト雖モ外界ヨリノ刺戟ヲ受ケ易ク、從ツテ其反應性ヲ著シク低メラレザル状態ニ存スト思惟シ得ベシ。蓋シ第三例癩痕部表皮ニ於テ肥厚增生ヲ示セルモノアルハ、一部這般ノ消息ヲ示セルモノナラン。

如斯ニシテ癩痕部、就中其中部等ノ表皮組織ガ増殖性ヲ高メラレタル状態ニ存スルコト、相俟ツテ、該癩痕ノ大部ヲナセル真皮組織ニ於テモ、看過スベカラザル變ヲ來スガ如シ。即癩痕部組織ハ、前記ノ如ク不規則ナル造構ヲ有スルヲ以テ、素ヨリ生理的皮膚ノ如キ官能ヲ期シ得ザルベク、從ツテ該部ハ個體ニ於ケル一種ノ抵抗減弱部ニシテ、屢容易ニ炎症等ヲ惹起シ得ベキ局所タリ。實際第三及參考例ノ邊縁癩痕部ニテモ見ラル、如ク、既ニ斯ル部ハ靜止状態ニ存スト思惟シ得ベキニ係ラズ、尙所々ニ圓形細胞浸潤等ノ變ヲ現ハシテ組織鬆粗トナレルモノアルハ、輕度ナガラモ該部ニ炎症性現象ノ續ケルコトヲ明示スルモノナリ。加之此部彈力纖維ノ減少並ニ其退行性變(第三例)乃至同纖維ノ消失ヲ現ハセルモノアリテ(參考例)、局所組織ノ發育抵抗ニ缺陷ノ存スベキコト著シク明白ナルモノアリ。而シテ癩痕ノ中部ニ於テハ、癩痕結成並ニ外來ノ影響等ノ關係ヨリシテ、如斯變化ハ最モ強度ナルモノ存スベク、從ツテ癩痕組織中ニテモ最モ抵抗薄弱ナル部タルベキハ、推測スルニ難カラズ。サレバ最近、早老期及老年期ニ於ケル皮膚彈力纖維ノ變化ガ癩前驅性變トシテ意義存ス(Hering⁽⁶⁾)ト唱ヘラレタルガ如キ、乃至癩痕組織ニ於ケル該纖維ノ變化ガ、圓形細胞浸潤等ノ變ト相俟ツテ癩痕癩ノ發生ニ適應セル母地ヲ形成スベシ(唐、伊藤^(前出))ト考ヘラレタル點ハ、以上ノ所見ニヨリテ追證セラレタルモノアリト信ズ。而シテ癩痕組織ハ一般ニ抵抗薄弱ニシテ癩發生ニ傾ケル性アルコト(Heidingsfeldt)ハ、上記ノ如キ表皮及真皮ニ於ケル組織の所見ノ考察ニヨリテ、始メテ確證ヲ得且其意義ヲ明確ニセラレタリト言フベシ。叙上ノ如ク癩痕組織ハ癩發生ニ先立チ、既ニ表皮ニ於ケル増殖性ト、真皮結締組織ニ於ケル抵抗減弱性トヲ併セ包藏スルモノニシテ、而モ兩者ノ間ニ生理的平衡ガ纖維セラル、モノナレドモ、其未ダ異型的増殖ニ傾カザル所以ノモノハ、畢竟此部ノ組織ノ秩序ヲ破ルガ如キ事態ガ發生セザルニ由ルベシ。若シ斯ル癩痕部ニ於テ、特

ニ炎症變ヲ惹起シ、又ハ其他ノ刺戟ニヨリテ起サレタル變ニヨリ、此部ニ於ケル組織ノ發育抵抗ガ特ニ減弱セル如キ場合ニハ、同時ニ如斯變ニヨリ表皮組織ノ破綻、再生等ヲ促ガスベク、從ツテ既ニ其増殖性ヲ高メラレタル狀態ニ存スル表皮組織ハ、其環境ニヨリテ更ニ惡化セラレ、而モ其官能ヲ完全ニ營爲シ得ズシテ、増殖性緊張ヲ保ツベキヲ以テ、此ニ異所的、異型的乳嚙性増殖ヲ營ミ之ヨリ次第ニ癌腫變性ヲ來シ(第一例等)、或ハ又該部ノ潰瘍性變化ニ續發シテ、次第ニ異型的乃至癌腫性浸潤性増殖ヲ來スモノ、如シ(前報告第三例及本篇第三例)。

而シテ余ノ檢索セル數例ハ火傷痕及銃創痕ヲ母地トシテ發生セルコト明カナルヲ以テ、斯ル外傷ハ癌腫發生ニ素地ヲ與ヘ、且特ニ其表皮組織ニ増殖性ヲ附與シタル意味ニ於テ看過シ難キモノアリ。而モ其發生部位ガ頭髮部ナルコトハ、氣象的影響、機械的其他ノ刺戟ガ、長期ニ亘リテ特ニ此部ニ強ク、反覆作用シタルコトヲ推察スルニ難カラズ。更ニ第二例、第三例ニ於テハ、此部ニ被ムレル外傷後ニ引續キテ異型性増殖ヲ來セルコト明カナリ。サレバ癩痕癩、少ナクトモ余ノ症例ニ於テハ外傷ガ素因的ニ又外因的ニ大ナル役目ヲナシタルモノト言フコトヲ得ベシ。即癩痕組織ノ有スル素因ハ極メテ重要ナルモノナレドモ、單ニ斯ル素因ノミニヨリテハ恐ラク癌腫ヲ發生スルコト能ハザルベク、其他ノ要約ガ之ヲ補助スルコト少ナカラザルナリ。サレバ癌腫發生ノ原因ヲ講究スルニ當リ、内因的關係ヲ考慮ニ置クハ又甚ダ重要ナレドモ、殊ニ外來的影響ノ皮膚癌ニ於テ等閑視スベカラザルハ、山極氏其他多數ノ實驗的研究ニヨリテモ推測セラル、所ナリ。勿論癌腫ノ發生ガ内、外因ノ共存ニヨリテ發スルハ極メテ明カナルトコロニシテ、又外因ニヨリ生ゼシ變化ガ内因的の要約ヲ來スコトアルガ故ニ、其原因の價値ノ輕重ヲ論ズルハ可ナリニ困難ナル問題ニ屬スレドモ、少クトモ癩痕癌腫、殊ニ余ノ諸例ノ如キハ、外因的因子ガ内因的因子ヨリモ決シテ輕カラズト言ヒ得ベシ。余ハ輓近腫瘍學上ノ知見ト實驗例ノ所見トヲ合セ考慮シテ、癩痕癌腫ノ發生及癩痕組織ノ癌發生ニ對スル原因の價値ヲ上述ノ如ク理解セントス。

四、本篇ノ梗概

(一)、本篇ハ頭髮部皮膚ニ原發セル角化性癌腫ノ三例及參考トシテ他部ノ皮膚ニ原發セル同様癌腫ノ一例ヲ組織學的ニ檢査シ記載セルモノナリ。

(二)、被檢頭髮部癌腫例ニ於ケル造構及局所性増殖ノ態度ハ、前報告ニ於テ記セル卑見ト一致スル點多ク、又他部ノ皮膚癌腫ヲ頭髮部ノソレニ比較スルニ、皮膚ニ於ケル増殖態度等ニ相似タル點少ナカラズ。之等ニヨリ頭髮部角化性癌腫ニ對スル見解ヲ明確ナラシムルコトヲ得タリ。

(三)、頭髮部癌腫ガ頭蓋骨ヲ侵襲スルハ稀有ノモノニアラズ、且此部ニ於テ増殖易クシテ爲メニ此部ニ掘鑿ノ狀ヲ示セリ。而シテ骨質ハ蝕骨細胞、間質結締織及癌索自個ニヨリ破壞吸收セラル。又頭蓋内組織中硬腦膜ハ癌腫ノ増殖ニ強キ抵抗ヲ與フルモノナレドモ、軟腦膜ニ於テハ其増殖容易ナリ。此部ヨリ大脳組織ヲ侵スニ當リ、血管周圍淋巴腔ヲ浸潤スルコト最モ多ク、時ニ稍壓迫性ニ侵入シ、此場合ニハ該局所ニ結締織増殖シ此ニ癌索浸潤スルコト最モ多ク、一部ニ於テ腦組織内ニ直接ニ亂入スル像アリ。

如斯浸潤ヲ蒙ムレル組織中、骨組織ニハ窩狀蠶蝕、脱灰、穿孔管形成、骨組織ノ反應性増殖等ヲ認メ、骨髓ハ纖維性トナリ、硬膜及軟膜ハ反應性ニ増殖性並ニ浸出性變ヲ示シ、大脳組織モ亦鬆粗トナリ神經細胞ノ消失、「グリア組織」ノ増生、「ノイロノフアギー」ノ出現乃至細血管ノ擴張、充盈及新生並ニ細胞浸潤等ヲ來セリ。

(四)、頭髮部角化性癌腫ハ一般ニ轉移性乏シク、最末期トナリ他臟器組織内ニ連續性増殖ヲ營ム場合ニモ、尙淋巴行性並ニ血行性遠隔性増殖ハ共ニ見ラレザルコト少ナカラズ。

(五)、第三例癌組織周邊ニ於テ、所謂側性増殖ヲ現ハセル表皮ノ部ガ著シキ異型的、異所的態度ヲ示シ癌組織ニ移行セルガ如キ像ヲ呈セルモノアルハ、所謂反應性増殖乃至代償再生的増生、或ハ癌索ト表皮トノ接着像ニハアラス。

コレ寧口癌腫トナリ得ベキ素因ヲ有スル組織部ガ其力ヲ展開セシモノナルベク、即本例ノ如キ癩痕組織ヨリ原發セシ癌腫ニ於テハ、初發部以外ニ於テモ、如斯變性ヲナシ得ベキ素地ヲ存セシニ基クモノナラン。

(六)、扁平上皮癌組織周邊ノ反應性炎症ヲ惹起セル部ニ當リ、屢甚ダシク多數ニ「エオジン嗜好細胞」ノ出現セルコトヲ認メ、殊ニ其比較的早期ニ出現シ、末期ニハ減少スルモノ、如シ。而シテ如斯局所ニ、爾ク多數ニ出現スルハ、一部ハ組織内ニ於テ直接分割ニヨリ増加スルモノナルモ、之ヲ以テ局所「エオジン嗜好細胞集積」ノ成立ヲ説明シ難ク、恐ラクハコレ亦骨髓性產生ニ基クモノナランカ。且之ニヨリテ癌組織周邊部ニ所謂防禦的隔壁ヲ形成シ、癌組織ノ増殖侵入ヲ消極的ニ防禦スルガ如キ、乃至之ヨリ產生セラル、毒物ヲ中和スル如キ意義ヲ有スルモノナランカ。唯甚ダ稀ナル場合ニ於テ此部ニ侵入シ來ル癌索ニ向ツテ積極的態度ヲ示シ、其胞巢内ニ多數ニ殆ンド純粹ノ狀態ニ集簇シ、其崩壞ト一定ノ關係ヲ示セルコトアリ。

(七)、癩痕組織ノ被覆上皮ハ、其先天性ニ有スル發育力ヲ其境遇ニ應ジテ後天性ニ鼓舞セラレ、一方眞皮組織モ亦其後屢惹起セラル、炎症變化及彈力纖維ノ變化等ニヨリ發育抵抗減弱ヲ強メ、以テ所謂癩痕ノ癌前驅性變タル本態ヲナスモノト思惟ス。

引用書目

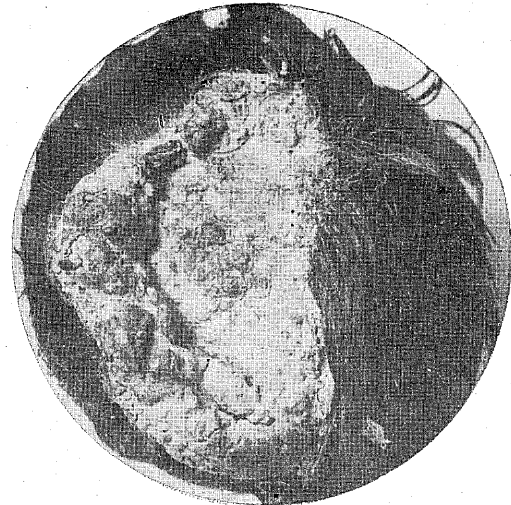
- 1) 茶谷良、頭髮部癌腫ニ就テ附癌腫性變ニ基ク部分的大腦脫出機轉、金澤醫科大學十全會雜誌第二十九卷、第一號別刷、大正十三年。
- 2) 土肥章司、Epitheliumニ就テ、皮膚科及泌尿器科雜誌第十八卷、第六號、大正七年、四二頁。
- 3) Enlich, (Fischer 4) 及 Schwarz(35)ニ據ル。
- 4) Feldbausch, F., Ueber das Vorkommen von eosinophilen Leukocyten in Tumoren. Virchow's Arch. f. pathol. Anat. u. Physiol. u. f. Klin. Med. Bd. 161 1900 S. 1.
- 5) Fischer, W., Ueber die lokale Anhäufung eosinophiler Leukocyten in den Geweben, besonders beim Krebs. Beitr. z. pathol. Anat. u. allg. Pathol. Bd. 55 1913 S. 1.
- 6) 藤浪隆、癌腫ノ病理(癌腫組織ノ増殖)、東京醫學會雜誌第十九卷、明治三十八年、五五七頁。
- 7) Hassin, G. B. and Singer, H. D., Histopathology of cerebralcarcinoma. Transac. of the americ. neurol. assoc. Jg. 1922 S. 124-140 (Ref. Zeitschr. f. d. gesam. Neurol. u. Psych. Bd. 33 1923 S. 96).
- 8) Hauser, (山極勝三郎) 胃癌發生論、明治三十八年(ニ據ル)

原著 茶谷 再々頭髪部癌腫ニ就テ(頭髪部角化性癌腫ノ病理追加)

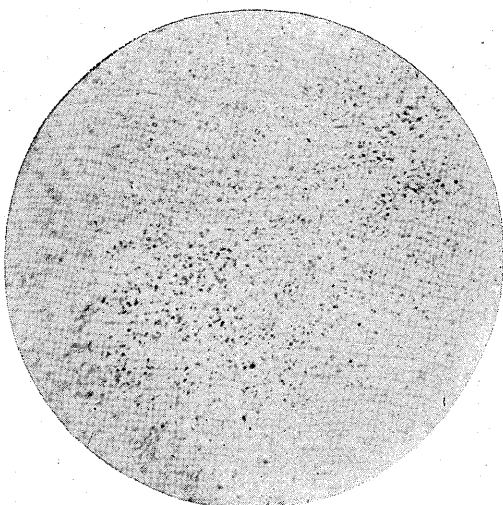
— 134 —

- 9) 林直助、鶏腫瘍ニ就テ、癌第十七年、大正十二年、二四三頁。
- 10) Heidingfeld, M. L., The etiologic role of scar tissue in skin cancer. The Journ. of Americ. med. assoc. Vol. 67 No. 21 1916 P. 1502.
- 11) Hilpert, P., Über das metastatische Carcinom des Zentralnervensystems. Arch. f. Psych. u. Nervenkrankh. Bd. 77 H. 1 1926 S. 93.
- 12) 本間英史、エカミン嗜好細胞及該細胞浸集症ノ病理學的並ニ生物學的研究、日新醫學第九卷、大正八—九年、二〇三頁、三六九頁、六七七頁、八一五頁、九五—一頁、一一三—一頁、一二七五頁、一三六七頁。
- 13) 片山久壽精、癩痕癩及癩痕肉腫ニ就テ、東京醫學會雜誌第二十九卷、大正四年、一六三—九頁。
- 14) 菊池武熊、惡性腫瘍組織ノ血管ニ對スル態度、東京醫學會雜誌、第十九卷、第二號別刷、明治三十八年。
- 15) 今裕、腹腔諸臟ニ汎發セル瀰漫性「サルモネラ」ニ就テ、附腫瘍組織内ニ發顯スル「エカミン」染色細胞ノ意義、東京醫學會雜誌第十六卷、明治三十五年、九—一九頁。
- 16) Kyrle, J., Die präkanzerösen Stadien der Haut. (Die Krebskrankheit. Wien 1925 S. 85)
- 17) Meiler, A., Zur Statistik der Hautcarcinome des Kopfes und Halses. Zeitschr. f. Krebsforsch. Bd. 6 1908 S. 64.
- 18) Naegeli, O., Blutkrankheiten und Blutdiagnostik. 4. Aufl. 1923.
- 19) 母崎文郎、兒田家四郎、白石青三氏遺骸剖檢錄(大腿骨々膜ヨリ發生セル軟骨肉腫ノ廣汎ナル肺轉移)、癌第十二年、大正七年、五九頁。
- 20) Neubürger, K. u. Singer, L., Über reaktive Veränderungen in der Umgebung carcinomafer und sarkomatöser Hirntumoren. Virchow's Arch. f. pathol. Anat. u. Physiol. n. f. klin. Med. Bd. 255 1925 S. 535.
- 21) Pappenheim, A., Über das Vorkommen einkerniger Zellen im gonorrhoeischen Urethralsecret. Virchow's Arch. f. pathol. Anat. u. Physiol. n. f. klin. Med. Bd. 164 1901 S. 72.
- 22) Przewoski, E., Ueber die lokale Eosinophilie beim Krebs nebst Bemerkungen über die Bedeutung der eosinophilen Zellen im allgemeinen. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anat. Bd. 7 1896 S. 177.
- 23) Ribbert, H., Lehrbuch der allg. Pathol. u. pathol. Anat. 7. Aufl. 1920.
- 24) 橋本篤一、ラヂウム療法ヲ施セマ表皮癌患者供覧、皮膚科及泌尿器科雜誌、第十八卷、第三號、大正七年、六九頁。
- 25) Schwarz, E., Die Lehre von der allgemeinen und örtlichen "Eosinophilie". Ergänz. d. allg. Pathol. u. pathol. Anat. d. Mensch. u. d. Tier. Jg. 17 Abt. 1 1914 S. 137.
- 26) 杉原格藏、火傷癩痕ノ鏡下所見ニ就テ、癌第一年、明治四十年、七一—六頁。
- 27) 夢沼憲三、家鶏肉腫(瘰癧、加藤兩氏粘液肉腫第二系)ノ轉移ニ關スル研究、癌第十二年、大正七年、二六—五頁。
- 28) 竹内節、血管内侵入腫瘍細胞ノ運命ニ就テ、癌第十一年、大正六年、二八—三頁。
- 29) 唐誠儒、伊藤實、癩痕癩ノ病理補遺、皮膚科及泌尿器科雜誌第二十六卷、第二號分刷、大正十五年。
- 30) 和田龜俊、陰囊癌ニ就テ、金澤醫學專門學校十全會雜誌第二十七卷、第十號別刷、大正十二年。
- 31) Weidenreich, Morphologische und experimentelle Untersuchungen über Entstehung und Bedeutung der eosinophilen Leukozyten. Verhandl. d. anatom. Gesellsch. 1908 S. 81.
- 32) Weill, P., Über die Bildung von granulierten Leukozyten in Karzinomgewebe. Virchow's Arch. f. pathol. Anat. u. Physiol. n. f. klin. Med. Bd. 226 1919 S. 212.

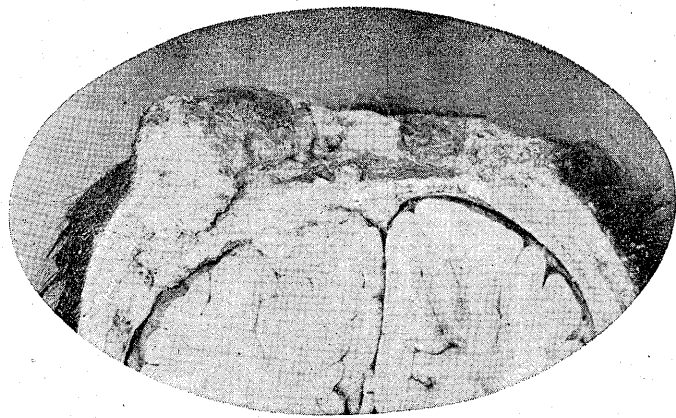
第一圖



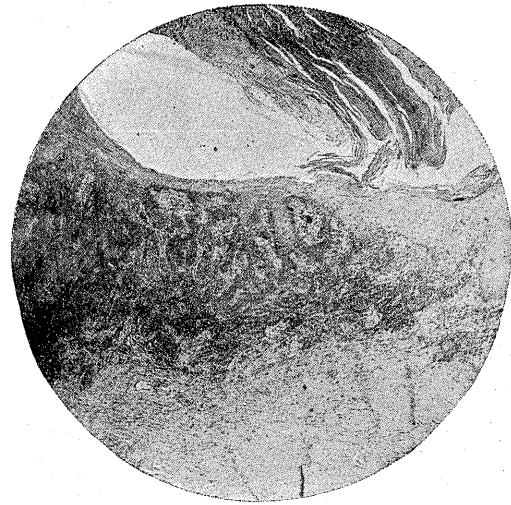
第三圖



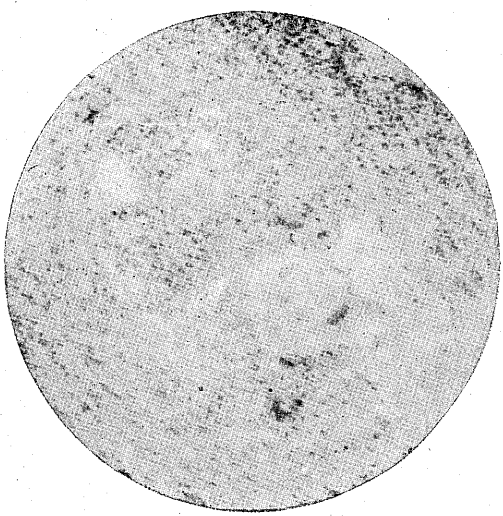
第二圖



第四圖



第五圖



附圖說明

第一圖

第二例癌腫ノ外景 其大部分ハ頭髮部外面ヨリ低マリテ凹凸不平ナル潰瘍性肉芽面ヲナシ、大小ノ結節アリ。其左側縁ハ著シク土堤狀ニ隆マリ一般潰瘍部トノ間ニ溝狀ノ部ヲ挾メリ。

第二圖

第二例癌腫ノ額面斷 潰瘍底ノ部ニハ全ク骨組織ヲ失ヒテ腫瘍性組織ニ侵襲セラレ、殊ニ左側顙頂部ニ於テハ硬腦膜及軟腦膜ヲ侵シテ大腦皮質ノ部ニ及ベリ。且腫瘍性組織ハ骨ノ存在部位ニ一致シテ侵掠スルコト最モ強ク、殊ニ左側ニ於テ著明ナリ。

第三圖

第二例癌腫ノ大脳内侵入部、顯微鏡寫眞 (No. 8) 顯微鏡、接眼鏡 K 8、接物鏡八耗) 癌腫性胞巢ハ不羈ナル像ヲ示シテ表層ヨリ侵入シ來リ、之ニ當レル腦組織内ニ著明ナル圓形細胞浸潤ヲ示セリ。該細胞浸潤部ノ深部ニ於テハ神經細胞尙少數ニ認メラル。

第四圖

第三例癌腫周邊部、顯微鏡寫眞 (No. 9) 顯微鏡、接眼鏡 K 4、接物鏡、ミクロプラナル「二〇耗」。癌腫周圍ノ癢痕部表皮ハ強キ肥厚ヲ示シ(右側)、癌組織ニ接スル部ニ於テ増生強ク其乳頭間上皮索ハ數ヲ増シ且吻合シ異型ヲ示スニ至リ、次第二癌腫組織(左側)ニ相移行セリ。斯ル部ノ真皮上層ニハ圓形細胞浸潤強シ。

第五圖

第一例癌腫周邊部、顯微鏡寫眞 (No. 10) 顯微鏡、接眼鏡 K 4、接物鏡四耗)。一般ニ圓形細胞浸潤ヲ示シ殊ニ「エオジン嗜好細胞多ク、其部ニ存スル癌胞巢ハ「エオジン嗜好細胞」夥多ナル浸潤ニヨリ囊狀ニ擴ガリ其大部分ハ崩壞セリ。